

---

# デジモンアドベンチャー 02 闇と光

ロクロク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー02 闇と光

### 【Nコード】

N6778V

### 【作者名】

ロクロク

### 【あらすじ】

アーマゲモンとの戦いから数ヶ月。大輔達はそれぞれ学年が上がり、平和を満喫していた。しかしそれは、嵐の前の静けさだった。現れる新たな敵、何者かによって建てられたダークタワー。謎の黒コートの男。

選ばれし子供達は、謎を解明すべく、デジタルワールドを調査する。

これは作者の初投稿小説です。

この小説は独自解釈、原作多少改変が含まれており、デジモンのキャラが大好きという人には特にお勧めしません。

ワンダースワンシリーズ、他シリーズ、漫画の設定を使っている  
で、  
多少デジモンを知らないと、理解出来ないかもしれません。（作者  
もうる覚え）

それでも構わないという方のみご観覧してください。  
後、感想で、こうした方がいいよ。などの書き方に関するアドバイ  
スを下されると嬉しいです。

## プロローグ

「・・・またお前達と合うことができるとはな・・・」

円卓と呼ばれるこの空間は、周りを円状に壁で取り囲まれている。そしてその部屋の中央には少年が立っており、その少年を取り囲むように十数個の大きさの異なっただった椅子があった。

椅子は高く、高さにはそれぞれ差があった。

その中で一番高い位置にある3つの椅子だけは同じ高さであった。

少年は周りを見回すことなくそう告げると、顔を俯けると、ため息を付く動作をし、再び顔を上げた。

その動作をじっと椅子から見つめていた、人型のモンスター・・・デジモン達は彼が顔を上げると少し微笑み、

「私達もこんなに早く、貴方と合うことになるとは思いませんでした」

十数体いるうちの一体・・・最も高い位置にある椅子に座っているデジモンが少年にそう告げ、

他のデジモン達も同意するような声を上げた。

「合つことは決まっていたのかよ・・・」

デジモン達の言葉に少年はそう呟くと、やれやれと言わんばかりに手を上げた。

「貴方は・・・やっぱり貴方なんですね」

「ああ。俺は変わらないぜ。・・・たとえ俺の  
俺は俺さ」

「くっッ！...!」「」

少年が呟いた言葉を聞いてデジモン達は驚きの声を上げ、少年を見つめた。

「だがそんなことはどうでもいい。そんな事よりも俺を再び呼び戻した理由は何だ。」

お前達が俺を頼るなど、よっぽどの事が起きない限りありえない」

少年はそう告げると辺りを見回し、ここにいる全てのデジモンの顔を見つめ、返答を待った。

「・・・やはり貴方には敵いませんね。・・・分かりました。全てを話します。」

「この世界・・・いや、このデジタルワールドだけではありません・・・」

「この世界とリアルワールドに危機が迫っています！」

彼はそう言うと、話すのを止め、少年の方をじっと見つめ、反応を伺った。

それに対して少年は一瞬気が抜けたような反応をとり、小さくため息をつき、すぐ真剣な顔に戻し、再び彼を見つめながら、返答した。

「そういうことを知りたいんじゃない。」

「こんな時にお前達が俺を呼び出す理由などそれぐらいしか存在しない。」

「俺が聞きたいのは、今、世界で何が起きようとしている?。」

少年の言葉を聞き、彼らは驚きの声を出したが、すぐに気持ちを切り替えて少年の目を少し見つめ、小さく笑いの声を上げた。

「フフ。流石ですね。やはり貴方は貴方だ。・・・分かりました。世界で起きようとしていることを説明しましょう・・・」

そう言つと、彼はこれから起きよつとしていることを少年に話始めた。

「……つまり奴だけではなく、奴らまで動きだそうとしているのか……」

確かにそれはマズイな……お前達も今回の戦いには参加できないんだろ？」

「……ええ。私達はこのデジタルワールドを安定させなければいけないため、

戦いにはほとんど手出しすることは出来ません……」

彼は、顔を俯け、悔しそうな表情を浮かながらそう告げた。

周りのデジモン達も悔しそうな表情を浮かべており、

中には声を大にして何もできない自分達を非難するような言葉を吐

いているデジモンもいた。

「気にするな。世界を安定させる事もとても重要な事だ。

俺にはそんな事絶対に出来ない。お前達がやっつてる事は、

お前達にしか出来ない事だ。だから・・・世界の安定は任せた。」

少年はそう言うと彼に背を向け、片手を空にかざした。するとその手の先に光が広がった。

すると少年に対して、先程まで話していたデジモンではないマントをつけたデジモンが

少年の名を呼ぶと、少年は歩みを止め、そのデジモンの方を向いた。

「私達と誓え！ たとえ、何があってもまたここに帰ってきてくると！」

そのデジモンは少年にそう告げると、周りのデジモンも同意するように声を上げた。

その反応に少年は驚くような動作を少し見せた。

だがその後少し笑い、そして顔だけではなく、体をデジモンの方に向けると、

手を肩ぐらいまで上げて拳を一瞬開いた。

すると少年の拳は一瞬白い光が広がった。

そして光が収まると、少年の拳には光る鍵が握られていた。

その鍵は、持つ所が白く囲まれて、その中心から黄色の棒がまっすぐ伸び、



その先が鍵のような形になっていた。

「わかった。俺は何があってもまたここにもう一度戻ってくると思う。このキープレードにかけて」

そう言うと、少年は白と黄色の鍵・・・キープレードを拳から消すと、背後にある

光・・・光の回路の方へと歩みだし、そして光が消えると同時に姿を消した。

## プロローグ（後書き）

ダメ文ですいません。

でも、主人公たちより遥かに書きやすい。

## 第一話 異変

心地い風が吹く中、

少年は日頃の乱暴な扱いのせいでポロポロになったランドセルを背負い、

トレードマークのゴーグルを付け、毎朝歩いている学校の通学路を歩いていた。

「大輔君 おはよう！」

少年・・・大輔は声をかけられた方を向く。

するとそこには嫌というほど見慣れた少年がこちらに向けて手を振っていた。

「おっす、おはよう」

あくびをしながら大輔はそう答えると、前を向き、歩き始めた。

それに対して少年・・・タケルはやれやれと言わんばかりに手を上げ、

大輔の隣まで小走りで接近した。

「最近は、遅刻せずに学校に着てるね」

「当たり前だろ、小6になってまで遅刻なんてしてられるか！」

そのような事を話しながら大輔とタケルは学校に着くまで雑談を交わした。

「おはよう、大輔君、タケル君」

教室に入ると大輔達に向かって少女が声をかけてきた。

「おはよう！ヒカリちゃん」

「おはよう、ヒカリちゃん」

大輔達はそれぞれ挨拶を交わし、荷物を自分の席に置き、ヒカリの席に向かった。

「そういえば、昨日、光子郎さんからの、メール、見た？」

ヒカリがそう言うのと、大輔とタケルはもちろんと返答した。

「もちろん！ 確か、明日の放課後、学校のパソコンルームに集合・  
・・だったっけ？」

「まあ、そんなかんじだね」

「でも急に集合なんて・・・」

上から大輔、タケル、ヒカリがそれぞれ話すと、それぞれ今回のメールことを考えたが、誰も心当たりがなく、結局、ホームルームを知らせるチャイムがなると同時に考えるのをやめた。

放課後になると、大輔達はパソコンルームへ向かうため、教室を出ようとした。

すると、教室にいた大輔達のクラスの先生が呼び止め、呆れるような顔をし、  
ため息をつきながら、お前は今日は掃除当番だと大輔に言った。  
すると大輔は、あつと驚き、そして照れるように頭をかき、

「げ！ そういえばそうだったかも・・・」

と言い、また先生に呆れられるような表情をされ、タケルとヒカリの方を

助けを求めるような目で見つめた。

それに対しタケルとヒカリはしょうがないと言わんばかりに手を上げ、掃除を手伝うことを了承した。

それを聞くと大輔は、飛び跳ねるようにジャンプし、喜びを体で表現した。

「はあああああああああ……やっと終わったぜ……」

大輔達は三人で教室を掃除したが、思った以上に時間がかかってしまい、疲労を口にした。

「掃除が終わったなら早く行こ。あれから結構時間が経ってるわ」

ヒカリがそう言うと、大輔は黒板の上にある時計を見、驚きの声を上げ、慌てて教室を飛び出した。

ヒカリとタケルもその後続き、教室を出た。

大輔達がパソコンルームに入るとそこにはすでに人が数人いた。大輔達が来たことに気づくと、その中の一人が大輔達の方に歩み寄ってきた。

「よお！ 遅かったな」

「すみません太一さん。今日は掃除当番だったんで・・・」

「そうか・・・まあそれなら仕方ないな」

太一はそう言うのと再びさつきまでいた場所に戻っていった。大輔達もそれぞれ開いている場所に行くと、カタカタパソコンを打っていた少年・・・  
光子郎が作業を中断しこちらを向いた。

「これで今日ここに來れるメンバーは全員集合ですね」

「ああ。今日ここに來れないヤマト、文、ソラ、ミミちゃん以外は集まった。」

だからそろそろ話せ。一体みんなを集めるほどの急用なんて・・・  
何があつたんだ」

太一が光子郎にそう言うと、

ここにいるメンバー・・・大輔、タケル、ヒカリ、賢、京、伊織は  
それぞれ光子郎を見つめた。

それに気づくと光子郎は一瞬目をつぶり、そして覚悟を決めたよう  
な表情をし、口を開いた。

「・・・デジタルワールドに奇妙な異変が起きています」

「・・・奇妙な異変?」

「はい。突然森が枯れだしたり、地形が変わったり、

デジモン達が暴れだしたり・・・ダークタワーが発見されたり」

「・・・ッ!」

光子郎の発言に太一達は驚いた。特に賢はダークタワーと言われて、  
声も出ないほど混乱していた。

しかしそれも無理は無いだろう。なぜなら賢はかつてダークタワー  
を使い、

多くのデジモンを傷つけてしまったのだから。



太一は混乱しながらも、ひとつ不可解なことがあるのに気付いた。

「待てよ！ デジタルワールドに異変が起きてるなんて事、アグモンは言っただけじゃなかったぞ」

太一の発言に光子郎と賢を除く者たちは、はっとした。

「そうだ！ ブイモンもそんなこと言っただけじゃなかったぞ！

俺はブイモンと毎日合っただけじゃないが、それでも週に5日は必ず合っただけ！」

大輔の言葉に二人を除くみんなは頷いた。

他の子供達もデジタルワールドが平和になってから、毎日会うことはなくなったが、

それでも週に4〜6日はパートナーのデジモンと話している。

それが少ないかどうかは別にして、とりあえず

デジタルワールドに奇妙なことが起きているのにそれを自分たちが知らないはずはない！

と言わんばかりの表情をみんなはしていた。

「昨日……て言えばどうですか」

「……え！？」「」

「・・・昨日の夕方頃にさっき言ったことが全部発生したって言えば分かりますか・・・」

「コッツ!!」「」

光子郎の発言に、太一達は驚きが隠せなかった。

しかし無理は無いだろう。先ほど説明されたことはどれも一日やそこらで発生するものではない。

特にダークタワーなんて、自然発生でできるものではない。

これは明らかに誰かのためによって作られたということはここにいる者たち全員理解していた。

「一体誰がそんなことを・・・」

「現在は全く情報がありません・・・」

伊織が呟いたことに光子郎は現状を返すと顔を俯けてしまった。

「・・・奴、かも・・・しれない・・・」

賢がそう呟くと、子供たちは一斉に賢に視線を向けた。

「賢! なんか心当たりがあるのか!？」

大輔がそう言うと、賢は小さく頷いた。

「・・・疼くんだ・・・僕の体にある暗黒の種が・・・奴が誰なのかわからないけど、

とにかく・・・疼くんだ・・・」

賢がそう言うと、みんなは奴が誰なのかを考えたが、誰も考えつかなかった。

場に重い空気が漂うが、それを取り払うように、電子音があたりになり響いた。

「・・・ゲンナイさんからのメールが届きました」

「「「!?!?!」」」

「内容は・・・!?!?!マズイ!皆さん、デジタルワールドに行きましよう!」

「一体何があったんだ、光子郎」

「凶暴なデジモンたちが集団でデジモン達のすみかを襲い始めたようです!」

「ッ!?!」

光子郎の発言で、周りの空気が変わった。  
子供達はとりあえず考えるのをやめ、ゲンナイに直接話しを聞きに行くことにした。

第一話 異変（後書き）

主人公達書きにくい・・・

## 第二話 謎

「・・・よく来てくれたな。選ばれし子供達よ」

太一達が、デジタルワールドへ行くと、そこには青年・・・ゲンナイがゲートの前で待機をしていた。

子供達は辺りを見回したがそこにはいつもと変わらない、平和なデジタルワールドがあった。

「ゲンナイさん・・・デジタルワールドに異変が起きてるってホントですか？」

京がそう言つとゲンナイは京を見つめた。  
京の目は嘘で有って欲しいという目をしており、ゲンナイはそんな表情を見ながらも、淡々と答えた。

「ああ・・・本当だ」

「そんな・・・でもデジタルワールドはこんなにも平和じゃないですか！」

「それは異変が起きてるのが僅かな部分だけだからだ・・・」

京の疑問にゲンナイがそう答えた。  
するとゲンナイは小さく首を横に振ると、言葉を返してきた。

「いや、違うな・・・今はこれだけですんできな・・・」

「どづいうことですか？」

「今は現地のデジモンやその近くのデジモン達が現れたデジモンを抑えてるからですよ」

京の質問に光子郎が答えると持っていたパソコンを開き、少しの間、カタカタと音をたてると、  
パソコンを子供たちの方へ向けた。

「これを見てください」

光子郎がそう言うと、子供達は視線を光子郎からパソコンの画面へ変えた。

パソコンの画面には、この大陸の地図が映っていた。  
しかし、子供たちは疑問の声を上げた。  
その地図には赤い点のような目印が所々点滅していた。

「光子郎。その赤い点は何だ？」

「今、調査中です。でもおそらく・・・ゲートです」

「「「ッ!」」」

太一の問に光子郎がそう答えると、子供達は驚きの声をあげた。

「どういう事だ! なぜゲートが開いたんだ!」

「分かりません。・・・しかし一つだけ言える事があります。

そのゲートは人間界に繋がってるのではないということですよ」

「デジタルワールドからデジタルワールドへゲートが繋がっていると  
言うことですか?」

「おそらくそういう事になります。タケルくん」

タケルに光子郎はそう答えると、光子郎はゲンナイの方を向き、真剣な眼差しで尋ねた。

「ゲンナイさん。とりあえずこの話は後に置いていて、今は集落を襲っているデジモンについて教えて下さい。」

「それもそうだな・・・分かった。説明しよう」



ゲンナイはそう言うと軽く、右手を上げた。するとゲンナイの目の前に大型のモニターが出現した。モニターは、4つの画面を表示しており、その内の3つにはモニターにはデジモン達が戦っている映像が映されておられ、残り1つの画面には白黒のノイズが発生しており、全くと言っていいほど見ることでできる状態ではなかった。

「これが今この大陸で起きている、デジモン達の襲撃じゃ。場所は全部で4つで、それぞれレオモン達などのデジモン達がすでに向かっている。おかげで3つの場所の鎮圧はそろそろ完了しそうなんだが……」

「この4つめの場所の状態がわからないんですね？」

光子郎の間にゲンナイは小さく呟いた。

しかし、ゲンナイは腑に落ちないというような表情をしながらも、小さく答えた。

「ああ。わからないんだ……この大陸は我らホメオスタシスによって完全に管理されてるはずなんだ。それなのに、この場所の情報が伝わってこない……いや、なにかに妨害されてるような感じがするんだ……」

ゲンナイはそう言うと、手を顎に当てるポーズを取りながら、考えこんでしまった。

しかし、ゲンナイがそうなってしまふのは仕方がなかった。

ホメオスタシスとはデジタルワールドの安定を望む者達のことをいう。

ゲンナイはそれに仕える、自律エージェントの生き残りだ。

ホメオスタシスとは、簡単にいえばデジタルワールドのセキュリティシステムのようなものだ。

そのような存在であっても、感知できないその場所に疑問を持つことは当然のことであった。

「・・・なら俺達がそこに行けばいいんだな・・・」

大輔が呟いた言葉にゲンナイは思考の世界から戻ってくると、真剣な表情で大輔を見つめた。

「・・・この場所になにが起きているかわかっていないんだぞ・・・」

「そんな事は言ってみれば分かる！　なら、俺達選ばれし子供がそこに向かうべきでしょ！」

大輔の真つ直ぐな目でゲンナイを見つめると、ゲンナイは小さく笑い、そして答えた。

「ふっ・・・さすがは勇気と友情の紋章を受け継いだ少年だ。

・・・他の者達もそれでいいのか？」

ゲンナイの間に大輔を除く選ばれし子供達はもちろんと頷くと、ゲ

ンナイは数秒目をつぶり、  
そして覚悟を決めたような表情をして、話し始めた。

「分かった。説明しよう……。4つ目のノイズの場所は、ここから南に行った。場所にある、洞窟 の前だ……。ほれ、君がブイモンと初めてあった場所といえはわかるかな？」

「わかった！ なら俺達はそこに向かいます！」

「まあ待て。話は最後まで聞くんた。その場所にはすでにピットモンを隊長とした、天使デジモンたち で調査に向かっている。向こうに行ったら彼らと合流し、共同で調査をするんだ！」

「わかりました！ピットモンですね？」

「ああそうだ。ちなみに一様言っておくが、ピットモンはエンジエモンの色違いのデジモンだ」

「わかりました」

「待て！ もう一つ言うことがある。現場には私のバードラモンを使って迎え！」

ゲンナイがそう言うと、子供達はなぜ！？と言わんばかりに疑問そうな顔をした。

ゲンナイはその表情に気づくと、説明を補足した。

「あの場所で何が起きているかわからないが、十中八九、ダークタワーがあるだろうだからな・・・」

進化して空から向かったとしてもダークタワーの発動範囲に入つて、進化が解けて、空から落下。 と、ならないようにな・・・。

「

なるほど確かに可能性は高そうですね」

ゲンナイの説明に光子郎は納得すると、分かりましたと、了承した。

「後、言うておくが、このバードラモンは戦闘が全く出来なくてな・・・」

そのかわり、普通のバードラモンより早いが、戦闘には巻き込まないでくれ」

ゲンナイの言葉に、子供達は了承すると、バードラモンに乗った。すると、バードラモンは小さく雄叫びを上げると、翼を大きく羽ばたき、南の方への飛び立っていった。

「気を付けるんだぞ、選ばれし子供たちよ・・・」

ゲンナイはそう言うと、粒子になって消えていった。

## 第二話 謎（後書き）

相変わらず、ダメ文ですいません。

次は、戦闘描写が少しはあるかも（戦闘描写って言うほど戦わない・

予定だけど）

戦闘描写難し過ぎる・・・

次は何時もよりダメ文だと思います・・・

### 第三話 悲劇（前書き）

パートナーデジモン達ほとんどしょべっていなかったorz

登場キャラが多いからそっちに気がついていました・・・

すいません・・・

### 第三話 悲劇

「……やはりダークタワーが立っていましたね」

光子郎は地面から真っ直ぐ立つ、黒い塔を見ながらそう言った。

「今すぐ破壊しましょう！」

賢は光子郎にそいうと光子郎は小さく首を横に振りつた。

「ダメです！ 今はピッドモン達と合流するのが先です！」

「でも光子郎、ダークタワーを破壊するぐらいならすぐに終わるじゃないか。

それに、ダークタワーがある限り、俺たちは進化することができない……」

それなら今の内に破壊するほうがいいんじゃないか？」

「……おかしいと思いませんか、太一さん……」

「……どういうことだ。光子郎？」

「こんなに目立つダークタワーを先に来た、ピッドモン達が気づかないわけがありません。

それなのにタワーが破壊されていない。しかも、タワーと地面周

辺の接触部分が不自然な跡が

残っています。

つまりピッドモン達、成熟期デジモン達でも破壊できなかったという事になります。

しかもピッドモン達は天使型デジモン。闇の存在であるダークタワーとは相性がいいはずです。

それなのにタワーが破壊されていない・・・つまり、ピッドモン達でも破壊できなかったということになります。」

光子郎が一気に説明すると、太一達も納得した表情を見せた。

「なので、僕達はまず、ピッドモン達と合流することを先決に行動しましょう」

光子郎の言葉に子供達は頷くと、目的の場所へ飛んだ。

「そろそろ目的地です。みなさん着陸の準備・・・ッ！！！」

「！ ！ どうしたんだ光子郎！？」



「・・・どうやら状態は僕達が考えてた以上に悪いです・・・」

光子郎の呟きに、子供達は何があったと言わんばかりに光子郎の位置から、目的地を見つめた。

するとそこには信じられない光景が目に入った。

頭がないデジモン・・・おそらくピッドモンが足から徐々に消えていく光景だった。

その周りには、卵・・・デジタマがいくつも転がっており、大半は無残にも砕けていた。

「そんな・・・」

ヒカリは目から涙を流しながらそう呟いた。

デジモンは死ぬか、寿命が尽きるか、力尽きると自らのデータをコピーし、デジタマに変わる。

そしてデジタマから孵るとデジモン達は暗黒のデジモン以外、前回の記憶を引き継ぎ、

生まれ変わることができる。

しかし、逆にデジタマが砕けるという事は、そのデジモンはもう、永遠に生まれ変わることなく、

ダークエリアと呼ばれるデータのごみ箱に意思を持たないデータとして送られてしまうという事だ。

ヒカリ達はデジタマが砕けたという現実を受け止める事は出来なかった。

しかし無理はない。

なぜならヒカリ達・・・いや、初代選ばれし子供達ですらそんな光景を目にすることがなかったのだ。

さらに、選ばれし子供と言われても所詮は普通の子供だ。

デジモンを倒す事にもためらうほどの、優しい心を持つ者達が初めてデジモンの本当の死をその目で

見てしまったのだから。

しかもデジタマは落としたりぐらいいじや絶対に割れることはない。

つまりこのデジタマ達は割られたのだ。完全な悪意を持って。

「・・・許さない・・・」

「「「え!?!」「」」

「絶対に許すものか!?!!!」

タケルの余りに小さく、そして別人のような殺気に子供達は失っていた冷静さを取り戻した。

「タケルさん・・・」

伊織は独り言のようにそう呟いた。

タケルは伊織にとって大切な仲間であり、そして心を一つにすることのできるジヨグレス進化の

パートナーである。だが、伊織には今のタケルの心の中を一切読み

取ることはできなかった。

「タケル・・・必ず仇を取ろう・・・」

「・・・はい」

太一はタケルにそう言うと、今後の作戦を話し始めた。

「まずはこの辺で着陸して、そこから歩いて向かおう。地上から、空中のバードラモンを攻撃されたら、今のバードラモンには避けることは出来ないからな・・・。という事でバードラモン。」

「この辺で着陸してくれ！」

太一がそう言うと、バードラモンは小さく吠え、その後、すぐ下の森の中へ着陸した。

「ありがとう。バードラモン！ お前は先にゲンナイサンの所へ戻っていてくれ・・・」

「ここから先は危険だ・・・」

バードラモンは頷くと、翼をはばたかせ、来た道に戻っていった。

大輔達は、太一と話すことができなかった。

太一は何時ものように振る舞っているように見えるが、怒っている

のが丸分かりなほど、  
目が鋭くなっていた。  
そんな様子を見たことがない、大輔達はかける言葉が見つからず、  
そして自分達の中にある怒りを  
抱えていたため、誰も必要なこと以外は話すことはしなかった。

「コッッッ!!」「ッ」

子供達が歩き出してから数分、先ほど空から見ていた場所・・・  
勇気のデジメンタルのほこらの前に着くと、子供たちの目に入った  
のは、先ほど空から見た光景・・・  
数個残ったデジタマと無残にも砕けた数十個のデジタマが転がった  
光景だった。

子供たちは自分の中で膨らんだ、悲しみと怒りを胸に閉じ込め、作  
戦通り、辺りを冷静に見渡した。  
しかし、周りには、デジタマと、戦闘の後が残ってただけで、  
それ以外は見パツと見ただけじゃわからなかった。

だが次の瞬間、ほこらの中から何かの影が飛び出た。

「ッッッ!!」「」

子供達の前にパートナーデジモン達・・・アグモン、テントモン、ブイモン、ワームモン、ホークモン、アルマジモン、パタモン、テイルモンは飛び出すと、何があってもパートナーは守る！  
という気迫を体から出し、戦闘態勢に入った。

ほこらから飛び出した影・・・赤と黄色の物体はそのままほこらのすぐ前で倒れた。

その物体は頭は頭から鼻ぐらいまでの大きな赤いマスクをつけており、背中には刀、拳には手裏剣が握られていた。

子供たちはそれがイガモンというデジモンだときずき、驚きの声を上げたがイガモンがうつ伏せで倒れたまま手を子供たちの方へ震えながら上げると、かすれすような声でいった。

「た・・・たすけ、て・・・」

子供達はそれを聞いて、急いでイガモンに駆け寄ろうとしたが、その瞬間、黒い影がほこらから飛び出した。  
子供達はそれに驚き、歩みをやめた。

黒い影は飛び出した勢いのまま、イガモンの上まで行くと、手に持っていた何かでイガモン額を貫いた。

「がっ！！！」

イガモンはそのまま動かなくなり、そして粒子を出し、そしてイガモンのいた場所に、デジタマが出現した。

ヒカリ達は声を出すこともできなかった。

目の前で助けをもとめたデジモンを今まで見たことが無いほど、残酷な方法で殺されたのだ。

まだ子供の彼らには余りにも信じることができない現実だったのだ。

黒い影・・・黒いコートを着たそれは、顔をフードで隠しており、両手には手袋を着けていた。

つまり、まったく体が見えなかった。・・・その者の手には真っ黒い鍵のような剣が握られており、

その剣先は、デジタマの方を向いていた。

そして、黒コートの者が腕を大きく振り上げると、固まっていた、子供達はそいつが何をしようとしているのかにきずき、必死に停止の声を上げた。

しかし、黒コートの者はその声を無視し、剣を持った腕を振り下ろした。

### 第三話 悲劇（後書き）

戦闘描写入れられなかった・・・

でもオリジナル展開はめちゃくちゃ書きやすい！

オリキャラはさらに書きやすい

ダメ文をなのに、よんでくれてありがとうございます！

#### 第四話 驚愕（キョウガク）

『ベビーフレイム！』

その瞬間、アグモンが技名を叫びながら、火の玉を吐き出した。火の玉は真っ直ぐ黒コートの方に向かって、飛んでいった。黒コートの者はそれを軽く右にジャンプをして避けた。それを待っていたかのようにテントモンは男がデジタマから離れた瞬間、自身が出せる最高速度でデジタマのところまで行き、そしてデジタマを持って、子供たちの後ろまで飛んでいった。

子供たちはデジタマが割られなかったことに、安堵のため息を付いたが、コートの者が何をしようとしていたかを思い出すと、コートの者を睨みつけた。

コートの者かというと、攻撃を避けてからずっとこちらを向いたままだった。その様子は、不気味以外の何物でもなかった。

しばらくこの誰も喋らない沈黙の時は続いたが、この空気の中、ヒカリは、コトーとの者に向かって話しかけてきた。

「・・・どうしてあなたはこんなことをするの？」

しかし、黒コートの者はヒカリの質問に答えず、こちらを向いたままだった。

すると、ヒカリは質問内容を変えて、再び話かけていた。



「ここにいくつも割られているデジタマをこつしたのは貴方？」

「・・・」

「答えるよ！ー！！」

ヒカリの質問に黒コートのは者は答えずにいると、

その反応に対しタケルの怒りが爆発した。黒コートのは者に向かって殺意のこもった声でそう叫んだ。

黒コートのは者は小さく笑うような動作をとると、初めて、子供たちの前で声を出した。

「フン、もし俺だと言ったらどおくなるんだ・・・？」

黒コートのは者・・・男は馬鹿にするような言い方でそう言つたとタケルは怒りを膨れ上げながらも静かに答えた。

「そつだとしたら・・・お前をここで倒す！ー」

「倒すつて、殺すの間違いだろ？」

タケルの言葉に男はニヤ付いてるのがわかるような言い方でタケルにそう返した。

「でも、まだ死にたくないしな・・・僕じゃありません!!」

明らかに聞こえるようにそう呟き、そして先程とは全く違う声・・・人間で言う、小2ぐらいの声でそう答えた。

その反応にタケルの怒りが更に増加し、再び大きな声を上げようとした瞬間、それは太一によって止められた。

「タケル！ 気持ちは分かる。でもここで冷静さを失えば、それはヤツの思うツボだ！」

太一がそう言うと、少しは頭が冷えたのか、タケルは顔をうつむき、分かりました、と呟いた。

「・・・お前は一体何者なんだ？」

「フン！ 馬鹿か・・・誰が折角お前たちに何も知られていないというアドバンテージを捨ててまで、お前たちというバカがどこにいる？・・・お前たちはそれが通用するようなぬるい戦いしか経験したことがないのか・・・」

「？ どういうことだ!？」

「じつちの話だ」

「・・・お前はなぜこんなことをする？」

「何故って、理由があれば今回のことなかったことにしてくれるのか？」

「そんなはずがないだろう！ お前がやったことは、消して許されることじゃないんだ！！」

太一と男の話の中、賢がそう叫んだ。

賢は昔、デジモンカイザーと名乗って、デジモンたちを傷つけていた時期があった。

今は、その時のことを後悔しており、償えることじゃないとわかっているながらも、デジタルワールドの警備や復旧作業を人一倍頑張っているのだ。そんな彼にとって、デジモンが理不尽に傷つくことはどんな理由があっても許すことのできないことだった。

男はなぜか賢が言った言葉に対して、すぐには言い返しては来なかった。

話すようになってからは今まで、言われたら、すぐに言い返してくほどの男がなぜかこの時は、賢が話し終わってから数秒かかった。

「・・・そうか・・・。ならお前たちも俺と同じようなことをしていから、お前たちも許される存在じゃないな」

「お前と俺たちを一緒にするんじゃないやねえ！！」

大輔が男に向かって叫んだ。

大輔たち選ばれし子供たちは、自分がやっていることに誇りを持って

いた。

それを自分たちと同じと言われ、大輔は黙っていることが出来なかった。

それに大輔にはデジタマを壊した覚えなど、一切なかった。

「一緒にするな、か・・・何が違うんだ？ 勇気と友情の紋章を受け継いだ者よ」

男が言ったことに対し大輔は怒りを燃え上がらせ、再び声を大にして言い返そうとしたが、  
太一によって止められた。

「・・・どうして紋章の種類まで知っている？」

「何度も言わすなよ。なぜお前たちに説明しなければならない？

・・・こういう時は最低でもこつちにとって利益なことなものを用意しなければ、

お互い、公平とは言わないだろ・・・

でも、別に言ってくれるかは置いておいて、相手に質問するのはいいことだと思っぜ。

「・・・わかった。質問を戻そう・・・。どうしてお前と俺たちは一緒なんだ？」

俺たちはお前のようにデジタマまでを破壊したことはないはずだ！」

「別にやり方まで、同じとは言っていないだろ。お前たちは俺とは違うやり方で、デジタマを破壊しているだけだ。」

「・・・どういうことだ？」

「まあこれは俺に関する話じゃないからな・・・まあ答えてやろう。まずお前たちが殺したデジモンの名を数体言っただけ・・・デビモン、エテモン、ヴァンデモン、ディアボロモン、スカルサタモン・・・どいつも知ってるだろ？お前たちがこいつらを倒したとき、デジタマは発生したか？」

男の言葉に太一たちは考えた。しかし記憶を引きずりだして思い出してみても、奴の言ったとおり、デジタマが発生しなかったということを思い出した。

「どうだ？」

男はさつきより少しだけ高い声でそう言っていた。

わかっているのだろう。自分が言ったデジモンが、子供たちが倒されたとき、デジタマが発生しなかったことを。

「・・・確かに発生しなかった・・・ヴァンデモンと、エテモン、スカルサタモンに関しては、理由がわかるが、それ以外はわからない・・・」

「フン！・・・今の時点でお前たちは俺と同じデジタマ殺しじゃないか？ だって分かっていたんだろ？ 人間界・・・リアルワールドで死んだデジモンは生まれ変わることができないことくらい・・・」

「

太一たちは男の言葉に何も言い返すことが出来なかった。確かに自分たちは知っていた。人間界でデジモンが死ねばどうなるかを。

「それとそいつら以外のデジタマが発生しない理由は・・・お前たちが完全なる殺意を持ってデジモンを倒したからだ。

聖なる力は完全なる敵意を向けて、敵を攻撃し、そして、倒してしまつとデジモンはデジタマとなつて生まれ変わることができないんだ・・・まあ、ディアボロモンは例外だけど、とりあえず、心当たり・・・あるだろうか？」

「・・・」

「まあ、お前たちが殺したデジモンは他にもいるが、ここでこれ以上いう意味はない。」

「で、でも、仕方がなかつたんだ！ 倒さなければ被害者が出ていたんだ！」

「どんな理由があつても許されることじゃないのか・・・希望の紋章を持つ選ばれし子供よ」

「・・・確かに私たちはあなたと同じ事をしていたのかもしれない・・・でも、私たちは倒さなければならぬ状態だった。あなたと違って！」

「俺にも理由はあるさ・・・殺意を向けられ、殺されそうになつた

から、殺したんだよ。  
ほらどうだ？ 正当防衛は立派な理由だろ？ 愛情と純真の紋章を受け継いだ選ばれし者よ」

タケル、京の言葉に男は、冷徹にそう言った。

「京さん！ これ以上こいつと話しても無駄です！ これ以上の被害者が出る前に、ここで倒しましょう。」

「そうだぎゃ〜！ ここでコイツを倒さないと、絶対に被害者がでるだぎゃ〜！」

ホークモンとアルマジモンの言葉に、子供たちは考えるのを後にして、この男を倒してからにしようと思得した。  
しかし、ヒカリは、その言葉には賛成しなかった。

「ダメよ！ 話し合いが出来ているんだから、ここで戦う必要はないわー！」

「そ〜だよ〜争いは失うばかりで、得るものの方が遥かに少ないよ〜」

ヒカリの言葉に、男は先ほどまで話していた声より、優しそうな声でそう言った。

その反応に対して、ヒカリを除く、子供たちと、デジモンたちは一

層の決意を固めた。

「ヒカリ・・・わかってくれ・・・。こいつは俺達の話なんておもしろ半分で聞いているやつだ。」

「ここでこいつを倒さなかったら、もっとたくさんデジモンたちが倒され・・・死ぬんだぞ。」

「ヒカリはそれでいいのか？」

太一の言葉にヒカリはうつむいてしまった。しかし、しばらくすると顔を上げ小さな声で尋ねてきた。

「・・・本当にそれしかないの？」

「ああ・・・」

「・・・わかった・・・」

ヒカリがそう言うと、太一と光子郎を除く、子供たちはカバンやポケットからD3とDターミナルを取り出し、手に持った。

「いくぞ、みんな！」

「・・・わかった」「」

「・・・デジメンタルアップ!!」

子供たちがそう言うと、Dターミナルから光が飛び出し、そしてそ



の光がD3にあたり、そこから各デジメンタルが飛び出した。  
すると、ブイモンたちは光に包まれた

男がニヤリと口を歪ませたのは、フードのせいだ、誰も気がつか  
なかった。

#### 第四話 驚愕（キヨウガク）（後書き）

デビモンするとき・・・デジタマは発生しませんでしたよね？  
すいません・・・記憶が曖昧です・・・

アルマジモンやばいほど使いにくい・・・  
もうあんまり喋らさないでおこうかな・・・

戦闘描写はつき・・・あるにはあります。  
ちなみに絶対に次は戦闘描写があるのでクソ文の可能性が高いので  
覚悟をしておいてください・・・

本当はバイトの前・・・9時30分には完成したのですが、  
サブタイトルを入れずに投稿してしまっただため、エラーが起き、  
すべて消えてしまいましたorz

第五話 困惑（前書き）

パートナーデジモンファンの皆さん・・・ごめんなさい

## 第五話 困惑

「「「え!?!」」」

子供たちは困惑の声を上げた。

なぜならデジモンが進化中にもかかわらず、男がこっちに向かって、先ほどのテントモンのスピードを超える速さで走って来たからである。

男は自分の攻撃が当たる範囲まで接近すると、初めにいつの間にか手ぶらになっていた右手で、

進化中のブイモンの喉を突き刺した。

「がっは!?!」

ブイモンはそのまま後ろに後ろに飛んでいくと、光りに包まれ、幼年期デジモンのチコモンになっていた。

男は次に近くにいた、アルマジモンのところに行くと、ホークモンがいる方がけておもしろいきり脇腹あたりを蹴り飛ばした。

直接攻撃されたアルマジモンはもちろん、かなりのスピードで飛んできたアルマジモンと激突したホークモンのダメージはひどく光が消えると、各ポロモン、ウパモン、に退化していた。

その次は、パタモンの方へ向かうと、左手でパタモンの腹を思いっきり殴り飛ばした。

吹き飛んだパタモンはダメージのせいでトコモンに退化した。  
最後に残ったティルモンを男は左足で蹴り上げた。

吹き飛んだティルモンが光が消えるとそこには成熟期のままのティルモンがふらふらと立ち上がった。

成熟期の防御力のおかげで退化することはなかったが、進化が中断されてしまい、次に進化するほどの体力も残されていなかった。

男はそれで満足したのか、先ほどまでいた位置にバックステップで戻るとこちらに向かって、ケラケラと笑いながら言った。

「おや〜？　なんで進化の光に包まれたはずなのに、進化してなく、逆に退化してるのかな〜？」

男の言葉を聞きながらも、子供たちは傷ついたパートナーの元へ向かい、自分の腕の中へと抱きしめた。

「ちよつと！！！！　進化中に攻撃なんて卑怯よ！！！！」

京が男に向かってそう言うと、男は笑うのをやめ、怒りのこもったような声で言ってきた。

「あ〜ん！？　卑怯だと！？　笑わせるなよ！　多勢に無勢で戦ってきたお前たちに言われたくないな……。それに先に武力行使してきたのはお前たちだろ？」

俺を勝手に倒すとか言ってきたやつが……。それに俺はまっすぐ正面からお前たちを攻撃したんだぞ！

後ろからいきなり攻撃してきたわけでもあるまいし……まあ、後ろからの先制攻撃も立派な戦い方だ。多勢に無勢のお前らにくらべたらよっぽどのな！」

男はそう言うと、一息つき、再び話し始めた。

「それに進化中に攻撃される可能性があるってことはわかってたんじゃないか？」

勇気の紋章……もうめんどくさい、八神太一、泉光子郎！」

太一と光子郎は何も言い返すことは出来なかった。

自分たちはかつて、ディアボロモンとの戦いでそれを経験したはずだったのに。

「さうて。お前らの中で後、戦えそうなのが、アグモンとテントモンとワームモン……後ぎりぎりテイルモンといった所か」

男はそう言うと、アグモンと、テントモンは俯いていた。

彼らは自分たちの行動に後悔していたのだ。

ブイモンたちは進化中だったので動けなかったがアグモンたちはそんなことはなかった。

しかも、アグモンとテントモンは、ディアボロモン戦で進化中に攻撃を受けた張本人だ。

なぜ、その時の経験を活かせなかったのか……と思っていたのだ。

男はそれをアグモンたちの様子から理解すると、視線をデジモンか

ら子供たちへと変えた。

「さうて。俺としては別にお前らを見逃してもいいんだが、お前らは俺を倒すとか言ってたな・・・」

ここで見逃せば、コレから先、お前たちに命を狙われながら、暮らさないといけなくなるな・・・そうになると、やっぱりお前らにはここで消えてもらうのが良さそうだな・・・

だが勘違いするなよ？ お前たちが先に喧嘩を売ってきたんだ・・・

「

男はそう言いながら一歩ずつ子供たちへと近づいてきた。

子供たちは初めて自分たちに向けられそうになっている圧倒的な力に足が震えて動かなかった。

54

しかしそれも無理は無い。子供たちは殺意を向けられたことすらほとんどないのだ、攻撃の余波は受けたことはあるが、まして、自分たちに向かって直接力を向けられそうになるなど今までになかったのだから。

しかもその力を持っているものが一歩ずつゆっくりとこっちに歩いて歩いてきてるのだ。

男は子供たちの3m手前で止まると、冷たい声で言ってきた

「さうて。最後に言い残すことはないか？」

子供たちは口を開くことも出来なかった。

デジモンたちは、攻撃すればその瞬間から、周りもろとも攻撃させると思っているため、動くことは出来なかった。

子供たちの中にはここまでか・・・と呆れ目ているものでさえいた。しかし、その圧倒的な空気の中、その空気を破壊する言葉が一人を除く、子供たちの耳に入ってきた。

「じめんなさい！！！」

「「「え???.?」「「「

ヒカリがそう言って、頭を下げると、子供たちは先ほどまで口を開けることすら出来なかったはずの口から困惑の声を出した。

男は驚く素振りひとつ見せずじっとヒカリの方を見つめると、言



葉を発した。

「……どうして謝るんだ？」

「だって、お互い話し合っていたのに急にこっちがあなたを明らかに攻撃するような素振りを見せたからこんな事になっているんですよ？」

「……でもお前が謝る必要はないんじゃないか？ お前は最後まで攻撃に関しては、反対してただろ？」

「……それでも私も最後にはそれに賛成してしまったから同じよ・  
・  
だから、本当にごめんなさい……」

ヒカリはそう言うと、再び頭を下げてきた……

男はその様子にため息をつくと、さっきまで出していた殺気をなくすと、話をしてきた。

「……流石は光の紋章を持つ選ばれし子どもだな……わかった。今回のことはお前に免じて水に流そう。」

「「「え！？」「」」

「だが勘違いするなよ……これは貸した。いつかは何かで返してもらおう……」

男はそう言つと子供たちに背を向け片手を空にかざした。  
するとその手の先に闇が広がった

男はその闇の中に入っていった。

「待て！」

男は声が聞こえた方向・・・タケルの方を見ると、そこには睨むような目をした少年がこちを睨んでいた。

「・・・僕はお前を絶対に許さない！・・・」

「・・・ああ。分かっている」

男はそう言つと闇に包まれそしてそこから姿を消した。

## 第五話 困惑（後書き）

急展開でしていません。

でも、こんな感じになることははじめから決まっていたもんで・・・  
もし、こんな展開が嫌という方が多数いらしゃる場合は、一部描き直すので感想に書いてください。

一様、頭の中には結末と、所々の展開は決まっていて、登場キャラクターもほぼ決まっているので、完成はさせるよう、頑張ります！

・・・いつか外伝を書けるといいな～・・・

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

## 第六話 出会い

子供達とはデジモンは、しばらくそこで休んでから、アーマー進化できるくらいまでデジモンたちが回復すると、デジタマを持って、ゲンナイの家へ帰っていった。

「行っただか・・・」

その様子を森の中で見ていた2つの影が、子供たちが去るのを確認すると、先ほどまで子供たちがいた場所へ歩いていった。

「そのしてもアイツら、——にコテンパンにされてたね」

「ああ・・・だがあいつ相手じゃ仕方ないさ」

「そうだね・・・で、アイツらは使えそう？」

「そうだな～・・・ちょっと無理そうかな・・・」

「ええ！？　ここまで来たのに無駄足かよ・・・」

「そう言うなって。これからはしばらくこの世界で過ごすことも多くなるだろうから、まあ地形の確認とでも思ってくれ。  
それに・・・徐々にアイツらの顔を見れてうれしかったし」

「どうせ嫌でも毎日顔を合わせることになるんだから別に今日会わなくてもよかったじゃん！」

「そう言うなってモノドラモン……」

少年がそう言うと、モノドラモンはまったく……と言いながらため息を付いた。

「もうすぐ、この場所の監視のセキュリティが修復される！ さっさと、目的を果たそうぜ！」

モノドラモンが少年に向かってそう言うと、少年は、わかったわかったと言いながら、モノドラモンから離れた。

すると次の瞬間、モノドラモンは光に包まれ、光が消えると、そこには赤い羽根みたいな物を生やした、体の所々がサイボーグで出来た、人型のデジモンがいた。

「行くぞ！ サイバードラモン！」

「ああ。わかった……」

リョウ！」

選ばれし子供たちはあれからゲンナイさんの家へ行き、さっきの出来事を話そうとした。  
しかし、光子郎が、

「僕一人で十分です」

と言うと、みんなもそれに納得し、先に帰ることにした。

そして、しばらく話し合っているうちに、今日は太一の家で泊まることになった。

明日からは週末で、太一の家には今日は親が帰ってこないため、こういうことになったのだ。

しかし、子供達は浮かれる様子を見せなかった。

なぜかと言うと、今回、みんなが一つの家に集まる目的は遊ぶためではなく、

今回あったことを話し合うために集まったのだから・・・

「さて、早速で悪いが光子郎！」

太一がそう言うと光子郎は頷き、辺りを見回した。

今回太一の家で泊まることになっているのは、

大輔、賢、京、タケル、光子郎、ヤマトの全6人だ。

伊織は明日明後日に剣道の試合があるため、今回は席を外している。

ヤマトは光子郎から連絡がでここにいる。

ヒカリは元々この家の住民だから、ここにいる。

ちなみにデジモン達は、自分のパートナーの膝に座っている。

「まずは、今回の出来事をまとめたいと思います。

ちなみに、ヤマトさんには大雑把に説明はしています・・・

今回僕たちはゲンナイさんの連絡でデジタルワールドに向かいました。

そして、なぜかモニターに映らなかった場所を僕たちが調査することになりました。

ここまでは大丈夫ですね？

光子郎の言葉にみんなは頷いた。それを確認すると、光子郎は話を再開した。

「分かりました。そして僕たちはまず、先に調査をしているピッドモン達天使型デジモンのグループを探すことを目的に行動を開始しました。すると、ダークタワーを発見しました。

このダークタワーはすでに何者かによって攻撃された跡がありました。

僕たちはそれをピッドモン達と仮説を立て、僕たちには破壊できないと結論をだし、

とりあえずは放っておくことにしました・・・そして、今から言うことは、ゲンナイさんと話して、分かったことです・・・。

ダークタワーは、僕たちがゲンナイさんの家に帰っている途中で何者かによって破壊されたようです」

光子郎の言ったことに対して、子供達は驚きの声を上げた。

「どういうことだ？ 光子郎。あのタワーは成熟期の天使型デジモン達が束になっても破壊できないほどの強度を持っているはずだろ？」

「はい。そのことに関してはゲンナイさんが他の場所のダークタワーを調べて確認済みです」

「という事は、少なくとも、完全体デジモンか・・・。光子郎、お前たちが戦ったっていう黒コートの男が怪しくないか？」

ヤマトが光子郎にそういうと光子郎は右手をあごにつけながら言っ



た。

「僕もそれが一番可能性が高いと思っています。．．．でも、それだと、いろいろふに落ちないことがあるんですよ．．．」

光子郎がそういうと、子供達も考え込んだ。

「もし仮にあの男がタワーを破壊したとすると、彼が消える際に使った、闇の回路を使う意味が分からないんですよ．．．」

「光子郎さん！　闇の回路ってなんすか？」

大輔がそう言うと大輔と光子郎を除く子供達とデジモンはわからないそんな目で光子郎を見つめてきた。

光子郎はそれを見ると、しまったと言わんばかりの顔をした。

「すみません。説明していませんでした。」

闇の回路とは、闇の力を持つ者だけが使える道みtainなものです」

「闇の力を持つもの．．．」

「はい。ちなみに心が強くないと使えないそうです」

「心が．．．強い？」

「心の強さとは、簡単に言えば、覚悟の強さ、決意の強さ、などといった、心に関する強さを持っていることを言うようですよ。」

タケル、ヒカリの言葉にそれぞれそう答えると、光子郎はパソコンを取り出し、あるデータを見せてきた。

そのデータは古い本のページをデータ化したものだと言った。光子郎は説明すると、マウスで画面を動かさず、あるページの所で、マウスを止めた。

「みなさん……これに見覚えはありませんか？」

光子郎がマウスで指した先には子供たちが先ほど見たもの……黒コートの男が初めに持っていた、鍵のような剣が載っていた。

「これは、キープレードというものです。」

光子郎が言ったことに対し、テイルモンは驚きの声を上げた。

「キープレードですって!? なぜそんなものをあいつが持っているんだ!？」

「テイルモン……この鍵みたいな剣を知っているの?」

「……ああ。キープレードとは本当に心が強い者にしか使えない

と言われている伝説の剣で、  
絶対に折れることのない武器で、ホーリーリングをクラス以上の力  
をもっているらしい……」

ヒカリの質問に、テイルモンはそう答えると、光子郎が捕捉で説明  
した。

「ちなみに、キープレードには3種類あるようです。一つは光のキ  
ープレード、一つは闇のキープレード、そして、Xブレードと書い  
て、キープレードと読むと読むそうです。

光のキープレードは、さっき言った条件と、決して歪むことがない、  
光を持つことらしいです。

闇のキープレードは、さっき言った条件と、決して消えることがな  
い絶対的な悪の感情らしいです。

……ちなみに奴が持っていたキープレードは闇のキープレードで  
す……」

「……という事は、奴は絶対的な悪の感情を持っているってわけ  
か……」

光子郎の言葉に太一がそう言つと、ヒカリは少し考えるような表情  
をした。

しばらくすると、考えがまとまったのか、静かに、そしてハッキリ  
といった。

「私……あのデジモンが悪いデジモンに思えないの……」

「何を言ってるんだ、ヒカリちゃん！ あいつらはパタモン達を攻  
撃してきたんだよ！」

「それは私たち彼を明らかに攻撃するような行動をとったからだよ！」

「でもその前にイガモンを殺したじゃないか！」

「そ、それは……」

「それに、あいつはピッドモン達も殺したんだよ！ 僕はあいつを絶対に許さない……」

ヒカリとタケルはそれぞれ言い合つと、ヤマトが間に入ってきた。

「二人とも、落ち着け！」

ヤマトがそういうと、二人は言い合つのをやめた。

太一はヒカリをじっと見つめると、ヒカリ対して、質問を投げかけた。

「ヒカリ……お前は どうしてあいつを庇うんだ？」

「……わからない……でも どうしてか彼が悪く言われるのがいやって思う気持ちがあるの……」

結局、今後のあの男に対する解決法は見つからず、  
ダークタワーの件も結局は情報が集まってから、また話会うことにな  
った。

土曜日と日曜日を使って、デジタルワールドを調査したが、何も見  
つからなかった。

第六話 出会い（後書き）

大輔達空気過ぎ・・・

次はあいつが・・・

## キャラクター紹介 原作主人公編（前書き）

今更ですがキャラ紹介を作ったので投稿してみました。

・・・・・・・・本当はだいぶ前から書き始めたは居ましたんですが、原作キャラの説明を書いているときはあまりにもヤル気が出ず、こんなにかかってしまいました・・・・・・・・

・・・・・・・・まあアニメ原作主人公キャラの説明はかなり少ないですが、

それ以外のキャラの説明は細かくする予定なのでご許してください・・・

## キャラクター紹介 原作主人公編

やがみたいち  
八神太一

デジモンアドベンチャー（以降無印）の主人公。

昔は口よりも体が先に動くタイプだったが、昔の旅の経験から、

今は、考えてから行動するように心得てる。

勇気の紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはアグモン。

中三で今年は受験だが、すでにサッカーの推薦を受けており、そのコーチにも事情を説明しているため、デジタルワールドに行く時にはいつもいる。

八神ヒカリ（やがみひかり）

無印の選ばれし子供。前作は途中から、8人目の選ばれし子供として、

太一たちとの旅に加わった。光の紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはテイルモン。

デジモンアドベンチャー02（以下02）でも、中心メンバーの一人として活躍する。闇に対しては人一倍に敏感。

この小説の真実に大きく関わっている。

この小説オリジナルの設定が最も多いキャラ。

小学六年生。京とはジョグレスパートナー。



泉光子郎  
いずみこうじろう

無印の選ばれし子供。当初は太一以外とあまり話さなかったが、

徐々に他の人とも話すようになっていった。

知識の紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはデントモン。

無印での冒険後、パソコン

部を創り、初代部長となる。

参謀役を務めることが多い。中二のため、デジタルワールドに行くときは大抵いる。

高石岳  
たかいしたけ

無印の選ばれし子供。闇に対して絶対的な敵意を見せており、闇の存在を認めることができない。

希望の紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはパタモン。

02でも中心メンバーとして活躍する一人。

小学六年生。伊織とはジョグレスパートナー。

本宮大輔  
もとみやだいすけ

02の主人公。サッカーが得意で、太一の後輩である。いつも前向きで何事にもくじけない。何も考えていないように見え、猪突猛進な性格に思われることもあるが、冒険の中で成長し、みんなを引っ張るリーダー的存在になった。勇気と友情の紋章を受け継いだ選ばれし子ども。パートナーデジモンはブイモン。この小説の真実に大きく関わっている。小学六年生。賢とはジヨグレスパートナー。

## 一乗寺賢 いちじょうじけん

02のもう一人の主人公。過去の戦いで暗黒の種子が植えつけられる。その時のことは種子の影響で忘れてしまってる。種子の影響でデジモンカイザーとなってしまうが、その後改心して選ばれし子どもとして戦い、贖罪を続ける。優しさの紋章を持つ選ばれし子ども。パートナーデジモンはワームモン。この小説の真実に大きく関わっている。大輔とはジヨグレスパートナー。

井ノ上京  
いのうえみやう

02のメインキャラクターの一人。  
明るい性格でみんなを引っ張っていくが、  
パニくることもある。光子郎の後輩。  
愛情と純真の紋章を受け継いだ選ばれし子ども。  
パートナーデジモンはホークモン。  
ヒカリとはジヨグレスパートナー。

火田伊織  
ひだいおり

02のメインキャラクターの一人。  
とても真面目で幼い正義ではあるが正義を重んじている。  
頑固で多少融通のきかないところもある。  
祖父に剣道を習っている。  
知識と誠実の紋章を受け継いだ選ばれし子ども。  
パートナーデジモンはアルマジモン。  
タケルとはジヨグレスパートナー。

## キャラクター紹介 原作主人公編（後書き）

．．．．．もしまつと説明して欲しいという人いらっしゃれば感想に

書き込みをお願いします．．．．．

．．．その場合は、私も決心して全力でキャラ説明したいと思います．．．

## 第七話 新たな疑問（前書き）

今更5話の展開に、後悔中・・・

タイトルも、もう2文字のいい感じの奴が思い浮かばない・・・

昨日のグラフが100ユニーク超えてた!!!

みなさん、本当にありがとうございます！

今の所、ユニーク数が私の小説を書く、元気の源になっています！

## 第七話 新たな疑問

「起立！！！！」

そう誰かが叫ぶと、周りの人達・・・クラスメイトたちが椅子から立ち上った。

「礼！！！！」

「！！！！おはようございます！！！！」

「着席！！！！」

そう誰かがいうとクラスメイトたちは自分の席に着席した。

大輔は眠そうな表情でその動作をこなした。

大輔たちは昨日、一昨日の休日に、デジタルワールドをくまなく調査をしたのだ。

くもなく調査と言っても、実際にデジタルワールドの全てを回ったわけではない。

デジタルワールドは4つに分けられていて、四聖獣と呼ばれるデジモンによってそれぞれのエリアを管理されている。

そして、チンロンモンと呼ばれるデジモンに管理されている東エリアが大輔達が行くことのできるデジタルワールドだ。他のエリアに

は絶対に行くことは出来ないとゲンナイが言っていたため、必然的に、

大輔達は、東のデジタルワールドくまなく調査した。

しかし、新しい発見は、なかった。

だが、大輔達は、先日急に出現した、ダークタワーの破壊に成功していた。

タワーは、大輔達が唯一用意できるデジモン・・・パイルドラモン、シルフィーモン、シャッコウモンの三体の同時攻撃で破壊することが出来た。太一たち、先代の選ばれし子供達は、完全体に進化させるのに必要なだと言われている物・・・紋章を持っていなかった。よって、彼らのデジモン達は成熟期までしか進化できなかった。

だが、戦力が落ちたのは、彼らだけではなかった。

大輔と賢のジヨクレスデジモン・・・パイルドラモンは究極体に進化できなくなっていたのだ。

大輔達は元々チンロンモンから借りた力で進化していたのだ。

それがなくなれば、進化できなくなるのも仕方がないことだった。

そうやってぼーっと、窓から外を見ていると、先生に注意され、しづぶ先生の方を向いた。

「以上で朝礼は終わりだ。だがその前に、転校生の紹介をする」

先生がそういうと、大輔達のクラスメートはざわざわと騒ぎ始めた。しかし、それを先生が注意し、教室が静かになると先生が、扉に向かって入ってこいと言った。

すると扉が開き、そこから少年が姿を見せた。

少年は教室に入ってくると、先生の隣まで歩くと、子供たちの方へ体を向けた。

「転校生の秋山遼です。トルコからやって来ました。何度も転校を繰り返しているので、どれぐらい一緒にいれるか分からないが、どうぞよろしく！」

「秋山君は両親の都合で転校を繰り返している。日本に来るのも久しぶりらしいから、みんな仲良くしてやってくれ。それで、秋山君の席は・・・あそこだ」

先生がそう言うと、大輔は、げえ！と声を上げた。先生が指差したのは、空席になっている、大輔の右側の席だったからだ。

しかし、そんなことはお構いなく、リョウは大輔の隣の席に座った。「・・・どうも、秋山遼だ。これからは隣同士になるんだからよろしくな。」

「ああ。俺は本宮大輔。こっちこそよろしく。」

二人はそれぞれ挨拶すると、それ以来は会話をしなかった。



そして休み時間になるたびに周りに質問をされていたリヨウであったが、3時間目の休み時間は、次が体育という事で、リヨウの周りに人が集まることはなかった。

リヨウも早速、先生から借りた、体操服に着替えていた。

大輔もさっさと着替えていたが、リヨウがさっきまで着ていたズボンから取り出したものを見て驚きの声を上げた。

「な、なんでお前がD3を持っているんだ!？」

すると、リヨウはズボンのポケットから体操ズボンのポケットに入れようとしていたもの・・・D3を大輔に見せると、リヨウが言ってきた。

「そんなに驚くことじゃないだろ？ 君だって持ってるじゃないか」

そう言うとリヨウは、同じくポケットに入れようとしていた大輔のD3を指差した。

「確かに俺も持っているけど……」

「だろ？ そんなことよりいいのか？ もうこの教室には俺たち二人しか残っていないぞ？」

「！マジかよ……なら急ぐぞ！」

大輔がそう言つて、教室を飛び出すと、リョウは小さくため息をつき、大輔の後を追いかけて行った。

体育が終わると次は給食の時間だ。

今回の給食のメニューは大輔の大好物のものだった。

大輔は先ほど持っていたリョウに対する疑問を、さっきの授業のサッカーと給食の二連コンボで忘れ去ってしまった。

そして放課後になると、大輔とタケルとヒカリは、パソコンルームへ向かった。

リヨウはその様子を見届けると、教室から出て行った。

「はあ……なんもみつかんね〜! ……」

大輔がそう言うと、周りの者達も疲れたようなため息をついた。

「そんな3、4日で見つかるものでもないだろ……」

太一が大輔に向かってそう言うと、大輔はだつて〜と返してきた。太一、光子郎、空、大輔、伊織、ヒカリは今日もデジタルワールドの異変を探していた。

しかし、結果は空しく、今日も何も発見することができなかった。

「ソラ、私、お腹がすいたよ」

「そうね。今日はピヨモン、頑張ってたもんね」

ソラはそう言うと、ピヨモンの頭を優しくなでた。

今日の子供たちの調査方法は、基本的にピヨモンの進化系・・・バードラモンの背中から地上を見下ろして、探すというものだった。よって、ピヨモンは空を飛びっぱなしだった。なのでピヨモンのお腹がすくのも仕方がないだろう。

「今回も変わったことを発見することができませんでした・・・」

光子郎がそう呟くと、大輔は何かの頭の中で浮くんで来そんな感じがしていた。

「変わったことって、そういえば・・・・・・・・！！！！  
！！！！」  
ああ

大輔が大声でそういうと、周りはびっくりしたような反応をした。

「どうしたんだよ、大輔？」

「太一さん・・・今日俺、俺たち以外にD3を持つてる奴とあったんです・・・」

太一たちは余りにも突然すぎる大輔の衝撃的な言葉に、驚愕の声を上げた。

「どういうことだ、大輔!？」

「そうだよ大輔君。僕たちは今日ずっと一緒にいたじゃないか！それなのにいつたい何時、そんな隙が・・・ま、まさか!？」

「・・・ああ。今日俺たちのクラスに転校してきた秋山って奴が持っていたんだ・・・」

「それは実に、興味深いことですね・・・デジヴァイスを持っているならまだしも、D3となると、見過ごすことのできる事ではないですね・・・」

光子郎がそういうと、子供達も頷いた。

「・・・とりあえず、明日、秋山君にはパソコンルームに来てもらいましょう。」

大輔君！ 明日秋山君に放課後、パソコンルームに来るように伝えてください!」

「分かりました！」

大輔は光子郎の言葉に大きく頷いた。

第七話 新たな疑問（後書き）

大輔の隣が空いてるとか、ご都合主義ですみません・・・

## 第八話 新たな謎（前書き）

バイトの勤務時間が長いときは、投稿が遅くなります・・・

リヨウの性格はティマーズを参考にしました！（急いで28話を見てきました）

ちなみに、サイバードラモンは今のところ、ゲームを参考にしようと思っています。



## 第八話 新たな謎

「なあ、秋山……」

大輔は、次の日、何時もより少しだけ早く学校に行くと、大輔の隣の席には既にリヨウが座っていた。

大輔は一瞬躊躇いながらも、リヨウの元へ歩いて行った。その後ろには、タケルとヒカリがついて来ていた。

リヨウの隣まで来たが、リヨウは本を読んでこちらには気付かなかった。

大輔は、そんなリヨウに話しかけた。

すると、リヨウはこちらに気付いたのか、読んでいた本をパン！と閉じると、大輔に向かって返事を返した。

「うん……ああ、おはよう本宮君」

「あ、ああ。おはよう……なあ、秋山、今日の放課後空いてるか？」

大輔はリヨウにそういうと、リヨウは一瞬ピクリと眉を動かしたが、それに大輔達は気付くことはなかった。

「……ごめんだけど、俺は、学校が終わったら、

すぐに家に帰らないといけないから、放課後は遊べないんだよ」

リヨウはそう言つと、わるいな・・・と言いながら、笑顔で大輔にそう言つてきた。

「・・・放課後にすぐに家に帰らなければいけない理由ってなに？」

すると、タケルは、大輔の後ろから出てきてリヨウにそう言った。

「・・・君は？」

「僕は高石タケルって言つんだ」

「・・・そうか・・・俺は知ってるかもしれないが、秋山遼って言つた。よろしくな。」

それでさっきの質問に対してだけ・・・それはちょっと言えな  
いんだ・・・悪いな」

リヨウがそう言つと、タケルは、そうなんだ・・・と言つて、大輔の後ろへと戻つていった。

大輔は、何度か、そこは何か・・・などと言って、リヨウに頼んだが、そのたび、リヨウが謝りながら断つた。結局、リヨウが首を縦に振ることはなかった。

「という事があって、秋山をここに連れてくることは出来ませんでした……」

大輔は太一にそういい、謝りながら、頭を下げると、太一は大輔の髪を右手でクシャクシャにしながら言ってきた。

「謝らなくていいぞ、大輔」

「で、でも……」

「秋山に理由があつたんだからしかたがない……」

太一がそう言うと、大輔は頭を上げてきた。

顔には先ほどの暗い顔はなく、何時ものように明るい顔をしていた。

「それより光子郎！ 秋山の毎日家に帰らないといけない理由って

なんだと思う？

・・・もしかしたら、D3を使って、デジタルワールドに言うてるんじゃない・・・」

「たぶん、それはないと思います」

光子郎は太一の予想に対してそう言うと、パソコンをこちらに向けてきた。

そこには世界地図が映られていた。

「これはデジタルゲートを検知するプログラムを導入した、世界地図です。ゲートが開くとその場所がわかるようになっていきます。

これによると、最近、日本では、この場所以外ゲートが開いていません。

もちろん、過去にもトルコにもゲートが開いたことはありましたが、それは、

あの及川の時の事件の時ぐらいしかありません。

このプログラムはゲンナイさんと共同で開発したシステムです。それを簡単に抜けることなどできるはずがありません」

「光子郎はんらの作ったプログラムをごまかせる人間なんていまへんー！」

テントモンの言葉に太一たちは納得した。

「秋山さんの帰らないといけない理由は分かりませんが・・・」

光子郎がそう言うと、一つの仮説を太一たちに話し始めた。

「・・・秋山さんは、新しく選ばれた、選ばれし子供なんじゃありませんか？」

「どういう事ですか？ 泉先輩？」

「これは仮説です・・・秋山さんは、最近選ばれし子供に選ばれた。

理由は、最近、デジタルワールドで起きている異変に対抗するためですよ」

光子郎がそう言うと、京たちは納得したような顔をした。

「・・・つまり、あの男に対抗するための戦力というわけですね」

伊織がそう言うと、周りは暗い空気を出し始めた。

「あいつには戦力だけじゃなく、何か作戦を立てなきゃならねえ・・・」

前みたいに進化中の攻撃で全滅！ ってことにならならねえよ  
うにな・・・」

「そうですね。・・・ピッドモンや、イガモン達の仇を取るためにもね。・・・」

太一の言葉にタケルがそう言うと、周りは俯いてしまった。

ここにいる、太一、光子郎、大輔、京、伊織、タケル、ヒカリ、各パートナーデジモン達は、みな、

イガモンの死を目の前で見た者達だ。デジタマは壊されなかったが、それでも目の前で残酷に殺されたイガモンの姿は、忘れることは出来なかった。

「・・・でも、あの人は、私たちを見逃してくれたよ・・・」

「あんなのは奴の気まぐれさ!!! ヒカリちゃんも見ただろ？」

「たくさんデジタマが壊された光景を!!!」

「でも、あの人はダークタワーを破壊してくれたかもしれないんだよ?」

ヒカリの言葉にみんなは黙ってしまった。

ダークタワーは大輔達の完全体デジモン3体の攻撃で破壊することのできたものだ。

そんなことがあの時出来そうな者はあの黒コート男ぐらいしか心辺りがなかった。

成長期とはいえ、今までに数々の戦いを乗り越えてきたブイモン達を一撃で戦闘不能にしたのだから。

「・・・それは多分、その男じゃないわ・・・」

「・・・どういうことですか？」

「・・・私はあの男の攻撃を受けても、退化しなかった。

それはつまり奴が完全体クラスの力を持っていないことを意味するわ・・・。

つまり、奴はダークタワーを破壊することは出来ない。

・・・という事は・・・」

ティルモンはそこまで話すと、言葉を止めてしまった。

「・・・どうしたの、ティルモン？」

ヒカリはそう言つとティルモンは俯きながらも話出した。

「奴が完全体クラスの力を持っていないとすれば、

彼はピッドモン達を全滅させることは出来ない・・・」

ティルモン言った事は、太一たちを驚愕するには十分な威力を持っていた。

「・・・あそこには少なくとも三十を超えるデジタマがあった。

それを成熟期クラスの力しか持っていないあの男が全滅させることのできるはずがない……」

「でも、奴はキープレードとかいう伝説の剣を持っていたじゃないか！ それを使えば……」

「……あの武器は、普通の相手に対してはただの折れない剣です・

・  
さらに、奴が持っているのは闇のキープレード……

天使族のピッドモンたちとは明らかに相性が悪すぎます……」

テイルモンの言葉にタケルが別の可能性をいい、それを光子郎が打ち砕いた。

「な、なら奴はどうしてあそこにいた！ ……どうしてイガモンを殺したんだ……」

タケルが呟いた言葉に大輔達は誰も答えることができなかった。



第八話 新たな謎（後書き）

テントモンしゃべらじにくい・・・

第五話での展開にやっぱし後悔中・・・ヒカリが男を庇いすぎ・・・

## 第九話 再戦（前書き）

はじまりの街がどんなにか忘れてしまいました・・・

今回が初めてのまともな戦闘描写？

・・・遅すぎましたね・・・すいません・・・

## 第九話 再戦

「・・・これがはじまりの街だって言うのか・・・」

大輔は建物がグチャグチャになった、はじまりの街の入り口の様子を見てそう呟いた。

大輔たちは先程までパソコンルームであの男について話していたが、突然ゲンナイからのメールがあり、この前と同じ現象・・・あの男が現れた時と同じ、  
何かに妨害されているせいでその場所の現状がわからない。

と、ゲンナイから言われ、大輔たちは自分たちで調査に行くと名乗りを上げたのだ。

そして実際に来てみると、先程言ったような状態になっていたのだ。

はじまりの街は普通、寿命を迎えたデジモン、死んだデジモンがの場合、たどり着き、

そして、新たな生命を誕生させる神聖な場所だ。

デジタマから孵ったデジモンは幼年期という。人間で言う、赤ちゃんの事だ。

ここにはそのようなデジモンがたくさんいる・・・

しかし、この子たちを守るデジモンは、エレキモンという成長期デジモンしかない。

だが、はじまりの街には聖なる加護があり、悪の心を持ったデジモンは入ることはできないという、

常識があるから、普段はそれで構わないのだ。

しかし、この様子を見ると、そんなことは信じれなくなってしまっ

ほど、ボロボロになった、  
はじまりの街の入口の看板を見つめながら大輔たちははじまりの街  
へと入っていった。

「・・・酷い・・・何でこんな事に・・・」

京は手で鼻と口を覆いながらそういった。

周りはこの前と同じようにデジタマが転がっていた。  
今回は壊されたデジタマが数個しか見つからなかったが、酷い状態  
であることに変わりは無かった。

「・・・またあいつの仕業だ・・・」

タケルが震えた声でそう言つと、他の選ばれし子供達は、気を引き  
締め、奥へと歩き出した。



「・・・お前達には関係ないだろ」

「関係ないものか!」

伊織の言葉に彼は言い返してき、その言葉にタケルが反応すると、彼は、やれやれとため息を付きながら、言ってきた。

「関係ないだろ。別にここはお前たちのお前たちのものじゃあるまいし、いちいちやることを文句を言われる筋合いはないな」

「だからって、お前がデジタマを壊していい理由になるわけ無いだろ!」

「だからお前たちと同じ事をしてるだけじゃないか?。そうだろ?」

「お前と一緒にするな!」

タケルが男に対してそう返すと、男は笑うのをやめ、コチラに向けて、戦闘態勢を見せた。

「お前たちは、自分のやったことを認めずに、他のやつが同じ事をやると、

自分たちで裁くのか・・・おまえたちのように命を差別し、自分

たちを特別と思い、

罪を認めぬものを放っておくわけにはいかない！

我が正義の名のもとに、お前たちに制裁を加えよう！！！！

タケルは男の言葉を聞き、怒りが爆発しかけた。

男が言っていることは、どう見ても向こうが正義でこっちが悪の言い方だ。

しかも男もそれがわかっており、クツクツと、笑うような言葉が聞こえてきた。

「お前がそんなことをいう資格なんてない！！！！ 行くぞパタモン！

絶対にアイツをここで倒して見せる！みんなは手を出さないでくれ！」

タケルはそう言うとデジヴァイスを握り、パタモンに向かって叫んだ。

「行くぞパタモン！」

「わかったよ。タケル！ パタモン進化！・・・

・・・エンジェモン！」

男は進化中も攻撃することなくただじつとタケルを見つめていた。

タケルはその様子に嫌気がさしながらも、進化しているパタモンの姿を見ていった。

「さうて。これで負けても言い訳はできなくなったな。」

男はニヤニヤ笑いながらそう言うと、腕をエンジエモンに向け、かかってこいと言わんばかりに指をクイクイと動かしていた。

エンジエモンもその余裕な態度に不快を覚えたが、男が剣を出さずに丸腰でいたのでそのことを尋ねた。

「キープレードを出さないのか？」

「いらないだろ。お前相手に」

男はからかうこともせずただ当然の事のようにそう言うと、タケルが男に対し言ってきた。

「お前こそ負けた時の言い訳をする気か!？」

「え？ いや、出したら即効で決着がついて、面白く無いだろ?。」

男はさっきのように、からかうこともなく、



ただそれが常識だと言わんばかりの口調でそう言ってきた。

タケルとエンジェモンは、その態度が逆にからかわられるよりも力チンときた。

「でも確かに言い訳にされそうで嫌か・・・わかった。

お前達が俺に勝ったら、何でも一つ、質問に答えてやるう。

・・・例えば今デジタルワールドで起きようとしている事とか、

・

お前たちの仲間に取りようとしている異変とかな・・・」

タケルは仲間の異変つと言ったあたりで一瞬思考が入ったが、すぐ戯言と無視し、

エンジェモンに向けて言った。

「いけ！ エンジェモン！」

「わかった！ 行くぞ！ 私たちは悪を認めはしない！」

エンジェモンはそう言うつと男に向かって一直線に向かって飛んできた。

『ヘブンズナックル！』

エンジェモンは男との距離が10メートルを切ったあたりでそう叫び、光で包まれた右手の拳を男に向かって付き出した。

男はそれを限界まで惹きつけ、当たる瞬間に相手の懐めがけてヒョイツと右に軽く避けた。

すると男は右手を付き出したエンジエモンからみて左側の懐にいても簡単に入り込んだ。

完全に無防備なその体に男は右脇腹を右斜下からの右フックでももいっきり突き刺した。

ただでさえ完全な無防備な体に、完全な人型系の弱点で有る脇腹を的確に、

更にエンジエモン自身が出せる、最高速度で突撃してきたので、その分、威力も激増する。

今までの戦いのように、ただ、体に向かって攻撃されるただの攻撃しか知らないエンジエモンの体は、

一点集中のたった一回の攻撃を受け、いとも簡単に崩れていった。

「！ エンジエモン！！！」

タケルはあまりの光景に目を疑った。

タケルの目にはただ男がエンジエモンの攻撃を避けたようにしか見えなかっただろう。

次の瞬間崩れていったエンジエモン・・・パタモンの姿をタケルは呼ぶことしか出来なかった。

## 第九話 再戦（後書き）

初めての？戦闘描写、とうでした？

エンジエモンは人に近い姿をしていたので、こんな攻撃をしたら効くかな？と思って書きました。

ちなみに家にあつた、はじめの一步（父の）を参考にしました！

・・・納得のいかない人はすいません・・・

こんな攻撃の仕方しか思いつき・・・書けませんでした・・・

出来れば今回の戦闘描写を感想にて、意見を出して欲しいんですが、出来ればで構いません・・・

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

## 第十話 敵対（前書き）

一人称めっちゃ難しいです・・・

これで合ってるかもわからないので、  
間違っていたら指摘してください。

今回は少ない・・・・・・です。

## 第十話 敵対

side大輔

「どつちにしても速攻で終わったな」

黒コートの男がタケルに向かってそう言うてきた。  
俺たちはその光景を信じれなかった。

相手は成熟期クラスの力しか持っていなく、更に闇の存在のはずだ。闇との戦いなら格上だとしても戦うことができるはずのエンジエモンがたつた一撃で倒されたのだ。

しかも男はキープレードを使うことなく、素手で戦い、そして勝ったのだ。

俺たちが黒コートの男を見ていると、男がコチラの目線に気付いたのか、タケルから俺たちに視線を変えるところこつちに向かって言ってきた。

「残念だったな。こいつが俺に勝てばお前たちは真実を知ることが出来たのに……………」

「……………貴方はデジタルワールドで起きている異変について何か知ってるんですか？」

光子郎さんが男に向かってそう尋ねた。

「さあ〜どうだろうな？ 俺は負けたら言っただけでやると言ったが、勝ったから言う必要はないな」

「最初から話すつもりはなかったんでしょ！」

「それは違う。俺は負けたらちゃんと話していただろう。」

「……俺は約束を破らないのを誇りとしているからな」

男が京の言ったことに対しそうはつきりと返すと男は続けて俺たちに言ってきた。

「それと……どうする？ お前たちも俺と殺り合うか？」

「……その前に私の私の質問に答えて」

ヒカリちゃんはそう言っただけで俺達よりも一歩前に出た。その表情は何か迷っているような表情をしていた。

「……なんだ？ 光の紋章に選ばれし子供よ？」

「私の名前は八神ヒカリ！ そんな名前じゃないわ！」

「分かった。分かった。光の紋章に選ばれた子供よ」

ヒカリちゃんの言葉にアイツはそう言つと、ヒカリちゃんは言つても無駄だと思つたのか、呼び方を変えるのを諦め、一度俯いて、顔を上げると、男に向かって言つた。

「あなたがこの前、ダークタワーを破壊したの？  
……デジタマをあんなふうにしたのも貴方？」

「ダークタワー？ ああ。あの時、お前らと会つた所の近くにあつたやつか。

あれは俺じゃねーよ。そして後者の質問だが……俺が壊したが？」

男はヒカリの質問にそう答えた。するとヒカリは俯いてしまった。

ヒカリちゃんは俺達の中で唯一アイツを庇つてたからな……その事が間違いだと気付いてしまったのか……アイツは絶対に許さない！ ヒカリちゃんを悲しめさせやがって！

「……どうしてアナタはここに来たの？」

ヒカリが震えるような声でそう尋ねると、男は静かに言つてきた。

「理由は2つあるな……一つはお前たちに関係ないから言う必要はない、

もう一つは……お前たちのせいだ」

「私たちの……せい？」

「ああ。俺の二つ目の目的はこの前破壊しかねたデジタマを回収すること……。」

そして回収が難しい場合は……あのデジタマを破壊するよう計画している」

アイツが言ったことに対して俺たちは声も出なかった。

アイツは前、壊しそこねたデジタマをわざわざ壊すためにここまで来たと、俺たちに言ってきた。

俺たちアイツに対する怒りが膨れ上がった。

「……この前、私たちを見逃してくれたのは……」

「……フン、そんなこと言わずとも、お前たちの中で答えは出てるのだから？」

ヒカリの最後の男に対する敵じゃないという考えは、男がいと簡単に打ち砕いた。

ヒカリは、タケルがこの前言ったことを思い出し、俯いてしまった。

「質問はこれで終わりか？ なら俺は帰っていいか？ 目的も果たしたし……」



アイツはそう言うと、コートの中からデジタマを出して俺たちに見せてきた。

俺たちは、怒りの言葉をアイツに言おうとしたが、その前にヒカリがちゃん俯きながら、話しだした。

「……………貴方はこれからもこんな事を続けるの？」

「ああ」

ヒカリの言葉に男はあっさり答えると、場に数秒の沈黙が発生した。しかし、ヒカリは俯けた顔を上げた。

そこには先程のように迷った顔はなく、大輔たちと同じように怒りの顔をしていた。

「……………もう、こんな事はさせない。貴方はここで私たちが倒す！」

「!!!! そうだヒカリちゃん！ これ以上の犠牲者を出さないようにアイツをここで倒すんだ！」

みんな、行くぞ！」

俺がそう言うとみんなもそれに納得してくれ、各デジヴァイスを握った。

「みんな進化だ！」

太一さんがそう言うとみんなも頷き、進化を開始した。

男は動かず、ただじっとそこに立っていた。

「アグモン進化……………」

「グレイモン！」

「テントモン進化……………」

「カプテリモン！」

「ブイモン進化……………」

「エキスブイモン！」

「ホークモン進化……………」

「アキラモン！」

「アルマジモン進化……………」

「アンキロモン！」

各デジモンはそう叫ぶと光に包まれ、光が消えると、そこにそのデジモンの姿はなく、

別の姿をしたデジモンがいた。

「大輔達の言うとおり、これ以上お前の好きにさせるか！」

エクスブイモンがそう言うのと他のデジモンも同意した。

「これでお前たちも言い訳は出来ないな……。さあ、第二ラウンドを始めようか？」

男は両手を胸ぐらいに上げながらそう言った。

## 第十話 敵対（後書き）

進化長い・・・しかし、今は仕方が無いんです・・・

感想や誤字があった場合、出来れば連絡をお願いします。

## 第十一話 新たな敵？

『メガフレイム！』

グレイモンは口を大きく開けながらそう叫ぶと、口の中から、巨大の火の玉が飛び出してきた。

火の玉は、男に向かって一直線で飛んで行った。が、男は右にジャンプし、避けた。

「おいおい、いきなり怖いことをするな」

男はそう言うと、グレイモンに向かって走っていった。

『メガブラスター！』『ブラストレーザー！』

男の耳にそう聞こえると、左右からカプテリモンとアクイラモンの空からの攻撃が飛んできた。

男は先程よりも速いスピードで走ることによってそれを難なく避けた。

男がグレイモンの5メートル手前まで行くと、左からエクスブイモンが飛びかかってきた。

それをバックステップで避けた。

しかし、次に男の視界に映ったのは、こっちに向かって口を開けているグレイモンの姿だった。

『メガフレーム!』

男は空中に居たため、それを避けることは出来ず、直撃した。

ドゴオン!!!!

辺りの砂が巻き上がりふんじんとなり、グレイモン達の視界をさえぎった。

「やった……………のか?」

大輔はそう言いながらも気を抜くことはしなかった。

しかし、心の奥底では終わったんじゃないか?という思考が飛び回っていた。

あいつは完全体じゃない。だからこれで終わりだ。

あいつはエンジエモンを一撃で倒した。だからまだ戦いは終わっていない。

2つの思考が大輔…………大輔たちの思考でグルグルと回っていた。

……………石が転がる音がした。ふんじんの中で。

視界が晴れていく……………

「おいおい。それはやってないフラグだぞ？」

そこから今一番聞きたくない奴の声が聞こえてきた。

「……………さすがはエンジエモンを倒しただけはあるな……………」

「それは褒め言葉と思っていいのかな？」

太一の言葉に男はそう答えた、男の姿が見えてきた。さっきいた場所とほぼ変わらない場所にいた。

だがさっきと決定的に違う場所があった。それはグレイモンの攻撃を止めたと思われる右手の手袋が敗れ、機械でできた人型の腕があらわとなっていた

「コンビネーションだけは一人前だな。

俺に攻撃を当てるとは……………だが、まだ足りないな……………」

「……………それは褒め言葉として受け取っていいんだな？」

「構わないよ」

太一は仕返しにさつき男が言ったことと同じ言葉を返した。  
が、男はイラつく様子は全く見せなかった。

そして次の瞬間、消滅したはずの男の手袋が男の手に付けられていた。

「驚いたか？ このコートは特別製でな……破れてもすぐに再生するんだよ。」

しかも、このコートを着ている限り、体が汚れることは無いんだ。  
まあ、防御力は無いんだけど」

「……お前、サイボーグ型デジモンなんだな？」

「お前たちがそう思うなら、そう思ってくれればいい。  
それと俺に防御させた褒美に何か質問に答えてやろう。」

答えてくれない質問以外な。まあ、別に無視してくれて構わないが……」

大輔たちはそんな物必要ない等と叫んでいたが、  
太一と光子郎は二人で話をしだした。

そして、しばらくすると光子郎が男に向かって言うてきた。

「なら聞きます。……今デジタルワールドで何が起きよう  
としているんですか？」

「言いたくない」



「……………貴方は何者なんですか？」

「言いたくない」

「……………貴方の目的は何なんですか？」

「言いたくない」

「テメエ！ 言いたくないバツカじゃねーか！！！」

光子郎の質問に男がそう答え続けると、大輔が男に向かってそう叫んだ。

「仕方が無いだろ。言いたくないんだから。」

「……………お前ら二人も答えないとわかって聞いてるだろ？  
なら次で最後だ。次で答えられないことだったら質問タイムは終わりだ」

男がそう言うと、太一と光子郎は互いを見つめ合い、頷くと、今度は太一が男に質問してきた。

「……………俺たちの仲間に取りようとしている異変は何だ!？」

「……………まあ、正解だな。俺にその質問をすることがお前らにとって

唯一プラスとなる質問だ」

大輔たちは太一と男の会話を遮らず、耳を澄ませていた。

大輔たちはすでに男に対しての怒りは爆発しそうだったが、仲間の異変という言葉聞いて黙っていた。

「お前たちの仲間の……おっと、名前まで言う必要は無い  
か。」

そいつの体の中にある暗黒の種子が咲こうとしている。

「……さあ、いったい誰のことを言ってるのかな？」

男がそう言つと大輔たちは驚いた。

さっきまでシヨックで膝をついていたタケルまでもが驚いていた。

「嘘つくんじゃねえ!!! 賢の暗黒の種子が咲くわけがねえ!

アイツは……もう暗黒の種子なんかに負けたりはしねえ

!」

「……暗黒の種子の効果が強まっていると言ったら？」

「どづいつ事だ!？」

「さあ、どづだろつな。」

「……もうすでに暗黒の種子の影響を受けて苦しんでるか  
もな？」

「貴方が言ってることが嘘だとしたら？」

「……さつきも言ったが、俺は嘘はつかない。  
だが、お前たちが信じないと言うのならそれは仕方が無いことだ。  
心当たりがある者も居ると思っただが……」

男の言葉に大輔たちはハツとなった。

【……疼くんた……僕の体にある暗黒の種が……奴が誰なの  
かわからないけど、  
とにかく……疼くんた……】

賢は確かにそう言っていた。大輔たちの記憶が今ハッキリと思い出された。

「そうだ……賢は言ってたじゃねえか……暗黒の  
種子が疼くって……  
！ おいお前！ 賢は奴のせいで種子が疼く、って言ってた。  
奴が誰か知ってるのか！？」

大輔は男に向かってそう叫んだ。  
すると、今までどんな事しても動揺しなかった男が  
明らかに動揺した素振りを見せた。

「なんだと！？ 奴のせいで種子が疼く、だと！？

「……………おい、それは本当にあいつが言ったのか？」

「こんなこと嘘言っても意味が無いだろ！」

「それでお前は知ってるんだな？」

「奴の事を！」

「……………そうだと言っただら？」

「今すぐお前を倒して、ボコボコにしてはかせる」

「……………ああ。知っている。俺は奴のことを知っている」

「なら答えろ！ アイツが言ってる奴って誰なんだ！？」

「これぐらいなら、お前たちも知る権利はあるだろう……………  
奴の名はミレニアモン。一乗寺賢に暗黒の種子を埋め込んだ張本人だ」

## 第十一話 新たな敵？（後書き）

やっと名前を出せました・・・

それと、賢が2000年にデジタルワールドを冒険したことをアニメで大輔たちは知ってるんですか？

すみません・・・忘れてしまいました・・・

出来れば感想で教えてくださると嬉しいです。

あと評価も出来ればおねがいします。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

第十二話 逃走（前書き）

今回は短いです。すいません……………

## 第十二話 逃走

「ミレニアモン……………」

「……………お前はミレニアモンについて何か知ってるのか？」

太一が呟くと、男は太一が何か心辺りがあるか聞いてきた。

「……………ない……………な。」

俺はそんなデジモンの名前を聞いたことはない」

「……………そうか。まあゲンナイですらそいつのデジモンについて  
詳しい事は言えないほど存在だからな」

男が淡々と言った。

「……………ミレニアモン……………」

「……………お前らは何か知っているか？ 選ばれし子供たちの  
パートナーデジモンたちよ」

デジモンたちが何か考えているような声でそう呟くと、男はデジモンたちにそう問うと、

デジモンたちの代表として、アグモンが言ってきた。

「わからない……わからないんだ！

僕はその名前のデジモンを聞いたことがある、実際に合ったことがある気がするんだ……」

グレイモンがそう言うのとデジモン達も頭を抑えながらそう言った。

「……そうか……」

「……それではあなたはミレニアモンの事をどれだけ知ってるんですか？」

光子郎が男に向かってそう言うと、男はしばらく黙り、そしてハッキリと言ってきた。

「これ以上お前たちに言う必要は無いな。

俺がこの事を話したのは、簡単に言えば褒美みたいな物だ。続きが聞きたければ俺を倒すんだな」

「もう、デジモン達に酷い事をしないって約束できないの？」

「出来ないな」

ヒカリの言葉に男がハッキリそう答えると、ヒカリはそう、と呟い



た。

「ならばアタナを許さない！　お願いテイルモン！」

ヒカリと言葉にテイルモンは分かったと答えると男に向かってダッシュしてきた。

男もそれを見ると、テイルモンに向かってダッシュしてきた。

『メガブラスター！』

その行動に対してカプテリモンはとっさに反応し男に向かって必殺技を撃った。

しかしそれを男は無視し、そのままの速度で走っていた。

その行動にデジモンたちは驚いていた。

カプテリモンの攻撃を男がさっきと同じようにスピードを上げて避けると思っていたからだ。

カプテリモンの攻撃がかなり近づくと、男は軽く前にジャンプし、片足で着地した。

男のジャンプは本当に軽く、カプテリモンの攻撃を避けられないほどの距離だった。

しかも男は片足で着地したままで体を少し倒し、その場に停止していた。

デジモンたちは驚いたが、

どうせ攻撃が当たる瞬間に避けると思えば行動に何の疑問も持たなかった。

テイルモンは止まることなくダッシュしていた。

そして、カブテリモンの攻撃が当たる瞬間、男は消えた。

否、男はテイルモンのすぐ前に加速したスピードで現れた。

テイルモンは声を上げること出来ず、そのまま顔に思いつきりパンチを食らった。

「うっ！」

テイルモンはそのまま今までダッシュしていた道に吹き飛んだ。

男は吹き飛んだテイルモンの方を見ていたアンキロモンの所へ行き、そのまま顔を殴った。

しかし、アンキロモンは吹き飛ばず、その場で倒れただけだった。

すると男は倒れたアンキロモンの裏に回りこんだ。

そしてアンキロモンが立ち上がり、そちらを振り向くと、そこに男の姿はなかった。

第十三話 わかり始めた現状（前書き）

宿題が残ってるため、更新ができないことがあります……

すいません

### 第十三話 わかり始めた現状

「クソ！ 何なんだよアイツ！」

大輔は叫んだ。

男が姿を消した後、大輔たちはしばらくは周りを警戒していたが、すぐに男がもういないということに気付くと、大輔たちはゲンナイにはじまりの街の復興を頼み、パソコンルームに戻っていた。

「いろいろ挑発してきたくせに、途中で逃げるなんて許せねえ！！！」

「……………うん。」

アイツははじまりの街をあんなにも滅茶苦茶にしてたくさんのデジモンたちを……………」

「デジタマも取り返せなかったわ……………」

大輔、タケル、京はそれぞれ今回の男のやったことにそれぞれ頭にきていた。

「ごめん、大輔……………。俺がもつとしつかりしてたら……………」

「何お前が誤ってるんだよ！ 悪いのはゼー……んぶアイツだ！」

「そうよ。だからホークモンもそんな顔しないで」

「……………分かりました、京さん」

「……………皆さん」

光子郎がそう言うと、子供とデジモンたちは一斉に光子郎の方を向いた。

「皆さんがあの男を許せない気持ちは十分わかります……………」  
ですが、

僕達が話し合う必要があるのはあの男についてではありません……………  
……………今後についてです」

「……………アイツが言ってた、ミレニアモンの事か」

太一がそう言うと、光子郎は無言で頷いた。  
しかし、そこに大輔が口を挟んだ。

「でも、太一さん。アイツが言ってたことが本当かは分からないです  
すよね？」

アイツは俺たちを混乱させるために嘘をついたんじゃないですか  
!?!?」

「……………なら、大輔は今デジタルワールドに何が起きている  
かと、

賢の暗黒の種子に何が起きているかアイツの代わりに言ってみる  
よ……………」

「そ、それは……………」

太一の言葉に大輔は何も言えなかった。

「……………あいつが言ってたことは、全部、説得力があるんだ……………」  
「ミレニアモンについても、賢についても……………」

「僕もそう思います。」

あの男が言ってたことは今までわからなかった事とほとんどつじつまが合うんです……………」

光子郎はここまで言うとは一度、言葉を区切り、そして再び話した。

「まず、世界に起きている異変についてです。」

あの異変はゲンナイさんでも全く分からないんです。

そして、ミレニアモンについても、ゲンナイさんは知らなかった……………。

つまり彼の言うとおり、ミレニアモンが現れたから異変が起きた。しかし、ミレニアモンを知らないゲンナイさんは異変がなぜ起きているか分からない。

……………これ以上ないぐらい、つじつまが合ってると思いませんか？

光子郎の言葉に誰も返すことは出来なかった。  
大輔たちもあの男が嘘を言っていないということを理解した。

「そして一乗寺君についてです。

彼は奴という、謎の存在と、暗黒の種子が疼くというキーワードを僕達に教えてくれました。

そしてあの男が言った、ミレニアモンが一乗寺君に暗黒の種子を埋め込んだと言っていました。

「……ここまで言えば、みなさんも理解できたでしょう」

「……あの人は嘘を言っていない……」

「正解です。伊織くん」

光子郎がそう言うと、光子郎と、太一を除く子供たちが俯いた。

「……あの人は、私たちと敵対してるはずなのに、  
どうしてこんな重要なことを教えてくれたの？」

「……僕は彼が僕達に対して敵対していないんじゃないかなと思います」

「……そういうことですか？ 光子郎さん」

「……それは簡単なことです。僕達が彼に対して、攻撃をしなければ、向こうも攻撃しないし、

こちらが話せば、向こうも話します。

これは敵対していたら絶対に不可能なことです………」

タケルは光子郎の言葉に俯いてしまった。

タケルは理解したのだ。光子郎の言っていることは間違いではないと。

「………それでも、デジモンたちにあんなひどい事をするあの男を私は許せない………」

「許す必要はありません。彼がやっていることは間違っていることなんですから。」

「………でも、彼が嘘をつかないと言うことは信用してもいいかもしれません。」

それを確かめるためにも僕達は一乗寺君に合うべきです」

光子郎の提案に、大輔たちは頷いた。



## 第十四話 過去（前書き）

宿題のせいでなかなか上げられません・・・

すみません・・・

後、評価ありがとうございます！お気に入り登録ありがとうございます！  
ます！

見た途端、テーションが上がりましたw

## 第十四話 過去

「こんな時間にどうしたんですか？」

賢は半開きになっていた扉を開けながら大輔たちに向かってそう言ってきた。

大輔たちはあれから、賢の家に向かった。そして家の前のインターホンを押した。

するとそこから賢の母が出てきて賢を呼んで来てくれた。

「こんな時間にすみません。一つ直接聞きたいことがあって。

……一乗寺くんは今日、学校を休んだそうですね？」

「はい。母さんが僕の顔を見て、今日は学校を休めつと言ったんです。

……僕は元気なんですけどね」

「……暗黒の種子が疼くんじゃないですか？」

「ッ!?!?!」

光子郎がそう言つと、賢は驚き、光子郎の顔を見た。

「あの男が言っていました。一乗寺くんの暗黒の種子の力が強まって

いるって。

「……ミレニアモンのせいだ」

「ミレニアモン!？」

「! 何か知ってるんですか!？」

光子郎がそう言うと、賢は顔を歪ませ、頭を右手で抑えながら言うてきた。

「分かりません……でも、ミレニアモンの名前を聞いた瞬間、僕の心が反応したんです。

「……僕は知っています……心が知ってるんだと思います。ミレニアモンの事を」

「ミレニアモン!？」

賢がそう言うと、賢の部屋からゆっくりこっちに来ていたワームモンが大きく反応した。

「ミレニアモンを知ってるの？ ワームモン」

賢の問に答えることなく、ワームモンは顔を俯かせていた。

「……………何か知ってるんですね？」

「……………僕は知らない。ミレニアモンなんて知らない……………」

光子郎の質問にワームモンはそう答えると、背を向け、賢の部屋に向おうとしていた。

「……………ワームモンは知ってるんだね。ミレニアモンの事を」

賢がそう言うと、ワームモンは歩くのをやめ、背を向けたまま、その場に止まった。

「ワームモン！ 僕は知りたいんだ！ なぜ僕がミレニアモンを知ってるかを！」

賢がそう言うと、ワームモンはゆっくりとこちらを振り向き、賢の方を見て、一瞬大輔達に視線を向けると賢に向かって言った。

「ごめん。賢ちゃん……………言えないんだ」

「ぎゅっしてっ？」

「……………」

「ワームモン。僕はもう何を知っても大丈夫さ。僕にはこんなにもたくさん仲間がいるんだ。

何を知っても怖くはないよ」

ワームモンはそれを聞くと再び俯いた。しかしすぐ顔を上げた。その顔には先程のようなおどおどした顔はなかった。

「……………賢ちゃんはミレニアモンと会ったことがあるよ。……………戦ったことも」

「僕がミレニアモンと戦った!？」

ワームモンの言葉に賢だけではなく大輔たちも驚いた。

「どづいつことだよ！ 賢がミレニアモンと戦ったって!？」

「……………言ったとおりだよ。大輔」

「……………では何時、一乗寺くんはミレニアモンと戦ったんですか？」

「……………2000年の春休みだよ」

「……………2000年と言えばディアボロモンが現れたとしてですね……………」

光子郎はワームモンの言葉にそう呟いた。

ディアボロモンとは2000年に現実世界のデータに突然出現したデジモンだ。

そいつはデータを食べることで成長し、最後にはデータを使って、日本にロケットを撃った。ディアボロモンは最後はオメガモンに止めを刺された。

これが光子郎たちが知る、2000年の大きな出来事だ。

「2000年に僕がミレニアモンと戦って、どうなったの？」

「賢ちゃんはミレニアモンを倒したんだよ」

「倒したってどういう事だ！？ ミレニアモンは聞いた話では究極体クラス！」

「そいつを賢とワームモンだけで倒したなんて……………」

「……………僕達だけじゃないよ……………僕達以外にも人間とデジモンは居たんだ」

太一の言葉にワームモンは顔を少し下に向けながらそう言った。

「……………一乗寺くん以外の人間とは!？」

「……………3人いたのは覚えてるんだ。」

「……でも2人の顔も名前も何故か全然思い出せないんだ！  
一緒に戦った仲間なのに……」

「……2人のことが思い出せないということは、1人は覚えてるということですね？」

光子郎の言葉にワームモンは頷くと、顔を上げて言った。

「その人の名前はリヨウ。秋山遼って言う名前だよ」

ワームモンの言葉に賢は頭を抑え、  
大輔たちは大声を上げて驚いた。

## 第十四話 過去（後書き）

ゲームを知ってる人はいまいせんとおもいますが、原作改変しています。



## 第十五話 進展

「秋山リヨウって……まさかあいつが……」

「！ 大輔たちはリヨウのことを知ってるの!？」

「……ああ。そいつはこの前、俺とタケルとヒカリちゃんのクラスに転校してきたんだ……」

大輔がそう言うのとワームモンは驚いた。

しかし、大輔たちも先ほどのワームモンの言葉にとても驚いていた。

「………ということは、あいつの放課後の用事って………」

「ほぼ確率にデジタルワールドでしょう」

大輔の言葉を光子郎が途中で遮ると、持っていたパソコンの電源をつけ、

カタカタと音をたてながら言った。

「………どうやら彼には僕とゲンナイさん以上のコンピューター能力を持っている、」

またはそれができる仲間がいると考えて間違いなさそうです」

光子郎はそう言うと、パソコンを打つ音が数秒止まり、そしてまた聞こえ出した。

「……………すみません。僕が前、彼はデジタルワールドに行つてはいないと言い切らなければ

もっと早くに秋山くんのこと気づいたかもしれません……………

「・

「お前が気付けない相手に俺たちが気が付く事なんて出来なかったはずだ。

だからそんなに気を落とすな！」

「……………はい」

光子郎は太一の言葉に頷き、パソコンの画面を閉じて、秋山遼について話し始めた。

「おはよう。本宮！」

「……………ああ。おはよう」

大輔が教室に入るとそこにはリヨウがすでに座っていた。

リヨウは大輔に挨拶をすると、再び手に持っている本を読み始めた。

大輔がその場で動かずに立っていると後ろからタケルとヒカリが歩み寄ってきていた。

二人の真剣な顔を見ると大輔は昨日の知ったことを直接リヨウに聞くという事を思い出し、

戸惑いながらもリヨウに話しかけた。

「……………な、なあ。秋山」

大輔がそう言うつとリヨウは顔を上げて、大輔の目を見た。

「なんだい？」

「……………今日の放課後、パソコンルームに来て欲しいんだけど……………」

大輔がリヨウにそう言うつと、リヨウは少しくらい顔になり、大輔に言った。

「……………悪いけど、放課後は用事があったから、悪いな！」

「用事ってデジタルワールドの事でしょ？」

リヨウの言葉にタケルが後ろから話しかけた。

「……………どうしてそう思うんだい？」

「最近デジタルワールドに起きている異変を調べているんでしょ？」

「……………質問に答えて欲しいんだけど……………」

「ミレニアモンが原因なんでしょ？」

タケルの言葉にリヨウは目を見開いて驚いた。  
リヨウはすぐに元の爽やかな笑顔に戻ったが、リヨウがタケルに言った。

「……………どうしてそれを知ってるんだい？」

「黒いコートを着たデジモンが言ってたんです」

ヒカリが男にそういうと、リヨウは先程よりも目を見開いて驚き、小さく呟いたが

大輔たちには聞こえなかった。

「……あいつがその事を君たちに話すなんてな……

一度、君たちと話す必要があるみたいだな……

分かった。今日の放課後、君たちに付いて行くことにするよ」

リョウがそう言うと、大輔たちは喜びの声を上げたが、周りのクラ  
スマートフォンに一齐に見つめられ、

小さくなりながら自分の席へ戻っていった。

## 第十五話 進展（後書き）

リヨウの話し方おかしいかもしれません・・・

ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

何か伝えたいことがある場合は感想で、

この小説が気に入ってもらえた場合は評価をお願いします！

## 第十六話 選ばれし子供集合（前書き）

更新できなくてすみません。

学校の宿題をしていたら全然更新できませんでした……

これからは最低2日に1回は更新できるよう、頑張ります！

そして気づいたらユニークが1000突破……！

そして評価がUP……！

こんなダメ文の小説を読んでくれて、評価してくれてありがとうございます！

これからも頑張っていきたいと思えます！

## 第十六話 選ばれし子供集合

「あなたが秋山くんですね？」

大輔たちは学校が終わるとリヨウを連れてパソコンルームへ行った。ドアを開けるとそこにはまだ誰も着ていなかったが、しばらくすると光子郎が来た。

光子郎の視界にリヨウが映ると光子郎はリヨウにそう質問した。

「……………そうですが……………」

リヨウは光子郎の質問に少しだけ俯いてそう答えた。

「そうですか。僕は泉光子郎と言います」

光子郎がそう言って挨拶すると、周りを見回して今来ている人数を確認するとリヨウに言った。

「あなたの話についてですが、全員が揃ってからでも構いませんか？」

「……………別に構いませんよ」



「ありがとうございます。」

あと、大輔君。すいませんがゲートを開けてもらえませんか？

こここのゲートの先でデジモンたちが待機しているので………

「

「分かりました！」

大輔はそう言うつと部屋にあるパソコンの前に立ち、D3をかざした。するとそこからパルモンを除く選ばれし子供たちのパートナーデジモンが飛び出してきた。

その中でワームモンはリョウの姿を確認すると、大きな声を上げてリョウに向かって飛びついた。

「リョウ！！！！」

「！ ワームモンか………」

リョウはそう言うつと飛びついてきたワームモンを受け止めた。

「………彼らに俺のことを話したのは君かい？ ワームモン？」

「じゅん………」

ワームモンがそう言うつと顔を俯かせるとリョウはため息を付いて言

った。

「ワームモンが秘密を話すって事はそれほどの事が起きているって事だろ？」

なら仕方ないさ……………」

リヨウはそう言うとワームモンを床に降ろして言った。

「此処から先に質問はみんなが来てからでいいか？」

「……………わかった」

ワームモンがそう言うとリヨウはワームモンの頭を撫でると、窓側の方へ歩いて行き、

窓の前から空を見上げた。

光子郎はその行動をただの時間つぶしと理解すると、デジモンたちと会話をして全員が揃うのを待った。

「……………さて、後は一乗寺君だけです……………」

光子郎がそう言っている途中に、部屋の扉が開いた。

そこには少し息を切らした賢が居た。

そしてリヨウのことを見つけると右手で頭を抑えだした。

そしてしばらくすると賢は頭を抑えながらリヨウに話しかけてきた。

「リヨウ……………さん？」

「……………ああ。久しぶりだな、賢」

リヨウがそう言うと、賢は目元にたまっていた涙を袖で拭いていた。するとリヨウが言った。

「思い出したのか？ 賢？」

「……………少しだけですが思い出しました」

「そうか……………なら全員揃ったみたいだから、そろそろ質問タイムを始めましょうか？」

リヨウはそう言いながら周りを見渡した。

周りには太一、ヤマト、光子郎、空、ジヨウ、大輔、賢、タケル、ヒカリ、京、伊織が居て、

その足元や腕の中にはパートナーデジモンがいる。

「……………そうですね。今から秋山くんに質問します。  
みなさんもそれでよろしいですね？」

光子郎がそう言うと、太一たちは頷いた。

第十六話 選ばれし子供集合（後書き）

集合って言うっておきながら、ミミは登場していません……

アメリカ？にいるので、なかなか登場させづらいです……

第十七話 秋山遼（前書き）

私の小説は他のと比べて圧倒的に戦闘が少ないですね……………

でも中盤になれば戦闘が増える……………はずです。

評価ありがとうございます！

これからも頑張っていきたいと思います。

## 第十七話 秋山遼

side 光子郎

「初めに訪ねます．．．．．あなたは何者ですか？」

放課後からそんなに時間が経っていないパソコンルームで僕は秋山君にそう尋ねた。

秋山くんはその質問にうん、とアゴに手をつけながら言ってきた。

「俺は秋山リョウ。選ばれし子供で、2000年に賢とデジタルワールドを旅した、賢の友達さ！」

．．．．．それ以外は何を言えばいいのか．．．．．」

秋山くんはそう言うと一条寺くんの方を向き、言った。

「賢はどれくらい俺の事を思い出したんだい？」

．．．．．それとワームモンは俺のことをどれくらい覚えてるんだ？」

秋山くんの問に一条寺くんは俯き、そして言った。

「……すいません。僕はリヨウさんの名前くらいしか思い出せません。」

「……でも、僕の心がリヨウさんを覚えているみたいですから僕は記憶がなくてもリヨウさんの事を友達だと分かるんです！」

「……なるほど。心が覚えているか……  
・それでワームモンはどうなんだ？」

「僕がしってるのは僕達と賢を合わせた4人でミレニアモンを倒したことだけさ……」

一条寺くとワームモンの言葉を聞くと、秋山くんはうでを組み、目を閉じて何かを考え始めた。  
しばらくすると目を開いて言った。

「……大体わかったよ。でも一つ間違ってるよ。  
ミレニアモンを倒した選ばれし子供は全部で5人だ。  
……それで皆さんは他に質問はありますか？」

秋山くんがそう言うと、太一さんが尋ねた。

「……賢と秋山以外のミレニアモンを倒した選ばれし子供を教えてください」



太一さんがそう言うと秋山くんは俯いて言った。

「……………すいませんがそれは言えません」

「なぜだ？」

「……………それは僕がその子を巻き込みたくないからです」

秋山くんは頭を上げてハッキリとそう言うと太一さんは疑問を持った顔でまた尋ねた。

「巻き込みたくないってどういうことだ？」

太一さんがそう言うと秋山くんは視線を下に向けて言った。

「……………その子は俺達のことを何も覚えていないからです。」

デジタルワールドで一緒に旅をしたことも、一緒に笑ったことも、  
……………戦い方も……………」

秋山くんがそう言うと、太一さんは悪いことを聞いてしまった、と言っ顔をして、

流れを変えるためか、それともただ気になったのか、また秋山くん  
に尋ねた。

「その子ってことは他の子供たちはどうなんだ!？」

ほら! 賢たちと合わせて5人いたんだろ? そいつらの事は・

・

「……………その子達はもうこの世にはいません……………」

太一さんの言葉を遮るように秋山くんはそう言った。

「……………悪い」

太一さんが暗い顔をしてそう謝ると秋山くんが言ってきた。

161

「……………別にかまいませんよ。……………知らなかったわけですから……………」

……………それで他に質問はありませんか?」

秋山くんはそう言って周りを見渡したが、大輔くんたちはさっきの話で重くなったこの空気で

発言するのが難しいのか、黙ったままだった。

しかしその空気の中、タケルくんは秋山くんに尋ねた。

「……………その子達は殺されたの?」

「！ タケル！ そんな事は聞いたらダメだろうが！」

大輔くんが大声でタケルくんに言うと、タケルくんもそれが分かっていたのか、顔を俯けた。

「……………別に構わないよ」

秋山くんがそう言うと、大輔くんが気まずそうな顔をして言った。

「……………いいのか？」

「いいよ。」

君たちが選ばれし子供としてその子達の事が気になるのは当然の事なんだし……………」

秋山くんはそう言うと窓の方に向かって行った。

窓から見える景色はすでに赤くなっていた。

「それで質問はそいつらが殺されたのかって言う質問だったな……………」

一人は殺されて……………もう一人は濁流に巻き込まれて死んだよ……………」

秋山くんが悲しそうな顔をしてそう言つと、  
尋ねた本人であるタケルくんが謝った。

そしてその後話しの本題であるミレニアモンのことを僕が秋山くん  
に尋ねた。

「……………ミレニアモンは先輩たちが知ってるように賢に暗黒  
の種子を埋め込んだ張本人です。」

それで今デジタルワールドで起きている大半の異変はミレニアモ  
ンのせいで起きています」

「それで秋山は何時も放課後にデジタルワールドを調査していたの  
か……………」

「まあ、大体そうだよ。本宮達もデジタルワールドを調査していた  
んだろ？」

「そうだけど……………そうだ！」

なんで秋山は一人でデジタルワールドを一人で調査していたんだ？  
同じ選ばれし子供なんだから一緒に調査したほうが効率はいいだ  
ろ？」

大輔くんの質問に秋山くんは言いにくそうに言った。

「……………それは君たちを巻き込みたくなかったんだよ」

「……………どういう事だ？」

ヤマトさんがそう尋ねると秋山くんが真剣な顔で言ってきた。

「……………今、デジタルワールドで起きようとしていることは先輩たちや本宮たちが戦った時よりも遥かに危険な戦いになるからです。」

「……………そんな戦いに一体で完全体にもなれない人がいても危険なだけです。」

「……………最悪、命を落とします」

僕達はその言葉に言い返すことは出来なかった。

秋山くんが言うとおりの僕達は完全体にすら一体でなれないのだ。それに僕達はたった一体のデジモンに二度も敗北しているのだ。

二回目の戦いもあるまま続いていたらおそらく負けていただろうと僕は思う。

「でも、秋山だって一人じゃ危険だろ!？」

「俺は大丈夫さ! 俺にも仲間はあるし」

秋山くんはそう言うところの部屋の扉の方へ歩いて言った。

「どこに行くんだ!？」

「もう俺から言えそうなことはないのから帰るよ。」

俺のパートナーデジモンもお腹を空かしているだろうし……

」

秋山くんはそう言って扉を開いてこの部屋から出ようとしていた。

「待って！」

その時ヒカリさんがそう言って秋山くんを呼び止めた。

秋山くんはその声のしたほう……ヒカリさんの方を向いて立ち止まって言った。

「……なんだい？」

「あなたは黒いコートを着たデジモンの事を知ってる？」

「……知らないな。そんなデジモンは」

秋山くんは前を向いてそう言うと、この部屋を出ていった。

第十七話 秋山遼（後書き）

ジヨウを話させることが出来なかったよorz

なかなか登場しないキャラなのに・・・  
デジモンたちも空気すぎ・・・

## 第十八話 黒コート（前書き）

PV10000突破!!!

評価UP!!!

皆さん私の小説を見て下さり、ありがとうございます！

これからも頑張っていきたいと思えます！



## 第十八話 黒コート

side太一

「……………僕達はこれからどうします?」

秋山が帰ってからしばらくした後、光子郎がそう言った。

「これからとは?」

伊織がそう尋ねると光子郎が答えた。

「これからの僕達の行動についてですよ。」

秋山くんが言ったように僕達じゃミレニアモンには勝てません。

……………いや、その配下にも勝てないでしょう……………」

「そんなことはないですよ！ 俺たちはジョグレスで完全体になれるし、

アグモンたちも抜群のコンビネーションがあるじゃないですか！

だから俺たち全員で戦えばどんなデジモンだって……………」

「だが僕達は黒いコートのデジモンに二度も負けました」

大輔の言葉を遮るように光子郎がそう言った。

光子郎の言うとおり俺たちはアイツに二度も負けている。そんな俺達じゃ秋山の邪魔になるだけだろう……

「あいつは進化中に攻撃されて負けただけです！

二回目だって、俺たちはまだ負けてなかったですし！」

光子郎の言葉を大輔は必死に否定していた。

無理も無いな。大輔たちは今まで前線でデジモンたちと戦っていたのに

急に戦闘メンバーから外されたようなものだ。

……俺たちが去年の戦いで味わった世代交代みたいなものだろう……

あの時はどうして俺たちは何も出来ないんだと悔やんでばかりだった。

「……大輔くんはそのデジモンが卑怯なことをしたから負けた。

と、思っているのかい？」

光子郎に必死に抗議する大輔の姿を見かねたのか、ジヨウが大輔にそう言った。

「はい！ あいつはブイモンたちが進化中に攻撃してきました。  
こんなの絶対に卑怯じゃないですか！」

ジヨウの問に大輔は先程まで光子郎に言っていたことと同じ事を言  
って、  
質問を返した。

「でも僕達はもっと卑怯なことをしているよ」

「えっ!？」

「だってそうだろ？ 僕達は今まで全員で戦うっていう手段で戦っ  
ていただろ？」

それはつまり大勢で少数のデジモンと戦っていたということだよ。  
酷いときはたった一体のデジモンに対してもこれをしたこともあ  
る。

「これは卑怯とは言えないかい？」

ジヨウの言葉に大輔は黙ってしまった。

ジヨウの言うとおりで俺たちは今までそういう戦いを当たり前で行っ  
ていた。

巨大なデジモンならまだしも人型のデジモンにも俺たちはそうして  
戦っていた。

そんな俺達がアイツの行動を卑怯という資格はないだろう。

「全員で戦うのを僕は卑怯だと言われても僕は仕方が無いと思う。でも進化中に攻撃は僕は卑怯だとは思わない。」

「！ どうしてですか!？」

「じゃあ聞くけど大輔くんは進化中に攻撃してはいけないなんてどうして思うんだい？」

「だって、進化中はブイモンたちは動けないんですよ！」

「こんな時に攻撃だなんてやっぱり卑怯ですよ！」

「なら大輔くんは」

「ダメージを受けてボロボロになっている相手に攻撃するのは卑怯だと思ukai？」

「それは……………」

大輔はジョウの言葉に何も言い返せなかった。

「卑怯とは言わないだろ？」

「だってそれは僕達にとっては攻撃を当てるためのチャンスなんだから。」

「今までだってそういう時は大体全員の一斉攻撃でそのデジモンを攻撃してきたんだから。」

「進化中の攻撃だってそれと同じさ！」

「相手にとっては数で負けているんだからそういうチャンスは普通」

見逃してはいけないんだよ」

「でも、進化中に攻撃なんて俺たち今まで……」

「……彼は本当に僕達のことをよく知っていますね……」

大輔の言葉を光子郎が突然さえぎってきた。

俺は光子郎の言ったことの意味がわからなかった。

それは大輔も同じよう光子郎に今言ったことの意味を尋ねた。

「……それはどういう意味ですか光子郎さん？」

「……いや黒コートの男と初めて会った時のことを覚えていますか？」

光子郎がそう言うとき子供たちの何人かは俯いた。

無理も無いだろう。目の前でイガモンが殺された時のことを思い出したんだろう。

「……覚えてますか？」

「なら彼がその時に僕達に対して言った言葉は覚えていますか？」



光子郎の言葉に俺たちは何も言えなかった。  
あいつの言うとおり俺たちは  
今まで進化中は攻撃されない環境でしか戦ったことがなかったのだ。  
俺たちはそれからまもなく学校の下校時間になりそうだったので急いで学校を出た。

side out

真っ暗な世界………周りが見えないという暗さではなく、ただ空が真っ黒な世界。  
そこにはたくさんの真っ黒のうずが縦横無尽にあり、そのうず同士の距離は大体100メートルほどあった。地面は真っ白で、デコボコが全くなかった。

そんな何もない世界で、2つの影が見つめ合っていた。

一つは全身黒ずくめで地面に届きそうなほど長い腕を持ち、羽のよ  
うなものを生やしており、

目は鋭く、赤色の目を持ったデジモン。

その姿は堕天使と呼ぶのににふさわしい姿をしていた。

もう一つの影は真っ黒のコートを着ており、頭はフードを被っ  
ているため顔は見えなかった。

「……………お前は何者だ？」

堕天使のデジモンがコートの者にそう尋ねた。

「？ 俺か？ 俺は……………」

黒コートの男はそう言うのと被っていたフードをおろした。

フードを取ると、今まで無理やり入れてたのか、男の髪の毛が勢い  
良く飛び出してきた。

堕天使のデジモンは男の姿を見て驚きの声を上げた。

ここにいる筈のない顔をした者がそこにいたからだ。

「な…なぜお前がここにいる!？」



「? . . . . . ! ああ、多分お前は勘違いしているぜ。  
俺はお前が知ってる奴とは別人だぜ。デビモン」

男はそう言つとデビモンは信じられないのかそれを不定してきた。

「フン . . . . . 騙されるものか . . . . . お前の顔は私は忘  
れたりさせぬぞ! 選ばれし子供よ」

「まあ、確かに俺は選ばれし子供だけど . . . . . 」

デビモンの言葉に男は否定は出来ないのか、頭をかきながらそう言  
つた。

「何か腑に落ちない所があるがまあいい。

お前はここで消えてもらおう! 我が新しい力で! 」

デビモンはそう言つと全身を光に包まれた。

しかしすぐにその光は消えて、中からは顔を覆うマスクをつけ、  
体は先程と変わって白に近い色になっており、  
その姿はどこか改造したらしき後が所々に見られた。

「ふはははは! これが私の新たな姿 . . . . . ネオデビモンだ! 」

「 . . . . . 俺はお前がその姿になったことの方が気になるぞ . . . . . 」

「……」

男は先程よりも真剣な表情になっており

その目は過去に同じものを見たことがあるような表情をしていた。

「なぜオマエがデジモンを連れて無いかは知らないが、  
せめて一思いに殺してやろう……」

ネオデビモンはそう言うと、羽をバサッと広げ男に向かって飛行してきた。

「死ぬ！ 『スタンクローウ！』」

そう言うとネオデビモンの手が雷に包まれ男に向かって来た。

「行け………——！！！」

男がそう言うと空からすごい勢いでデジモンがデビモンに向かって急降下してきた。

その速さはデビモンよりも比べ物にならないスピードだった。

デビモンはそれに気付かず、男に向かって真っ直ぐ飛んでいるだけだった。

『ブイブレスアロー!』

そのデジモンの口からデビモンに向かって、矢印に近い姿をしたブレスが撃たれた。

「!?!? な…!?!?」

デビモンにそれを避けることは叶わず、デビモンは上下真っ二つにわかれた。

「ぐああ………な、何なんだ…そのデジモンは…」

デビモンもさすがと言つべきか、真っ二つになった後もしばらく生きがあった。

「お、お前たちは何、者だ………」

デビモンがそう言うと男はニカッと微笑み、そしてデジモンと共に言った。

「俺たちは……………」

「僕たちは……………」

「「勝率100%テイマーだぜ!」!」

## 第十八話 黒コート（後書き）

自分の小説を見直したら、戦闘数があまりにも少ないことに気が付きました。

これからはできるだけ増やしていきたいと思います。

今回は他にも黒コートを着たものがあると知ってもらったための演出を入れました。

最後に謎のティマーが出現！

奴の招待は……！！？

感想、または評価をお願いします！

第十九話 絶体絶命？（前書き）

やっと頭のなかにある展開の一つを書くことができました・・・

## 第十九話 絶体絶命？

「今日は秋山は家の用事で欠席だ」

大輔たちの担任の先生がそう言うと大輔は隣のリョウウの席を見た。

昨日の話し合いから翌日のことなので大輔はリョウウの欠席に疑問を  
持ったがすぐに  
その疑問は消えた。

「なるほど……今日は秋山くんが欠席ですか……」

大輔たちからリヨウの欠席の話を聞くと、光子郎と太一は考えこんだ。

「……どう思う、光子郎？」

「……おそらく家の用事というのは嘘ですね。

彼は多分デジタルワールドにいます」

「デジタルワールドにって、別に学校が終わってからでもいいんじゃないですか？」

「……多分デジタルワールドに異変が起きているんですよ」

大輔の疑問に光子郎が答えると光子郎を除く子供たちが驚きの声を上げた。

「それはどういことですか！ 先輩！」



「……………先程からゲンナイさんと連絡が取れないんですよ……」

京の間に光子郎がそう答えると大輔が一步前に踏み出して言った。

「俺たちも行こう！ デジタルワールドへ！」

大輔の言葉に子供たちは頷いた。

「そうだな。俺たちは選ばれし子供なんだ！  
デジタルワールドに危機が迫ってるなら行かなきゃな！」

太一の言葉に大輔は少しだけ言いにくそうに言った。

「太一さんはデジタルワールドに行つてばかりでいいんですか？  
今年はサッカーの推薦を狙うつて言つてたじゃないですか！」

大輔の言葉に太一は一瞬だけポカンとなったが、すぐに笑いながら言ってきた。

「そつえば言つてなかつたな！  
実は俺、もう推薦されてるんだよ」

「！ほ、本当ですか！？」

「本当だ。それでその推薦してくれた学校の監督は  
1999年のヴァンデモンの事件の時に助けた人でな……  
事情を話したら、最悪、今年の夏の大会には出なくても推薦して  
やるって言われてな。

……でも、進学後少しでも怠けたプレーや、  
実力が劣っているとわかればすぐ取り消すって言われたがな……  
」

太一がそう言うと、大輔はそうなんですか、と本当に安心した顔を見せた。

「だから俺のことは気にしないで大丈夫だ！」

太一は大輔の髪の毛をクシャクシャにしながらそう言った。

「八神先輩がそういう事なら大丈夫ね！」

「じゃあデジタルワールドに行きましょう！」

京の言葉にここにいる太一、光子郎、大輔、伊織、タケル、ヒカリが頷いた。

s i d e 大輔

「太一く大変だよ!」

デジタルワールドに着くとそこにはアグモン達が居た。

「どうしたんだ! アグモン!」

アグモンの言葉に太一さんがそう言つと、アグモンが慌てながら言った。

「さっきから向こうですごい爆発が見えるんだ！」

アグモンはそう言つとその爆発が起きているらしい方向に指を向けた。

俺たちはその先を見たが爆発なんて起きていなかった。だがその場所のすぐ近くにある物を見て俺たちは驚いた。

「だ…：ダークタワー……」

伊織がそう呟くと俺達もそれぞれ声を上げたが、その時その近くで大きな爆発が見えた。

「！ 確かに爆発が起きているらしいですね……どうしますか？」

光子郎さんはそう言つと太一さんの顔を見た。

でも光子郎さんは太一さんがなんて言うか分かっているような表情をしていた。

「決まってるだろ……みんな行くぞ！」

太一さんの言葉に俺たちは頷いた。

あれから俺たちはそれぞれのデジモンをアーマー進化させて、爆発が起きている場所に行くため、森の中を移動していた。

ブイモンはライドラモン。ホークモンはホルスモン。アルマジモンはディグモン。  
パタモンはペガスモン。テイルモンはネフェルティモンになって、  
太一さんたちはライドラモンに乗って移動していた。

ある程度爆発が起きていた場所に近づくとあるデジモンが空にいるのを確認できた。

「あれはメガドラモン！」

光子郎さんがそう言うつと続けて太一さんが言った。

「……………完全体か」

太一さんの言葉に俺たちは少しだけ驚いたが光子郎さんが何かを考えているのに気づいた。

「どうしたんですか？ 光子郎さん？」

「……………メガドラモンの様子がおかしいんですよ。」

あの動きはただ周りを攻撃しているわけではありません。

……………おそらくメガドラモンは今誰かと戦っているのでは  
「よう」

「……………秋山くんですか？」

タケルの質問に光子郎さんはわかりませんと言うと、俺たちに向かって言った。

「誰が戦っているか分かりませんが、とりあえず急ぎましょう！  
ここから見る限り、そのデジモンはメガドラモンに押されていま  
す」

光子郎さんの言葉に俺たちは頷きライドラモンたちは更にスピードを上げた。

s i d e o u t

そして森を抜けると大輔たちの目にメガドラモンと戦っている  
デジモンの姿が目に入った。

「なんでお前がメガドラモンと戦っているんだよ!?!」

それは大声でそのデジモン・・・黒コートの男に向かって叫ぶと、  
メガドラモンの攻撃を避けながら男がこちらを見て、  
驚いているような様子を見せた。

「! なんでお前らがここにいるんだよ・・・」

「お前こそどうしてここに!?!」

今度はタケルが男に向かって叫ぶとメガドラモンがこっちに気づい  
たのか、  
こっちに向かって飛んできていた。

「! みんなさんデジモンから降りてください!」

光子郎の言葉に大輔たちはすぐにデジモンから降りた。

するとライドラモンたちがこっちに飛んできているメガドラモンに



向かって飛んだ。

『ブルーサンダー!!』

ライドラモンはそう叫ぶと頭の角に電気が集まり、そしてメガドラモンに向かって放たれた。

しかし、

メガドラモンがいる場所はかなりの上空のため攻撃が当たる前に消滅してしまった。

「私に任せてください! 『レッドサン!!』」

ホルスモンがそう言うと、目から赤い光線が放たれた。

その攻撃は確かにメガドラモンに当たったが、効いている様子はないかった。

「…………お前たちじゃ勝てねえよ。お前らはさっさとここから離れるんだな。」

戦いの邪魔だ!」

大輔たちが声をした方を見るとそこには黒コートの男がいた。

男はそう言いながらもこちらに近づいていた。

「誰がお前の言うことなんて聞くかよ！」

大輔がそう言うと、光子郎が横から言った。

「………どうしてですか？」

「！ 光子郎さん！ こいつの言ってることなんていちいち気にしちゃダメですよ！」

「大輔！ 今はそんな事を言ってる暇はないだろう！」

こいつの言うことも一理ある。なぜならあいつは完全体だからな」

太一の言葉に大輔は黙った。

太一は男に対して自分の意見を言った。

「確かに勝てないかもしれない………だが勝つ必要はない！」

あいつについているイービルリングさえ破壊したら………」

太一の言葉に大輔たちはハッとなった。

今デジタルワールドにはダークタワーが出現している。

ならイービルリングがあってもおかしく無い。

現に今まで平和だった場所でデジモンが暴れている。

これは操られていると考えてもおかしくないという考えが子供たちの頭に浮かんだ。

しかし、その考えを男はいとも簡単に打ち砕いた。

「あいつは操られてなんかいないぞ」

「「「えっ!?!」」」

男の発言に子供たちは驚きの声を上げた。

「「「どういうことだ!?!」」」

「簡単な事だ。あいつは自分の意志で攻撃をしているだけだ」

タケルの問に男はそう言うと、メガドラモンたちの方を見た。

そこには必死にメガドラモンたちの攻撃を避けているライドラモンたちの姿があった。

避けるだけではなく、

スキをみてライドラモンたちも攻撃をするがメガドラモンには通用せず、

ここから見ても押されているのがわかった。

「「「どうしてですか!?!」」」

今まで平和だった場所で急にデジモンが自分の意志で暴れだすなん

て・・・・・・・・」

「簡単な事だ。あのメガドラモンは別の場所から来たというだけだ」

伊織の質問に男が答え、男の言葉に子供たちは納得したが、

ならどこから来ているのか？ と訪ねようとした瞬間、メガドラモ  
ンたちの

戦闘に変化が起きた。

「！ ホルスモン！」

ホルスモンにメガドラモンの攻撃が命中したのだ。

完全体の攻撃をまともにくらったホルスモンは吹き飛び、ポロモン  
に退化してしまった。

それに動揺したディグモンにメガドラモンは腕を向け、

そこからホルスモンに当てた攻撃と同じ必殺技を撃った。

動きの止まっていたディグモンにそれを避けることは出来ず直撃し、  
ディグモンはウパモンに退化した。

「このままじゃみんなが！」

ヒカリがそう呟くと子供たちは何か作戦がないか考えたが何も思い  
つかなかった。

光子郎も子供たちと同じで何も思いつかなかったが、  
ライドラモンたちの戦いをただ真剣に見ている男の姿が目に入り、  
ダメ元で尋ねた。

「……………あなたは何か作戦を思いつきませんでしたか？」

光子郎がそう言つと男は光子郎の方を向いた。

「……………あると言つたらどうするんだ？」

男の発言にタケルが大声で言った。

「ふざけるな！ お前なんかには思いつくはずがないだろう！  
どうせお前は僕達に戦わせて自分は逃げるつもりなんだろ！？」

「……………」

タケルの言葉に男は何も返させず男はただ光子郎を見つめていた。

「……………タケルくん。彼にそのつもりはありません」

「……………どうしてそう思うんですか？」

「なぜなら彼がまだここにいるからですよ。  
彼は僕達が来たあとに逃げずにずっとここにいました。  
逃げるならその時に逃げたほうが確実なはずです」

光子郎がそう言うとタケルは黙りこんだ。

タケルも理解したのだ。男がその気になれば自分たちが来た時点でここから離れることができたことを。

「……………教えてもらえますか？　あなたが思いついた作戦を？」

「……………言ったところでお前たちはそれを実行するのか？」

「それは分かりません……………でも  
少しでも選択肢を増やすのはいいことだとは思いませんか？」

光子郎がそう言うと男はため息をついた。

そしてその後うでを上げて指を4本立て、子供たちに見せた。

「……………まずお前たちには4つの選択肢があった」

「！　4つですか！？」

「ああ。4つだ。」

1つめは今のようにはメガドラモンに勝負を挑み、そして全滅する  
選択肢だ」

光子郎は自分たちに4つも選択肢があったとは思わず声を上げたが  
すぐに黙った。

「そして二つ目は俺が最初に言ったようにここから逃げることだ。  
まあ、これはもう実行不可能だがな」

「逃げるなんて選択肢、僕達を選ぶはずがないだろ！」

「どうしてだ？」

「どうしてってそれは……………」

「ここには他のデジモンはいない。地形もすでにボロボロ。  
相手は格上の完全体。お前たちがここに残ってまで戦う理由が  
わからないんだが……………」

それを聞くとタケル…子供たちは黙りこんだ。

男の言うとおり子供たちが危険をおかしてまでここで戦う理由がな  
かったのだ。

子供たちがここに残った理由は……………」

「俺の言うことを聞きたくなかったからだろ？」

男の言葉に子供たちはハッと頭を上げた。

「心を読まれたとでも思ったのか？」

そんなことが出来なくともお前らの顔を見ればわかるんだよ。

お前たちが俺と敵対しているのはわかっていたが、

それが自分のパートナーデジモンを失ってまでも貫きたいことだとは思はなかったよ………」

男の言葉に今度こそ子供たちは何も言い返せなかった。

男の言うとおり自分たちは逃げるべきだったのだ。

守るデジモンも土地もなく、戦えばほぼ負けるとわかってる戦いをただ男の言うことを聞きたくないという理由でパートナーをあんなのも傷つけて………」

いや、このまま行けばパートナーを失ってしまうという結論が子供たちの頭で生まれた。

「………話を戻すぞ。」

3つめは俺と共にメガドラモンと戦うという選択肢だ」

男の発言に子供たちは頭を上げた。

「どうしてお前と一緒に戦わなければならなんだ!？」

「わからないか？俺は今あいつと敵対している。」



それぐらいはわかっていただろ？  
それでお前らもあいつと敵対している。  
なら組むのもわかるだろ？」

子供たちは確かに知っていた。  
自分たちが来るまで男は一人でメガドラモンと戦っていた。  
つまりどうしてもメガドラモンを倒したければ男と組むのが一番良  
かったのだ。

「な、ならどうしてライドラモンたちがメガドラモンに向かって行  
ったときに

お前も一緒に行かなかったんだ！」

「行けば俺も巻き添いで攻撃していただろ？」

伊織の質問に男はすぐに答えた。

男の言ったことを誰も否定は出来なかった。

「まあ、今から俺が行っても無駄だな……………  
そしてお前らに残された最後の選択肢だ……………」

男がそう言つと子供たちは一斉に男のほうを見た。

「・・・俺にデジヴァイスを貸す選択肢だ」

子供たちはその発言に驚きの声を上げた。

第十九話 絶体絶命？（後書き）

男がでる話はかなりスラスラ書けます。

ずっといてくれればいいのに……

評価または感想をお願いします。

第二十話 深まる男の謎（前書き）

評価が20突破!!!

お気に入りが一桁アップ!!!

皆さん、本当に有難うございます!!!

## 第二十話 深まる男の謎

「デジヴァイスを貸せってどういう事だ!？」

男の言った事に大輔は大声で尋ねた。

「言葉通りの意味だ。俺にデジヴァイスを貸すと言う選択肢だ。ちなみにD3でも構わないぞ？」

男はあっさりそう言うと、再びメガドラモンたちの方を見た。

「別に貸したくなかったら貸さなくてもいいんだぞ。

……俺も出来れば使いたくない手段だからな」

「……あなたにデジヴァイスを貸したらどうなるんですか？」

「!先輩! ダメですよ! こんな奴にデジヴァイスを貸すのなんて……」

「大丈夫ですよ京さん。とりあえず聞くだけです」

京にそう言うと光子郎は再び男の方を見て言った。

「……………なぜあなたにデジヴァイスを貸すという選択肢があるんですか？」

「ここはデジタルワールドなので別の場所に  
送り返すことも出来ま……………ま、まさか！？……………」

「勘違いするな。別にリアルワールドに送り込もうとは思ってねえよ」

光子郎の言葉を男はそう言ってさえぎった。

「……………ならどうするんですか？」

他人のデジヴァイスを使っても進化もさせることは出来ませんし、それ以外に出来ることは他のデジヴァイスと連絡することと、ゲートを開くことぐらいです。

「それなのに貴方はデジヴァイスを使って何をするつもりですか！？」

「答えるつもりはない」

光子郎の言葉に男はアッサリとそう答えた。

「ふざけるな！！！」

「ふざけているつもりはないぞ希望の紋章を持つ選ばれし子どもよ。俺がこの方法を使いたくない理由がお前たちにこれを知られるか

らだ。

だから仮に俺がお前らのデジヴァイスを使って何かをしても  
それに関しては何も答えないからな？」

タケルの言葉に男はそう言つと  
子供たちに向かって言つた。

「今言つた4つの手段が俺の思いついた手段だ。

まあ、希望の紋章を持つ選ばれし子どもの言つたように

俺程度が思いついた作戦だからこれ以外にも手はあるかもしれな  
い……………」

だからお前らで他の手段を思いつけば俺にデジヴァイスを貸さな  
くてもいいんだぞ？」

男はそう言つと光子郎の方を向いて尋ねた。

「さあどうするんだ？ 知識の紋章に選ばれし子どもよ？」

「……………あなたにデジヴァイスを渡しても現状に変化が起き  
るとは思いません。

あなたに今出来ることはデジヴァイスを持って逃げるくらい  
のほです。

なのでデジヴァイスを貸すことはできません」

「……………そうか」

男はそう言うと再びメガドラモンたちの方を見つめた。

子供たちもメガドラモンたちの方を見ながら、他の手段がないか必死に話し合っていた。

そこにメガドラモンたちの戦いを見ていた子供たちに驚きの光景が目に入った。

「！ どうして避けなかったんだ！？ ライドラモン！？」

先ほどまで高速移動で避けていたメガドラモンの必殺技をライドラモンは

その場にとどまり、避けることなく直撃したのだ。

大輔は倒れこんだライドラモン：チコモンの姿を見てそう叫んだ。

倒れたチコモンに止めを刺そうとしたメガドラモンに  
ペガスモンとネフェルティモンが必殺技を当てて注意をそらした。

子供たちはそれに少しだけ安堵の息を漏らすと、なぜライドラモンが攻撃を避けなかったかと、  
現状を打開する手段を考えた。

そこに男が小さく呟いた。

「……………無闇やたらに動き回るからそうなるんだよ……………」



「

子供たちは一斉に男のほうを見て、

男がなぜライドラモンが攻撃を避けなかったのかを知っていると理解知り、

そこで代表で太一が男に尋ねた。

「……………おい！ 今のはどういう意味だ？」

「うん？ ……ああ。ライドラモンが適当に相手の攻撃を避けるから

避けることのできない状態に追いつめられるんだ……とってな？」

「……つまりお前はなぜライドラモンが攻撃を避けなかったか知っているわけだな？」

「ああ」

男は簡単にそう言うと右手を上げてチコモンの後ろの方を指さした。

「お前たちにも見えるだろ？ チコモンの後ろに何かあるかが」

太一たちは男の指さした方をジッと見つめた。  
そしてそこに何かがあるのかが分かった。

「！ ポロモン！？」

「分かったか？ ライドラモンが攻撃を避けようとしたときに  
アイツの姿が目に入ったんだろう。」

自分が避けたらポロモンに直撃すると理解してな……..  
あいつが避けてたらポロモンは確実に消滅していたからまあ判断  
は正しいが、

もとはと言えばアイツが周りを気にしないで攻撃を避け回るから  
そうだったんだから、

まあ当然のことかな？」

男の消滅という言葉聞いて京たちはゾツとした。

自分たちのパートナーに消滅しそうになったという現実を見てよう  
やく理解したのだろう。

先程よりも焦りながら、そして大声で作戦を考え始めた。

男もそれを無言で聞きながらメガドラモンたちの方を見ていた。

そこに男に歩み寄る足音が耳に入りメガドラモンたちの方を見なが  
ら言った。

「……………どういつつもりだ？ 光の紋章を持つ選ばれし子ど  
もよっ。」

「……………あなたに私のD3を貸します……………」

「！ダメだヒカリちゃん！ こいつにD3を貸すなんて……」

「なら大輔君はこれ以外の方法があるの!？」

「そ、それは……」

ヒカリの言葉に大輔とヒカリを止めようとした子供たちは俯いた。大輔たちはあれからどんなに考えても方法が思いつかなかつたのだ。なのでヒカリの言葉に誰も言い返すことが出来なかつたのだ。

「……あなたにこれを貸せば、テイルモンたちは助かるの?」

「……最悪でもメガドラモンから逃すことだけは約束しよう……」

「それはどういうことだ!？」

「簡単な事だ。もし途中であいつ以外のデジモンが襲ってきたら、全滅する可能性があるという意味だ」

男の言葉に光子郎は冷や汗を流した。

自分たちがメガドラモンの事を考えるのに精一杯の時に

男はその先を考えている。

自分たちは戦略では男には勝てないと理解したのだろう。

「……………それでもこのままティルモンたちがやられるよりは  
ずっといいわ」

「……………お前が俺にD3を貸すとは思わなかったわ。

「この中で俺に貸そうと思うのは知識の紋章に選ばれし子ども位と  
思っていたぞ……………」

「……………私は貴方が今までやってきたことを許せない！

でも感情だけでは動いちゃダメだとさっき思い知ったから……………

……………」

ヒカリはそう言うつと自分のポケットからピンク色のD3を取り出し  
て男の方に差し出した。

男はそれを左手で受け取ると、少しだけヒカリと距離を取り、  
そして子供たちに向かって言った。

「先ほど言った通り、

これからやることに對しての質問は受け付けないがそれでもいい  
のか？」

ヒカリ以外は納得できなそうな顔をしていたが、

ヒカリの決断をむやみに否定するのは間違えだと思い、頷いた。

「……………行くぞ！」

男はそう言つとヒカリのD3を持っている左手を左に真っ直ぐ伸ばした。  
すると突然D3が光を放った。

そして光が消えるとそこにはピンク色のD3ではないものが握られていた。

「「「な!?!」」」

子供たちはそれに驚きの声を上げたが男はそれを無視し、小さく呟いた。

「うわぁ!?!」

すると突然大輔が驚きの声を上げた。子供たちは一斉に大輔の方を見た。

そこには大輔のポケット…ディーターミナルが光を出していた。そしてそこから勇気のデジメンタルが飛び出し、ヒカリのD3だったものの中に入っていった。

男は更に右腕を右に大きく伸ばした。  
すると男の手にバーコードみたいなものが発生した。

男はその手を手にD3だったもののにのせて言った。

「……………スピリットエボリューション!!!」

男はそう言っつて右手を思いつきりスライドさせた。  
すると男は光に包まれた。

そして光が消えたあとには黒コートの男の姿はなく、肩ぐらゐまで  
に伸びた黄色の髪をして、  
体中を勇気のデジメンタルに似たものを付けており、  
顔にマスクをつけているデジモンがそこにはいた。

「……………アグニモン!」

男はそう呟いた。

子供たちは余りの驚きに口を開けて驚いていた。

「D3が変化した!?!」

「デジモンが自分だけでアーマー進化した!?!」

「スピリットエボリューション!?!」

「アグニモン!?!」

子供たちのうちの誰かがそれぞれそう言ったが、

男はそれを無視してその場で思いっきりジャンプした。

メガドラモンはまだこちらに気づかずにペガスモンとネフェルティモンと戦っていた。

「……………ファイアダーツ!!」

アグニモンは自分の手の甲をこするようにしてそこから炎の矢を幾つか飛ばした。

それらがメガドラモンに命中すると今までどんな攻撃をしても全く動じなかった

メガドラモンから苦痛の声が上がった。

「グオオオオオ!?!」

アグニモンは自分の右手を下に向けそしてそこから一瞬だけ炎を出した。

するとアグニモンは更に上空に飛び上がった。

苦痛を上げて停止しているメガドラモンの上まで上がると、体を回転させながら急降下した。

『サラマンドーブレイク!!』

アグニモンはそう言いながら急降下のスピードと回転の力を利用して思いっきりメガドラモンの背中あたりに蹴りを繰り出した。

メガドラモンはそれに耐え切れず地上に叩き落された。

子供たちはただ圧倒的なその戦いを驚きながら見ていた。

「ど、どういうことだよ!?　なんで勇気のデジメンタルにあんな力があるんだ!?!」

特に大輔の表情には驚き以外の表情が含まれていた。

今まで自分が使っていたデジメンタルにあれほどの力があつたことにショックを受けていたのだろう。自分が使うよりも遥かに強いそれを見て

大輔はただ悔しさを噛み締めていた。

アグニモンは地面に着地するとすでにメガドラモンは起き上がっていた。

だがメガドラモンの羽は先程の攻撃でボロボロになっておりもう先ほどのように自由に飛び回ることは出来そうになかった。

だがメガドラモンはまだ諦めておらず尻尾を使って体を支え、アグニモンに向かって3つに開いた両手を向けていた。

「グオオオオオ!!!」

メガドラモンは怒りを含んだ雄叫びを上げ、



アグニモンに向かって先ほどまでペガスモンたちに使っていた技を両手から放った。

アグニモンに有機体ミサイルが迫ってきた。

アグニモンは動かずにただそのミサイルを見つめていた。

そしてアグニモンがいた場所が爆発し、煙に包まれた。

子供たちはなぜアグニモンが攻撃を避けなかったのかが理解できなかったが、

それは次の瞬間に答えが出た。

「自分の目の前を攻撃して視界を悪くするとは

．．．．．やはりお前は破壊しか能がないデジモンなんだな．．

．．．．．」

アグニモンはメガドラモンの後ろでそうつぶやくと両腕に炎を巻いた。

メガドラモンは急いで振り返って反撃しようとしたがその前にアグニモンが叫んだ。

「遅い！！！！『バーニングサラマンダー！！！！』」

アグニモンの腕に巻かれた炎が竜の姿となってメガドラモンを貫いた。

メガドラモンは体からデータを出し、その場にはデジタマがひとつ転がっていた。

## 第二十話 深まる男の謎（後書き）

勇気のデジメンタルが炎のスピリットに・・・

多分今まで書いた中で一番の設定改変だと思います・・・

でも似てるからいいよね!?

・・・納得のいかない人はすいません・・・

感想、または評価をお願いします！

## 第二十一話 忘れられた記憶（前書き）

お気に入りとの評価がだんだん上がってきてテンションが上がってきています。

でもやっぱり自分の文章力が嫌になってきます。

同じ表現を繰り返し過ぎる感じがしますが、これ以外の方法がないため、

これからも同じ表現を繰り返してしまうかもしれません・・・

出来ればアドバイスを下さると嬉しいです。

## 第二十一話 忘れられた記憶

大輔たちはポカンとした表情でアグニモンの戦いの終わりを見ていた。

自分たちのアーマー進化では全く刃が立たなかったメガドラモンを同じデジメンタルを使って

無傷で勝利した、アグニモンを大輔たちは信じられないといった表情で見つめていた。

同じくペガスモンと

ヒカリが男にD3を貸したために退化したテイルモンもペガスモンの上で上空からその戦いを見ていた。

「デジヴァイスを選ばれし子供よりも使いこなすなんて……  
アイツは一体……」

テイルモンはそう言うがそう言うのとペガスモンがゆっくりとアグニモンの近くに着陸していった。

「……お前はそのデジタマを破壊するつもりか？」

ペガスモンがそう言うとテイルモンはハツとなった。

ペガスモンが言ったように男は今までデジタマを破壊し回っている。つまり今回もデジタマを破壊するつもりではないか？

テイルモンはそれに気づくと  
男に質問した時点から戦闘態勢に入っていたペガスモンに続き、戦  
闘態勢をとった。

「……………今回は破壊するつもりはない」

アグニモンの予想外の言葉にペガスモンとテイルモンは驚きの声を  
上げた。

アグニモンはそれを無視し、体から光を一瞬発して元の黒コートの  
姿に戻っていて、

テイルモンたちの方へと歩いて行き、テイルモンの前で左手を突き  
出した。

その左手にはヒカリのD3が握ってあった。

「……………これを本人に返しておいて貰えるか？」

男は素っ気無くそう言った。

テイルモンはそれを右手で受け取ると両手で大事そうに抱えた。

「……………確かに返したからな」

男は静かにそう言つとテイルモンたちに背を向けてそこに闇の回路  
を作ると

その中に消えていった。

s i d e  
テイルモン

私は男が消えたあと、ペガスモンにチコモンたちを乗せ、ヒカリたちのところへ飛んだ。

ヒカリたちの所へ着くと大輔たちが一斉に質問してきた。

私はそれを一先ず無視してヒカリにD3を返した。  
そうするとヒカリを含めた全員がそれをひっくり返したり自分のと  
比べたりして調べたが  
すぐにヒカリに返したため、どうやらそれはただのD3だったよう  
だ。

「……………彼は確かにこれをD3以外の何かに変化させていま  
した」

光子郎はそう言うと、しかしと言って言葉を区切って言った。

「……………でもこれは大輔くんたちとなんの変わりのないただ  
のD3です……………」

「でもあいつはヒカリちゃんのD3を別のものに変化させていま  
したよ!？」

「……………それは僕にも分かっています! でも、  
このデジヴァイスにはなんの以上も変化も見られないんです……………」

光子郎がそう言うと、私たちはただ無言でヒカリのD3を見つめて  
いた。

side out





僕は今日、学校を休んでいた。

母さんが顔色が悪いから休めと言ったのもあるが、僕が布団から出てこないのが一番の理由だろう。

僕は悩んでいた。リョウさんのことを……

大切な友達だつてことは分かる。でも名前以外は何も思い出せない。それが僕にとってはどうしようもないくらい辛い事だった。

そんな僕の隣にずっといてくれるワームモンの姿がいつもより大きく見えた。

「……………ワームモン……………」

僕がそう小さく呟くとワームモンはすぐに目を開けて言葉を返してくれた。

「何？ 賢ちゃん？」

「……………ワームモンはずっとリョウさんの事、覚えていたの？」

「うん……………。リョウたちとデジタルワールドを冒険したっていう事と、」

リョウの名前だけは覚えてた……………」

ワームモンはとても気を使ってそう言った。  
分かってているんだろう。僕がリヨウさんの事で悩んでいることを・  
・  
・

「……僕は昔にデジタルワールドを冒険したことしか覚えていなかった……」

リヨウさんの名前も覚えていなかったんだ！

「……友達失格だね……」

僕がそう言うとワームモンは優しく僕の名前を読んでくれて、  
僕はワームモンを抱きながらゆっくりと眠りについた……

「 ちゃん……けん……けんちゃん……」

僕をそうやって呼ぶ声が聞こえ、目を開けてみるとそこには母さんの姿があった。

「 んん……どうしたの？ 母さん？」

僕があくびをしながらそう言つと母さんは焦りながら言った。

「 リョウくんが………リョウくんが来てるのよ！」

僕は母さんの言葉にどうして母さんがリョウウさんのことを知ってるかという疑問に気づかず、急いで玄関に走っていった。

玄関の扉を開けると、そこにはなぜか心が暖かくなるような笑顔をした

リョウさんの姿があった。

「よう！ 遊びにきたぞ！」

## 第二十二話 周り始めた歯車（前書き）

今日評価を見て私はたまげた……

文章評価とストーリー評価が5ずつ増えてる、だと……！？  
それで総合評価が32、だと……！？

しかもユニークが2000越え、だと……！？

作者は驚きのあまり何度もそれを見直してしまいました！

評価を着けてくださった方、ありがとうございます……！！

これからはその評価に恥じないようにラノベ片手に頑張っ  
て書いていきたいと思えます……！！

## 第二十二話 周り始めた歯車

「リョウさん……」

賢にとって今一番会いたくて、一番会いたくない人の姿がそこにあった。

「……そうしたんですか？ 今は授業中のはずじゃ……」

「学校はサボってきたぜ！」

リョウが賢の言葉を遮り、親指を立てて、清々しい笑顔でそう言った。

賢はその表情にため息をつく、自分の中に先ほどまでの暗い気持ち  
ちが  
なくなっているのに気が付いた。

「……リョウさんはすごいね……」

「？ 何が？」

リヨウは本当にわからないような顔をしてそう言つと、賢は何でもないですと言つて

先ほどの言葉をなかつたことにすると下を向いていった。

「……リヨウさんは僕がリヨウさんのことを忘れていたことを怒っていないんですか？」

賢がそう言つと、リヨウは不思議そうな表情をしながら言った。

「？ どうしてだ？ 賢は暗黒の種子の影響で俺のことを忘れていたんだから、

別に怒る必要はないだろ？」

賢は自分が暗黒の種子の影響で記憶を失っていたという事を知らなかったが、  
それを知つても、それでも！ といつて言葉を続けて言った。

「……僕は大切な友達のことを忘れていたんだ！  
……これは許されることじゃない……」

「それは違うぞ！ 賢！」

リヨウの突然の大声に賢は驚いて顔を上げた。

そこにいた少年の顔には先ほどのようなふざけたような表情は消えていた。

「……賢が暗黒の種子を埋め込まれたのは俺たちが原因なんだ……ミレニアモンの最後の悪あがきで撃たれたそれは仲間の一人が狙われたんだ……それを賢がかばって……ごめん……あの時俺たちが最後まで気を抜かなかつたらお前は……」

「それは違います！」

リヨウの言葉を今度は賢がさえぎった。

「……僕はその時のことは覚えていません……でも！僕はきつと後悔なんてしていないはずです！」

賢がはつきりそういうとリヨウは一瞬呆気にとられ、そして下を向いて小さく微笑んだ。

「……やっぱりお前は強いな、賢。……さすがはあいつの弟子なだけはあるな……」

「……いや、それだけじゃないな。賢！お前は自分が思ってるほど弱くないぜ！」



リヨウは賢の肩に手をおきながらそう言った。

「……弟子？ ……僕には師匠がいたんですか？」

賢はリヨウの言った言葉の中に気になるキーワードがあったため、それについて質問した。

「……ああ……心の師匠みたいなものだったな……」

リヨウが明らかに暗くなつた表情でそういうと賢は自分が触れてはならない事に触れてしまったことに気が付き、リヨウに謝った。

それをリヨウは賢の髪の毛をクシャクシャにしながら言った。

「別に賢が謝ることはないぞ！」

自分に師匠がいるってわかれば誰だってそいつが誰かが気になるしな。

……それにそいつは俺たちの仲間の一人だったんだ。

……いつかは知ることになってたんだから……」

「……という事はその人は前に言ってた、選ばれし子供なんですか？」

「……ああ。」

この前濁流に飲み込まれて死んだ選ばれし子供がいるって言った  
だろ？

……そいつのことさ」

リヨウは賢の肩に置いた手をどけながら言った。

「……そいつは俺たちの中でリーダー的存在だったんだ。

それでいつも仲間のことを考えてるような奴だった……」

「……すごい人だったんですね……」

リヨウがどこが自慢げに語る姿を見て、賢は本当にすごい人だった  
んだな、と思った。

「それで賢……お前に大事な話がある……」

突然そう告げたリヨウの顔は真剣だった。

しかし、その顔はどこか言いにくそうな顔をしていた。

「……なんですか？」

その表情をみて、賢も真剣なまなざしでリヨウを見つめた。

## 第二十二話 周り始めた歯車（後書き）

今回は戦闘はありませんでした。

しかし、次からは物語が動き始める……気がします……

取り合えず1〜3話の内に進み始めます！ドン

なので書き方のアドバイスがもらえるとうれしいな！

………すみません………

感想、または評価をお願いします！

## 第二十三話 見え始めた突破口？（前書き）

最近見るたびに評価が増えていて、作者は怖くなってきましたw

お気に入りも少しずつですが増えてきました！

今回は忠告どおり、ストーリーが進みませんでした………すいません

多分後二回ぐらいで進み始めます。

それと昨日は更新できずにすいませんでした。

思いつかなかったならまだしも、昨日は学校の体育で疲れてダウンしていただけでした………

前振りが長く？ なってしまいました、ここからは本編です！

あい変わらずダメ文です………

どうしたら良くなるか、アドバイスを下さると助かります！

## 第二十三話 見え始めた突破口？

side 光子郎

あれから僕たちはブイモンたちが回復するまでその場所で休み、そして回復するとブイモンたちをアーマー進化させ、それに乗って帰った。

パソコンルームにつくと、外はもう赤色に染まっており、カラスの姿が所々に見え、

それはもうすぐ学校の下校時間を意味するものだった。僕たちは先ほど後回しにした男についての話を始めた。

「……皆さんは今回のことで何か言いたいことがありますか？」

まず僕がそう言って皆さんに尋ねた。するとほぼ全員がピクリと反応した。どうやら全員に言いたいことがあるようだ。

「……僕はあの男がデジヴァイスを変化させたのが気になります……」

伊織君がそう言うと、大輔君、タケル君、ヒカリさん、京さんが暗い顔をした。

無理もないだろう。

自分たちが一年以上使ってきたD3を自分たち以上に使いこなす男。その男はデジモンで、さらに他のデジモンたちを殺しまわっている最低な存在だ。

……しかし、彼は今回僕たちを助けている。

大輔くんたちもそれがわかっており、しかし納得できていない様子だった。

「……僕もそれは気になります。」

「ここにいる皆さんもそれは気になっていると思います。」

僕はそう言うと先ほどヒカリさんに借りた、ピンク色のデジヴァイスを接続した、パソコンを大輔君たちに見えるように置いた。

「これを見てください。」

D3をパソコンを使って調べましたが、何の異常も見られませんでした。

「……他のD3とも比べましたが何の違いも見られませんでした。」

パソコンに移っている数字を見比べても何の違いがないことを大輔君たちが確認した。

しかし大輔君たちは納得できていないような表情だった。

「でも！ …… あいつは確かにヒカリちゃんのD3を何かに変化させていたんだ。

なら、D3になにか細工したはず……

「…………それは違うわ」

大輔くんの言葉をヒカリさんが遮ってきた。

太一さんはヒカリさんが言った意味を理解できずにどういう事だと質問した。

理解できなかったのは太一さんだけではなく僕も含めた全員がその意味が理解できなかった。

「……………だつてあの人はD3を貸せつて言ったけど、

別にデジヴァイスでも構わないつて言つてたわ」

ヒカリさんの言葉に僕を含めた全員がハツとなった。

確かに奴はデジヴァイスでも構わないと言つていた。

いや、逆にはじめはD3ではなく、デジヴァイスを要求していた！

……………D3を変化させるといふ、余りにも衝撃な事のせいだそんなことは忘れてしまつていた。

どうやら太一さんたちもそうだったようだ。

「……確かに言っていました。  
……どうやら僕たちは思った以上に奴の話聞いていなかったよ  
うです……」

僕がそう言っつて顔を俯けると、

何かを思い出したのか、タケル君が大きな声で言った。

「！ そうだ！ あいつはデジヴァイスを変化させるのを  
僕たちに見られたくないって言っていた！」

タケルくんの言葉に僕を含めた全員がハツとなった。

「！ 確かに言っつてわ！」

私たちにこの方法を私たちに見られたくないからあまり使いたく  
ないって！」

「……つまり、やり方次第では俺たちもあれが出来るかも知れない  
っつてことか……」

京さんの言葉に太一さんがそう呟いた。

でも僕はそれを不定するように太一さんの言葉を否定した。

「……多分、それは不可能です……」



そう言うところにいる全員が僕のほうを一齐に見た。その顔はどうして？ という疑問を持った顔だった。

「……………どうしてだ？ 光子郎？」

太一さんがそう言うのと僕は自分の考えを口にした。

「確かにD3を奴が使っていたように変化させることは出来るかも知れませんが……………」

でも、僕たちがそれを使うことが現実的に不可能です」

「……………もっと分かりやすく言ってくれないか？」

「なら先程あったことを例にして説明します……………」

まず、黒コートの男はヒカリさんのD3を変化させた。

それを使ってアーマー進化……………いえ、

奴はスピリットエボリューションと言っていましたね。

とにかく進化しました。……………ここまではよろしいですか？」

僕がそう言うのと皆さんは頷いてくれた。

どうやら全員理解出来ているようだ。

「なら続けます。奴はD3を使って自分で進化しました。

という事は……

「……自分で使わないと意味がないという訳か……」

「正解です」

僕の言葉を太一さんが遮って結論を言った。

どうやら皆さんも理解したようで、

先程までの何とかなるかも知れないという空気が消えてしまっていた。

……仕方がないんです。

出来ないことは出来るだけ早いうちに知っていたほうがいいんだから……

「……なら俺たちがあれを使うにはブイモンたちが自分でD3を使  
って

進化しなきゃいけないってことですか？」

「……そう言うことになりますね」

大輔くんが僕が思っていたことを言ってくれたおかげで説明が必要  
なくなりました。

これが出来ればテントモンたちも戦うことができるようになる！  
これは何としても成功させなければ……

「よし！ 明日からはデジタルワールドで特訓だ！  
コロモン！ 絶対にこれをマスターしようぜ！」

「ボク、がんばるよ〜！」

「ワテも頑張ります！ 光子郎ハン！」

太一さんがそう言つとコロモンとテントモンは張り切ったような声を上げた。

「…………どうやら僕が言うまでもないみたいですね…………」

太一さんの言つとおり明日からデジタルワールドで特訓したいと思えます！

皆さんもそれでよろしいでしょうか？」

僕の言葉に皆さんは力強く頷いてくれた。

「なら、明日から特訓です！」

しかし、その前にゲンナイさんに会つて、話がしたいと思えます。なので明日は先にゲンナイさんの家に向かいますよ！」

僕はそう言つてパソコンを閉じると、

もう下校時刻ギリギリなことを皆さんに伝え、ゾロゾロとパソコンルームを出た。

## 第二十四話 揺らぎ始めた日常(前書き)

評価とお気に入りが増えて毎日上がっている……

評価をくださった方、ありがとうございます……！

お気に入り登録してくださったお方、ありがとうございます……！

これからも最低でも2日に一回は更新できるように、頑張りたいと思います……！

## 第二十四話 揺らぎ始めた日常

見上げる限り、空は真っ黒な空間……地面は真っ白な場所……  
たくさん真っ黒な渦が縦横無尽にある場所で黒コートの男は立っていた。

男の手には真っ白な鍵の剣……光のキープレードが握られていた。

「……貴様……何者だ!？」

そんな声を上げたのは、男の数十メートル前方にいる数十体のデジモンの中の一体だった。

「俺が何者かは名乗る必要はない……」

男はそう言うとキープレードを持った右手を肩ぐらいまで上げ、そのデジモンに向けた。

「……ここからさっさと引き返せ。」

「ここから先はお前たちが住んでいる場所とは違う世界だ」

男が静かにそう言うとデジモンたちは一斉に笑い声をあげて言った。

「ギャハハハ!!! そんなことは知っているさ!  
俺たちはその世界を支配するためにここに来んだからな!!!」

デジモンたちがそういうと男は先ほどよりも低く、そして小さな声で言った。

「……成熟期十数体で支配できる世界だと思っているのか？」

「お前だって分かっているんだろ？そっちの世界は俺たちの世界より弱い世界だ。」

こっちの世界の成熟期で完全体に勝てるほどのな……  
しかもそっちの世界ではほとんど究極体は存在しない……  
なら、俺たちだけでも世界の一部なら支配は簡単だって事だ！」

男はその話にピクリと反応した。

「……そんな話、どこで知ったんだ？」

「バーカ!!! お前になんて教えるかよ!!」

デジモンたちはそういうと先程のように笑い声をあげた。

「と、いう事だから俺たちは今から世界征服に行からそこをどけ!

俺たちは今、最高に気分がいいから今なら見逃してやる」

「……引くつもりはないのか？」

「ああ〜ん！？ 聞こえなかったのか？」

俺たちは今から世界征服に行くって言ってるんだろ！？

いい加減、殺すぞ？」

デジモンたちはさういうと、先程までは全くなかった殺意を一斉に男に向けた。

男はそれを無視すると先程まで上げていた腕をおろし、言った。

「……退かないなら仕方がない……お前たちの命はここまでだ」

男はさういうと握っていたキーブレードを消した。

「……おいおい、戦つか戦わないかどっちかにしろよ！！！」

デジモンたちの内の一体がさういながら男に向かって走ってきた。

「消える！！！」

男はその場を動かさず、ただ一言、言葉を呟いた。

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d 」

「 な！？」

デジモンは驚きの声を上げると男に切られ、消滅した。

「 な、なんなんだ！？ あの剣は！？ 」

デジモンの一体がそう言った。

男の手には神々しいほどの光を放った剣が二本握られていた。

「 ……この技は …… によつて、

特定の制御された場所では使えない技だ ……

契約した武器を引き出す魔法 …… いや、魔術か ……。俺が唯一使える魔術さ …… 」

デジモンたちは既に男の話など聞いてはいなかった。

自分たち闇のデジモンにあのような聖なる光を放つ剣など …… 成熟期である自分たち

に防ぎきれぬものではないと感じ取ったのだ。



「ちて」

男がそう言いながら自分たちに歩み寄ってきた。

一歩ずつ一歩ずつゆっくりと……

「ご覧の通り、お前らが挑むのは光の剣。聖なる剣！」  
（光の剣）

その後に男が言った言葉をフードで見えないはずの口元がニヤリとしたように

デジモンたちには見えた。

「恐れずしてかかってこい！！」

男はそう言いうと、デジモンたちは挑発されたための怒りのせいか、それとも、その場に留まるのが耐えきれなくなったのか、デジモンたちが一斉に男に向かって走り出した。

s i d e 光子郎

「今日も秋山君は休みですか……」

次の日の放課後、大輔君が僕に今日も秋山君が学校を休んだことを報告してくれた。

先生の言う話では家庭の事情らしいが、恐らくは嘘だろう……

「そうですね……なら、とりあえずは秋山君のことは置いておき、デジタルワールドに行つて、ゲンナイさんに話を聞きましょう」

僕はみんなにそう言った。

分からないことを考えるよりは、今、出来ることをするほうがいいと僕が思ったからだ。

大輔君たちもそれを分かってくれて、頷いてくれた。

そして京さんの掛け声とともに、僕たちはデジタルワールドへ向かった。

ついた先のデジタルワールドは前のような異変は起こっておらず、いつものような平和な風景だった。

そしてそこにはデジモンたち……それぞれのパートナーデジモンたちが

僕たちを迎えてくれた。

ちなみに今ここにいるメンバーはいつも通り、

僕、太一さん、大輔君、タケルくん、ヒカリさん、伊織君、京さんだ。

僕たち以外の初代選ばれし子供は、今年が受験だったり、外国にいたり、

様々な理由のため、あまり、集まることは出来ない……

ちなみにその人たちのパートナーデジモンはそれぞれの家に幼年期デジモンの姿で生活している。

おっと、話がずれてしまいました……

とにかく僕たちはゲンナイさんの家に向かった。

昨日聞けなかった話を聞くために……

「よく来たな。選ばれし子供たちよ……」

ゲンナイさんの家に着くと、青年の姿をしたゲンナイさんが僕たちを迎えてくれた。

……やっぱり見慣れないな……

「こんにちは、ゲンナイさん。今日は昨日聞けなかった話を聞きに来ました」

僕がそう言つとゲンナイさんは先ほど僕たちに向けてくれた笑顔を消し、

真剣な表情になった。

「……分かった。話そう……」

「ここではなんだから、中で話そう」

ゲンナイさんの言葉に僕たちは頷き、ゲンナイさんについて行った。

「……さて、昨日起きたことだったな……」

僕たちが全員座れるような広い場で腰を掛けると、ゲンナイさんが話し出した。

「……昨日、このデジタルワールドのデータが乱れた」

「？ どういう事？」

「つまり、昨日、デジタルワールドの様々な場所に出現していたゲートが開いたんだ」

大輔君の呟きに、ゲンナイさんがそう言うと、僕たちは驚きの声を上げた。

出現していたゲートという事は確か、異変が起きてから発生したゲートのことですね。

それは確か人間界ではなく、デジタルワールドにつながっているはずだ

つまり……

「……昨日、かなりの場所でゲートから出現したデジモンが暴れまわったんだ」

「！ 昨日暴れたのはメガドラモンだけじゃなかったのか！？」

「！ 完全体まで現れていたのか！？」

太一さんの言葉に今度はゲンナイさんが声を上げた。

「え？ ゲンナイさんって確か、

このデジタルワールドを管理してるんじゃないですか？

それなのに昨日起きたことを知らないなんて……」

「……すまないが、ゲートが開いた瞬間、その場所のデータが乱れたんだ……」

だから昨日起きたことは、報告があったことしかわからないんだ。……それで昨日完全体が現れたという報告は来ていない。……つまり……

「……完全体が現れたのは僕たちが行った、場所だけだったという事になります……」

ゲンナイさんの言葉を僕は遮るように言った。

質問をした京さんも納得したような表情をしていた。

「……そういうことになるな。」

それにしても、完全体相手によくぞ無事だったな？

君たちは既に完全たちになる力を失っているはずだが……」

「……そのことについては今からお話しします……」

僕はそう言って、ゲンナイさんに昨日あったことを話した



「……そんなことがあったとはな

……黒コートの子デジモンがデジヴァイスを変化させて戦つか……」

「……何か心当たりはありますか？」

僕の言葉にゲンナイさんはゆっくりと首を横に振った。

「……すまないが心当たりはない……」

「……そうですか……」

ゲンナイさんの言葉に僕たちはもしかしたらと少しだけ期待していただけあって、  
見た目で分かるくらい落ち込んだ。

「……それにしてもデジモンが自分でデジヴァイスを使って変化させる。

……そんなことは可能なのか……？」

「でも、俺たちは確かにこの目で見ました！  
男がD3を別の何かに変化させるのを！」

「……疑っているわけではない……  
まさか!？」

「どうかしたんですか!? ゲンナイさん!？」

大輔君の言葉にゲンナイさんはそれを不定し、  
そして突然声を上げたため、僕はゲンナイさんに尋ねた。

「……いや、何でもない……それより君たちはこれからどうするんだ?」

「……僕たちはこれから男がやった、デジヴァイスの変化を試してみたいと思います」

「そうか……、なら私は力を貸すことは出来ないな……  
私はデジタルワールドで起きている異変を再び調査するでしょう」

ゲンナイさんがそう言うと、僕たちはここにおいても邪魔になるだけ  
と思い、  
ゲンナイさんの家を出た。

そして男のようにデジヴァイスを変化させる特訓をパートナーデジ  
モンとともに頑張るが、  
変化することは一度もなかった。

## 第二十四話 揺らぎ始めた日常（後書き）

ついにやってしまった……

光のキープレードを持った男がやった詠唱はみなさんが知っているあの詠唱です。

効果は原作よりも遙かに？劣っています。

しかも自由に使えません……

デジモンの小説にこの詠唱を使って、怒

っている方がいらしゃるかもしれません、謝ることしかできません

ん……

## 第二十五話 光子郎の決意（前書き）

評価が40越え……

評価をくださったお方、ありがとうございます……！

そしてすみません……！

昨日投稿できなくて……

投稿できなかった理由はネタが思いつかなかったからです……

そして今回はどちらかといえば必要ない話です……

最悪、大輔の話を読んだら他は読まなくても物語に影響はないと思います……

なら、なぜこの話を書いたかって？

……それは……選ばれし子供達も成長しているとわかってもらいためです……！

……今回それがわかるのは光子郎だけですが……

## 第二十五話 光子郎の決意

side大輔

特訓を開始して数日、あれからも一度もデジヴァイスが変化することとはなかった。

俺たちは毎日特訓とデジタルワールドの

「……………!? 皆さん!!」

光子郎さんが急に大きな声を上げた。

その声はどこか慌てているような声だった。

「どうしたんですか？ 光子郎さん？」

俺がそう尋ねると光子郎さんは深刻な顔で言った。

「……………またゲンナイさんと連絡が取れなくなりました」

その言葉に俺たちは一斉に反応した。

「……………という事はデジタルワールドでゲートが開いているというわ

「けか！」

「……………恐らくは……………」

太一さんの言葉に光子郎さんは短くそう答えた。

「なら行きましょう！」

デジタルワールドを平和にするのが俺たち選ばれし子供たちの使命なんだから！」

俺がそうやって思っていたことを口に出すと、横からタケルが口をはさんできた。

「……………また完全体がいたらどうするつもりなの？」

「ダークタワーがないっていう保証もないし！」

「……………その時はその時だ！」

俺がそう言うとタケルはため息をついた。  
どうしてだ？

「……………やっぱり大輔君は大輔くんだね！  
分かった。行こう！ デジタルワールドへ！！！」

「「「おう！！！」」

タケルの言葉に太一さんたち全員が声を上げた。  
なんだかよくわからないけどみんな行く気になってくれたようだ。

「よし！　じゃあ行くぜ！！」

俺はそういってパソコンルームのパソコンにD3を向けて、ゲートを開いた。

デジタルワールドに来てみると、そこには前来た時のような平和な空気はなく、  
所々で爆発音が聞こえる場所に変わっていた。

「……これは予想以上に危険な状態ですね……」

「！ そんな冷静に言ってる暇なんてないだろ！！！」

光子郎さんが呟くと、太一さんが掴み掛った。

「お兄ちゃん！ 今はそんなことをしている暇はないわ！」

ヒカリちゃんがそういうと太一さんは渋々と手を放して、光子郎さんに謝っていた。

「……とりあえずここから一番近い、ムゲンマウンテンのほうに行きましよう。」



別れての行動はなしです」

光子郎さんの言葉に誰も文句は言わなかった。

俺はみんなバラバラに行動して、一気に解決したかったが口には出さなかった。

俺にだって分かる。今の俺たちには離れて行動するだけの力はない

……

それはメガドラモンの戦いで嫌と言うほど理解している。

俺たちは光子郎さんの提案で、今の内に進化することになり、

ジヨグレスが出来る、ヒカリちゃん、京、タケル、伊織はそれぞれの  
デジモンをジヨグレスさせ、

シルフィーモン、シャッコウモンに進化させた。

俺は賢がないからジヨグレスが出来ないため、

ブイモンをエクスブイモンに進化させた。

光子郎さんもテントモンをカブテリモンに進化させた。

太一さんはアグモンは進化しても飛べないし、大きくて背中に乗せて飛べないから、

進化せずにいた。

すぐに戦闘になっても戦えるようにと光子郎さんの提案で

俺たち選ばれし子供とアグモンはカブテリモンの背中に乗った。

……最近の光子郎さんはこういう戦闘に関する作戦も  
積極的に言ってくるようになった。

実際、ありがたいんだけど、急にどうしたのだろう？

s i d e o u t

s i d e 光子郎

皆さんが僕の提案に乗ってくれた。  
僕は戦闘に関する知識は素人とほとんど変わらない。

僕はそんなことよりもデータ収集といった情報を使って皆さんをサポートしてきた。

……でもそれだけではダメだと最近思った。  
きっかけは黒コートの男との出会いだ。

僕たちは奴と戦闘を行った。……そして負けた。  
圧倒的な戦力差で負けたならまだ納得もできる。  
相手が人質を取るなどの卑怯な戦法をとったならまだいい訳ができる。

……でも、奴はそんなことをせず、ただ真っ直ぐ僕たちと戦った。

戦ったとは二回。

一度目は進化中の攻撃。

これは卑怯なことではないと丈さんも言っていた。  
僕もそう思う。

戦闘中に動きを止めた相手を待たなければならぬなんてルールは存在しない。

ゆえに、一度目の敗因は油断だ。

そして二度目の戦闘。

二度目の戦闘は初めにエンジェモンが一对一で勝負を挑んだ。  
しかし結果は惨敗。

奴は、一撃でエンジェモンを倒してしまった。

この時僕は、奴が完全体デジモンではないか？ と、思った。  
しかし一度目の戦いでそれはないと結論を出してしまっている。

なら、どうやってエンジェモンを一撃で倒したのか……  
その答えはすぐ近くにあった。

パタモンにあの時のことを聞いている時、それを聞いた丈さんが言  
ってくれた。

『もしかしてそいつはただ攻撃するのではなくて、  
人体にダメージが通るように攻撃をしたんじゃない？』

僕はその仮定を聞いて分かった。  
丈さんが言った事は仮定では無く、結論だという事を……

それが分かるとなぜエンジェモンが一撃で倒れたのかもすぐに分か  
った。

理由は単純……ただ、人体の弱点である部分を攻撃されただけ……  
実際はエンジェモン自体が出していたスピードの分、遥かに威力が  
上がっているが、  
実際はただそれだけ。

僕はこの瞬間に自分の中にある仮定ができた。

奴は自分よりも強い奴と戦い慣れてるのではないかと……

そんなことはありえない。  
あんなに強い男が苦戦するほどの奴がいたらゲンナイさん……  
デジタルワールドの守護者たちが気が付かないはずがない。

……僕たちに知らされないはずがない……

その時はそう思ってた、この考えを心に閉じ込めた。

しかし、この閉じ込めた考えが再び出てきたのは奴とメガドラモンとの戦いだっただ。

僕たちが敵わない完全体相手に僕たちが来るまでたった一人で戦い、そしてそんな状況でもいくつもの戦略を考えだす……

さらに僕たちが一つも思いつかなかった作戦を奴は4つも思いついていた。

そのうちの一つは出会った時点で逃げるという選択肢だった。

もし仮に僕たちが逃げていても、男は負けることはなかっただろう

……いや、もしかしたら一人で勝っていたかもしれない……

そんな男に僕は恐怖した。

奴が本気で僕たちを消そうとすれば簡単に消すことが出来るかも知れない……

僕はそれを理解したとき決意した。

少しでも奴の考えが分かるよう……少しでも奴に対抗できるよう……

……奴を倒せるように僕が……

僕はそんな決意を胸に秘めながら、森の上を飛ぶカブテリモンの背  
中の上で、

戦いに使えそうな作戦を考えていた。

## 第二十六話 選ばれし子供たちの決意（前書き）

ひ、評価が50越えだと・・・!?

いつも評価をくださっている方、本当に有難うございます!!!

私の小説が50を超えるなんてはじめは夢にも思いませんでした!  
!!

そして今回もすみません……………

今回の話も話してはっかです……………

次からは当分はこんな風に話すことはなくなると思います……………

## 第二十六話 選ばれし子供たちの決意

空に気味が悪い雲が浮かぶ中、森の上を飛ぶ複数にデジモンの上に選ばれし子供たちは乗っていた。

子供たちの顔にはいつものような明るい表情を浮かべておらず、誰が見ても緊急事態だと感じ取れるほどの空気を出していた。

選ばれし子供たちがムゲンマウンテンに向かって数分、前方には先程よりも近くなったムゲンマウンテンがあった。

「……そろそろ目的地ですね……」

そんな中で光子郎は誰もが理解していることをあえて口にした。

子供たちはその言葉にそうねすね・・・などの言葉を前を向いたまま言った。

その様子は、どう見ても緊張をしている表情だった。

光子郎はそんな子供たちに何かを言おうとしたが踏みとどまった。光子郎には見つからなかったのだ。今の子供たちにかける言葉を。

無理もないと光子郎は思った。

最近の自分たちはあまりにも不甲斐なさが目立ったのだから。

いや、それもあるかも知れないが、恐らく一番の理由は、自分たちに異変を防げるか？ という思いだろう。



最近の子供たちは一体もデジモンを救うことが出来ていない。

むしろ目の前で無残にも砕け散ったデジタマを見すぎている。  
そんな自分たちに自信が持てないのは仕方がないだろう・・・  
デジタルワールドに行こうと一番に声を上げた大輔ですら……

結局、子供たちはムゲンマウンテンに着くまで一言も話すことはなかった。

「……着きましたね」

ムゲンマウンテンにたどり着き、山の中央辺りに着陸すると、カプテリモンから降りた子供たちの中で初めに声を上げたのは光子郎だった。

ムゲンマウンテンの風景はいつもと変わらず、デコボコとした地形、斜面にそこから生えるように置いてある岩が道を険しくしており、登山には向かない地形だった。

しかし、いつもと違うのはムゲンマウンテンの上空が真っ黒な雲で覆われていた。

先程いた方を見ると、その上空はいつもと変わらない青い空があった。

「……どうやら異変が起きているのは間違いないさそうですね……」

辺りを見回しながら大輔たちの返答を待つことなくそう言うと、ムゲンマウンテンの頂上辺りを見上げた。

「……なにがあるかは分かりませんが、油断は禁物です。全員固まって行動しましょう」

大輔たちが頷くと光子郎はカブテリモンたちにあまり高く飛ばず、自分たちを囲むようにいるように言い、ムゲンマウンテンを登り始めた。

「……俺たちは今回こそ選ばせし子供たちらしい行動をとれるのかな……」

「……どうしたんだ？ 大輔。」

お前らしくないぞ？ パソコンルームでの言葉はどうした？」

「……俺らしくないのはわかってますよ、太一先輩……  
でも、最近の自分の活躍を考えると、どうしても自信が持てないんですよ……」

大輔の言葉に太一……いや選ばれし子供たちは黙り込んでしまった。

大輔の悩みはここにいる全員が悩んでいることだ。黙り込むのは無理もなかった。

「……なら皆さんはお帰りください」

光子郎の言葉に太一たちは驚愕の表情を浮かべた。

「今の皆さんは異変を抑えられると思ってはいません。」

そんな人がいたら今回も僕たちは何も守れません」

「光子郎！ そんなことは俺たちだって分かってる！！  
でも…「分かっていません！」！？」

「皆さんは恐れているだけです！ また目の前でデジモンの死を見ることを……」

光子郎の言葉を言い返せるものはここにはいなかった。

結局はそうなのだ。選ばれし子供たちはまだ子供。

目の前で本当の死を迎えるデジモンを

見たくないと思うのは当然なことなのかもしれない……

「……僕だって、そんな光景は見たくはありません……」

でもそれと自分に自信が持てないのは関係ありません！！

僕たちは選ばれし子供です！ そんな僕たちが自信を持たなければ、

失う命があるんですよ……」

光子郎の最後の言葉に太一たちはハツとなった。

自分たちは選ばれし子供だ。自分たちははデジタルワールドを救うために選ばれた。

なら、そんな自分たちがしなければならぬのは落ち込むことではない！

ほんの数週間前まで当たり前に思っていたことを大輔たちは思い出した。

「……そうだ……俺たちは選ばれし子供……なら俺たちはデジタルワールドを

何があっても救わなきゃならないんだ！」

「……そうだったな……それたちはそんな当たり前のことを忘れていたんだな……」

大輔がそういうと太一はそういつて俯いた。

しかし、すぐに顔を上げ、先ほどまでの暗い顔が嘘なような希望であふれている表情で言った。

「よおしくし、デジタルワールドに起きている異変を全部解決して、あの黒コートの奴をブツ飛ばすぞ！！！」

「『『『おお！！！！』』』」

太一の決意表明に光子郎を含んだ全員が大声で賛同した。

「……………この先が頂上だな……………」

ムゲンマウンテンの頂上付近の岩の裏で太一はそう言った。

「はい。ここから先はこの山の頂上……………昔、デジモンと戦ったところですよ……………」

光子郎の言った言葉にタケルはピクリと反応したが、すぐにごまかすように言った。

「……この先に異変の原因のデジモンがいるんですか？」

「……それは分かりません……でもこの先のゲートに出現していたゲートから何かが

来たのは間違いありません……」

光子郎はそう言いながらパソコンを開いてタケルたちに見せた。  
ムゲンマウンテンの地図にある門のようなアイコンが赤く点滅していた。

「これは僕とゲンナイさんが作ったものです。」

この門はゲートを表しています。そして赤いアイコンが……

「……ゲートから来たデジモンのことですね？」

「正解です、タケルくん。」

つまりこの先にデジモンがいることはほぼ間違いありません！」

光子郎がそういうと大輔たちはそれを凄い、などと言って褒めるが  
光子郎が

「……しかしこれは異変の近くに行かないと感知できません……  
どうやらゲートが開くと、そこから妨害データがでてしまうよう  
です……」

そのせいで、ゲンナイさんとも連絡が取れませんし……」

光子郎はそう言いながらパソコンを閉じると大輔たちの方を言った。

「……皆さん、準備はよろしいですか？」

大輔たち、デジモンたちはその言葉に頷いた。

「……なら、行きましょう！」

光子郎がそういって一歩前に踏み出すと、  
太一はアグモンをグレイモンに進化させた。

そして光子郎よりも先にデジモンたちが飛び出した。



## 第二十七話 成長する者（前書き）

前の話を投稿した次の日に評価を見てみると・・・・・・・・60を超えていた！！！！

お気に入りももうすぐ20に・・・・・・・・

そしてユニークが20000突破！！！！！！

皆さん、私の小説をここまで読んでくれて本当に有難うございます！！！！

そして新しく評価してくださったお方、  
評価してくれてありがとうございます！！！！

これからも頑張って行きたいと思っているので、  
応援をよろしくおねがいします！！！！

あと感想もいただけたら嬉しいです！

## 第二十七話 成長する者

ムゲンマウンテンの頂上は火山が噴火したあとのようにてっぺんがなく、

大きな空洞になっている、そしてその空洞の中はゴツゴツとした岩が転がっている。

そんなムゲンマウンテンの頂上の中央・・・空洞の中心には暗黒の力を放つ、

ゲートが出現していた。

光子郎たちは山の頂上から中央を見つめた。

そこには3体のデジモンがゲートの近くに立っていた。

「あれは・・・タスクモンとサイクロモンに・・・レアモン!？」

伊織がそういつてなぜここにいるか分からないという表情をすると光子郎が説明した。

「……………どうやらゲートを通ってこちらに来たようですね……………」

「どれもこの辺にはいないデジモンですから……………」

「なら話を聞いてみましょう!　もしかしたら間違ってこっちに来たのかもしれないわ!」

「……それは多分違うわ……」

「違っつてどういふこと？ ヒカリちゃん？」

「……あのデジモンたちからは暗黒の力を感じるの……」

ヒカリは京にそう言った。  
そうするとエクスブイモンが言った。

「大輔！ 俺もそう思う。 あいつ等からは闇の力を感じる……」

エクスブイモンはそう言いつと急に戦闘態勢をとった。

他のデジモンたちも戦闘態勢をとったので、何事だ、  
と言わんばかりに大輔たちが周りをきよろきよろすると  
カプテリモンが話してくれた。

「……どうやら向こうもこっちに気が付いたようでっせ！」

ガプテリモンはそういうとサイクロモンたちの方へと飛び去った。  
他のデジモンたちも同様にサイクロモンたちの方へ向かった。

「……どうして子供がこんな所に……！ お前らは選ばれし子供  
たちか!？」

「そうだ！ 大輔たちは選ばれし子供だ！」

エクスブイモンがそう言い、サイクロモンたちにゲートの方へ帰るように言う

サイクロモンたちが下品な笑い声を出した。

「ギャハハハハ！！！！ 俺たちは運がいいみたいだな！

こんなに早くに選ばれし子供たちに会えるとは！」

「どういう事だ！？」

「俺たちはな・・・選ばれし子供を消すために生き返ったのだ！！  
お前たちではないが、選ばれし子供には恨みがあつてな・・・  
悪いが死んでもらおう！！！！」

サイクロモンはそういうと口を大きく開け、  
エクスブイモンたちの方に向けて言った。

「喰らえ！！『ハイパーヒート』！！！！」

「くっ！！」

それをエクスブイモンたちは飛行、グレイモンは横にジャンプする

ことで避けた。

その攻撃をまともに受けた地面は溶けていた。

「お前らはこの数の差が分かっているのか？」

「ハ！ お前らなんぞ成熟期3体で十分だ！！」

タスクモンはそう言いながら空中から着地しようとしている  
グレイモンに向かって走り出した。

『ホーンドライバー！！！！』

「くっ！！」

グレイモンはそれをタスクモンの角を持つことで直撃を避けたが、  
タスクモンのあまりの突進の力にグレイモンは吹き飛ばされた。

「喰らえ！！！！」『トップガン！！！！』

シルフィーモンは腕を前に出し、レアモンに向けて放った。

その攻撃をレアモンは避けることなく、直撃した。

レアモンは粉塵に埋め尽くされ、姿が見えなくなった。

シルフィーモンはそれに疑問を感じたがすぐにその場を離れようと

した、  
すると、その中から声が聞こえてきた。

「グププププ！！　オラにそんな攻撃は通用しない！！！！  
オラを倒したかったら全員の一齐攻撃でもするんだな！！！！」

「なら同時に攻撃だ！！  
行くぞシルフィーモン！！　『アラミタマ！！』」

「分かった！　『トップガン！！』」

シャッコウモンがそう言うと両目から赤い光線を放った。  
シルフィーモンもそれに合わせて自分の必殺技を放った。

その攻撃をまともに受け、再びレアモンは地面からでた粉塵に包まれた。

「今度こそやったか！？」

シルフィーモンがそう言うと再び粉塵の中から声が聞こえてきた。

「グププププ！！　お前らは本当に完全体か？  
二体がかりの攻撃でオラを消滅させることができないなんて笑えるんだな！」

その声を聞いてシルフィーモンとシャッコウモンは驚愕の表情をした。

自分たち二体の必殺技をまともに受けて倒せない成熟期がいるとは思っていなかったんだろう。その表情には絶望も含まれていた。

その戦いを遠くから見ていた子供たちも慌てはじめていた。

「どうするんだ!？」

サイクロモンとタスクモンのコンビネーションのせいでこっちは攻撃できなくて、

頼みの綱のシルフィーモンとシャッコウモンもレアモンにダメージを与えることが

出来ないなんて……」

大輔が頭をかきながらそう言うと京が、何かを思いついたのか、突然大きな声を上げた。

「! そうだわ!! サイクロモンとタスクモンは一先ず置いておいて、

まずレアモンを倒したらいいんだわ!!!!」

京がそう言うと光子郎は首を横に振って言った。

「……それは出来ません」

「どうしてですか!?!」

「此処からじゃ分かりにくいかもしれませんが、カブテリモンたちの表情を見てください。カブテリモンたちは既にサイクロモンとタスクモンのコンビネーションに避けるのに精一杯です。」

サイクロモンたちを置いて行くなんて出来ません………  
そしてレアモンには『ヘドロ』という危険な技があります。

……たださえ強力なおいの毒ガスを放っているレアモンのヘドロは  
下手をすれば一撃で成熟期を倒す力を持っている可能性があります。  
す。

つまりシャッコウモンたち完全体二体で戦うのがベストです。普通は  
「

光子郎は最後の言葉を強調しながら言った。  
その口元は少しだけ吊り上っていた。

「……普通は?」

「はい。普通はそうやって戦うのがベストでしょう。」

……最近の僕なら確実にそうやって戦っていました……  
でも、今は違います!」



太一の言葉に光子郎はそう答えると、  
一歩前に踏み出して、右手を大きく上げた。

「さて今から反撃と行きましょうか」

光子郎は手を上げながら後ろの太一たちの方を向いて言った。

第二十七話 成長する者（後書き）

子供たちだけとかかなり書きにくいです……

他のキャラが出る時と比べたら3倍ぐらいも書くスピードが違います……

でも、子供たちも活躍させないと行けませんね……

第二十八話 反撃開始！（前書き）

お気に入りがついに20に!!!

そして評価が60後半に!!!

ラッキー77まであともう少し・・・

え？ 777じゃないと意味が無いだつて？

いいんですよ！ わたし的に77でも縁起がいい気がしますし

## 第二十八話 反撃開始！

「……………どういづつもりだ？」

サイクロモンはエクスブイモンたちがとつた行動を目にしてそう咳いた。

タスクモンとレアモンは口にはしなかったが、その表情にはサイクロモンと同じ疑問の表情をしていた。

エクスブイモンたちがとつた行動は単純なことだった。

シルフィーモンとシャッコウモンがサイクロモンたちの方に行き、その代わりにレアモンの前にエクスブイモンが来ただけの単純な作戦だった。

「グプププ！！ お前一人でオラを倒せるとでも思ってるのか？」

「それはどうかな？」

エクスブイモンはレアモンの言葉に短くそう答えると空に飛びあがった。

そして胸に刻まれたXの文字を光らせた。

『エクスレイザー！！』

その攻撃をレアモンは避けることなくただ正面から喰らった。先程のようにレアモンにはダメージがなく、相手もそれが分かっているのに  
なぜ攻撃してきたのか疑問に思っていると地面から吹き荒れた粉塵で見えない  
エクスブイモンが言った。

「お前なんて俺一人で十分だ!!!」

エクスブイモンがハッキリそう言うとレアモンはその言葉に怒りを覚えた。

「オラに挑発するなんていい度胸だな!!!  
オラを怒られたことを後悔させてやるんだな!!!」

レアモンはそう言うと粉塵が晴れたと同時にエクスブイモンに自分の必殺技であるヘドロを放った。

当然それをエクスブイモンは避けると再びレアモンに必殺技を放った。

「……………どういっつもりだ？」

本当にあいつ一体でレアモンを倒せるかとも思っているのか？」

「さあそれはどうかな？」

シルフィーモンはそういうと手の甲をサイクロモンに向けた。

『トップガン！！！』

「無駄だ！！！『ハイパーヒート！！！』」

シルフィーモンが放ったエネルギー弾をサイクロモンのハイパーヒートがぶつかりあった。

しかしパワーはサイクロモンの方が上のように、シルフィーモンのトップガンと

ぶつかると同時にトップガンを消し去り、

サイクロモンの攻撃はシルフィーモンに向かった。

「くっ！！！」

それをシルフィーモンは横にジャンプすることで避けた。

「クッククク！！！ どうやら思った通り、パワーも俺の方が上のようにだな？ 完全体！！！」

「……」

「おいおい……今度は無視か？」

「まだまだ!!! 『アラミタマ!!!』」

「フン! 『ハイパーヒート!!!』」

今度はシャッコウモンが必殺技を放つがそれをサイクロモンは自分の必殺技で打ち消した。

「クツツ!!!」

先程のようにサイクロモンの必殺技はこちらが放った攻撃を突き破り、シャッコウモンに向かってきた。

それをシャッコウモンは避けようとするが、体が重いためその攻撃を避けることが出来ずに直撃した。

「全く拍子抜けだな………全くこの程度とはな……聞いた以下の存在だな」

サイクロモンはそうシルフィーモンに言うと、

口を大きく開け、シルフィーモンに向かって必殺技を放とうとした。しかし、先ほど自分が攻撃した地面の砂が粉塵のように巻き上がっている。場所に黒い影があるのに気付き、イラついた声でいった。

「ちい！ まだ生きていたのかよ……しづとい奴だ。

その分厚い体のおかげか？ まあどちらにせよこれで止めだ！  
死ね！！」

サイクロモンはそう言ってシャッコウモンに自分で撃てる最高のエネルギー体を飛ばした。

——これで決まる

サイクロモンはそれを全く疑っていなかった。

先程の戦闘で、シャッコウモンたちは完全に自分以下だと思っているのだ。

つまり、勝利を確信している。

自分の最高の攻撃が防がれるわけがない・・・耐えられるはずがない・・・

サイクロモンはこの時シャッコウモンたちの戦闘で初めて気を抜いた。

……そしてサイクロモンの必殺技がシャッコウモンにあと数秒であるという瞬間、

シャッコウモンは行動にでた。



サイクロモンの必殺技を腹部にある穴のような場所に吸い込んだ。

「!!!! なあ!?!」

サイクロモンが驚きの声を上げるが  
シャッコウモンはそれを気にせず  
頭部についている煙突のような場所から煙を噴き上げた。

「今だ!!!!」

シルフィーモンがそう叫ぶと、  
シャッコウモンとエクスブイモンとグレイモンを除く選ばれし子供  
のデジモンたちが  
一斉にサイクロモンに各自の必殺技を放った。

「ぐあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

サイクロモンはその攻撃を避けることが出来ず、直撃した。

そして地面に倒れこみそうになるが、足に力を込めそれを防いだ。

シルフィーモンたちはこれを逃せばチャンスはないと思い、  
それぞれの必殺技を放ち続けた。

「ちっ！」

タスクモンは舌打ちをしてサイクロモンの方を見たが、助けようとはせず、

サイクロモンに攻撃しているせいで動けないシルフィーモンたちに必殺技を放とうとした。

しかし攻撃は行われなかった。

なぜならシルフィーモンたちに攻撃を行おうとしたタスクモンをグレイモンが止めたからである。

「くっ！！ お前は俺との力の差が分かっていないのか！？」

さっき俺に吹き飛ばされたばかりだろうが？」

「さっきのは突進の助走があったから吹き飛ばされたんだ！

助走を行っていない今のお前の突進なら俺にも止めることぐらいできる！」

グレイモンはタスクモンの角を持ち、タスクモンの突進を防いでいた。

そしてサイクロモンはやがてシルフィーモンたちの攻撃に力尽き、

倒れた。

そして体から0と1の配列のデータが体から出現し、それがひとつにまとまってデジタマとなる……と思われるていた。

しかし実際はデジタマは出現せず、

0と1の配列のデータは黒いゲートに吸い込まれていった。

そのことにシルフィーモンたちは疑問を感じたが、

今はタスクモンたちを倒すのが先決だと思ってその考えを打ち消した。

サイクロモンがやられた事で一気に形成が悪くなったタスクモンは自暴自棄になり、

光子郎たち選ばれし子供がいる場所に突進していったが、

その後ろ姿をシルフィーモンたちに攻撃され、

サイクロモンと同じように0と1のデータを体から出し、そしてそれは

ゲートに吸い込まれていった。

第二十八話 反撃開始！（後書き）

選ばれし子供たちの戦闘かきにくい・・・

書く気がでない・・・

でも頑張らないと・・・

## 第二十九話 驚愕（前書き）

更新できなくてすみません!!!

最近テストが近づいてきたことと、  
悪魔のゲームのせいになかなか更新できませんでした。

全くナ コめ!!!

.....言い訳しません.....

更新はテストが終わってからにしようかな〜と思っていたんですが、  
評価を見てその考えは吹き飛びました。

80点だと.....!?

少し見ないうちに評価が激増していてとても嬉しかったです!!!  
なので、更新頻度は減りますが、  
テスト期間中にもできるだけ更新できるように頑張ります!

## 第二十九話 驚愕

「ひ、ひいいい!!!」

仲間のタスクモンとサイクロモンを失ったレアモンは悲鳴のような声を上げた。

そしてシルフィーモンたちに背を向けて、ゲートの方に逃げた。

「……」

だがそれを読んだのか、レアモンの前にエクスブイモンとグレイモンが現れ、

レアモンのゆく手を遮った。

レアモンは何かしようとししばらく周りを見渡して何かないかと探した。

しかし、すぐにシルフィーモンとシャッコウモンとカプテリモンが追いついてきた。

「……お、オラはただ間違えてゲートをくぐっただけなんだな！」

「……お前は確か選ばれし子供たちを殺すとか言ってたか？」

「あれはあいつらが勝手にそう言ってただけなんだな!!!  
オラは関係ない!!!」

レアモンは腕を使いながら必死にそう言った。

その姿があまりにも必死だったので、エクスブイモンたちはどうするか迷ったが、

そこに後ろの方にいる子供たちのうちの一人の声が聞こえてきた。

「お〜い!!! レアモンは見逃していいぞ〜!!!」

遠くの方で大輔がそう言ってるのが聞こえてきた。

そしてその後ろには光子郎が少し微笑んだ顔でこっちを見ていた。どうやら見逃すのは全員が納得してるようだ。シルフィーモンたちは理解した。

そしていまだに必死に言い訳をするレアモンの姿を見て、シルフィーモンはため息をつきながら言った。

「…………どうやら選ばれし子供たちは君のことを見逃して構わないと言っているぞ」

「……!! 本当なんだな!?!」

シルフィーモンの言葉を聞いてレアモンは頭を上げてうれしそうに顔をそう言った。

「私たちもそれについては納得している。……だがその代り……」

「分かったんだな!!!」

もう選ばれし子供たちの前には二度と会わないと約束するんだな  
! ! ! ! !」

シルフィーモンの言葉を遮るようにレアモンはそう言って頭を下げた。

シルフィーモンたちは別に二度と会わなくていいんだが、と思いな  
がらも、  
レアモンにもう危険がないと思い、レアモンにゲートに向かうよう  
に言った。

その言葉にレアモンは逃げるようにゲートの前に走っていき、そし  
てゲートの前で  
立ち止まった。

シルフィーモンたちはその動作に疑問を感じて質問しようとしたが、  
その前にレアモンが背を向けたまま言ってきた。

「……もう、オラと選ばれし子供は二度と会わないんだな……」

レアモンは小さな声でそう言った。





「グププププ!!! 今更行っても間に合わないんだな!!!」

レアモンはエクスブイモンたちの行動を嘲笑いながらゲートの中へと消えていった。

「!!!! 皆さん!!! 攻撃が来ます!!! 今すぐ逃げてください!!!!」

遠くからではレアモンの攻撃は見えにくかったが、レアモンのこっちに向けての攻撃動作とデジモンたちの必死の声でこっちに攻撃が来ていると瞬時に判断した光子郎は大輔たちに大声でそう言った。

その声に大輔たちは表情を変えながらも、必死にレアモンの技の効果範囲から逃げようと走った。

しかし、ここは山だ。足場は通常の地面と比べて圧倒的に悪い。そこに突然死が迫たのだ。何時ものように動けるはずがなかった。

「きゃあ!!!!!!」

大輔の後ろの方から声が聞こえてきた。後ろを振り返ってみるとそこには地面と平行になっているヒカリの姿があった。

「!!!!!! ヒカリちゃん!!!!!!」

大輔はすぐにヒカリの元へと駆け寄った。

そしてヒカ리를立たせてそこを去ろうとしたが既にレアモンの攻撃は大輔たちのすぐそこにまで迫っていた。

「くっ!!!!!!」

大輔は今から逃げても間に合わないと悟り、ヒカ리를覆うように抱きしめ、レアモンの攻撃が直接当たらないようにした。

「!!!!!! ダイスケええええええええええ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

後ろの方と前の方からそれぞれ大輔を呼ぶ声があったが大輔はそれに答えず、目を思いつきりつぶった。

誰もが大輔とヒカリの死を想像した。

大輔自身もそれを想像した。

ここから行ってもエクスブイモンたちは間に合わない。もちろん太一たちもだ。

攻撃が風を切る音を感じながら大輔は時期にくる痛みを覚悟した。

『しゅごほうじん守護方陣！！！』

しかし、空の方から何かか叫ぶ声が聞こえてきた。

そしてすぐに何かと何かかぶつかるとなる様な音が響きわたった。

やがて音が止むと、大輔は眼を開け、ゆっくりと後ろを振り向いた。

「！！！！ お前は！？」

そこにいたのは黒いコートをまとった者だった。

何時ものように深くフードを被っているせいで全くみえない顔。

全身が真っ黒でまるで闇を連想させるような姿をした者。

そして何時ものように右手に握られた漆黒の……？

そこで大輔は疑問を感じた。

男の手には何時ものような漆黒の鍵の剣が握られておらず、代わりに持つところ以外が真っ白な鍵の剣が握られ、地面に突き刺さっていた。

そして黒コートの者の足元は魔方陣のようなものが展開されていた。

大輔は改めて周りを見回した。  
そしてあることに気が付いた。

「結界・・・？」

黒コートの者を中心に大輔とヒカ리를包むように光の結界が展開されていた。

「綺麗……」

いつの間にか大輔の腕から離れていたヒカリが結界を見てそう言った。

「……」

黒コートの者が地面からキープレードを引き抜くと結界は消えた。

「…………お前は…………」

「「「大輔！！！！」」」 「「「ヒカリちゃん！！！！」」」

大輔が黒コートの者に何かを言おうとすると、  
後ろの方と前の方からそんな声が聞こえてきた。

大輔とヒカりは自分たちを集まってきた仲間たちに心配をかけさせたなどと怒られた。

そしてしばらくすると光子郎が黒コートの者に質問してきた。

「…………どうしてあなたは大輔君たちを助けてくれたんですか？  
それにその手に握られているのは…………」

光子郎がそういつと大輔とヒカリを除く子供たちが驚愕の声を上げた。

「それはキープレード！？  
でもいつもみたいに黒くない…………ってことは光のキープレード！  
？」

京がそう言つと、今度は太一が言ってきた。

「……………どういう事だ？ お前が持っているのは闇のキープレードの  
はずだ！」

それなのにそれはなんだ!？」

太一が黒コートの方に向かつてそう言つと、  
黒コートの者は大輔たちの方に体を向けて言った。

「……………どういう事つて、どういう事ですか？」

太一たちはそれを聞いて驚きの声を上げた。  
正確にはその言葉では無い。

黒コートの者の声は何時もの奴と全く違う声だった。  
その声は何時ものように何か悪意のこもった声ではなく、  
人間でいう、小学5年生くらいの声変りをしていない男の声に近か  
った。

「……………お前、何時もの奴とは違うのか？」

「……………何時もの奴とは？」

男は少し首を傾げながら太一の質問にそう返した。

「……どうやらあなたは奴とは別人のようですね……」

太一が返答に困っていると後ろから光子郎がそう言いながらこっちに向かって歩いてきた。

そして太一の横で止まると男に向かって言った。

「……今回は大輔君たちを助けてくれてありがとうございます」

光子郎が頭を下げてそう言うと男が言った。

「……別にお礼を言う必要はありません。」

僕が助けたかったから助けただけなので……」

男がそう言うと光子郎は頭を上げた。

そして先程から話しかけようとしていたヒカリに男は気が付き、ヒカリに向かって言った。



「……どうしたんですか？ 僕に何か言いたそうな顔をしています  
が……」

男の言葉にヒカリは一瞬ためらったが、すぐに言ってきた。

「……助けられてありがとう……あなたが助けられなかったら  
私たち……」

ヒカリはそこまで言うと急に俯いた。

先程まで死が目の前まで接近していたのだから無理もないだろう。

男はため息をつくときかりに向かって言った。

「……僕に感謝するのはもういいんです。  
……でも僕より先に感謝する相手がいるんじゃないんですか？」

男がそう言うとヒカリはハッとなった。  
自分を初めに助けってくれた大輔のことを思い出したのだ。  
自分がこけた所に走って来てくれて、そして庇おうとしてくれた存  
在を……

「大輔君……助けられてありがとう！」

ヒカリは心から笑顔でそう言った。  
その表情を直接向けられて大輔は顔が真っ赤になっていた。

### 第三十話 黒コート（前書き）

最近投稿できなくてすみません……

時間がないのもありますが、

一番の理由は思ったように小説が書けないことです。

なので次からは一人称？ をメインに書いていきたいと思えます！

## 第三十話 黒コート

「……では僕はこれで……」

男はそう言つと大輔たちに背を向けた。

その先を見据えているのは先ほどレアモンが入っていったゲートだった。

「待ってください!!!」

光子郎は男が去るのを止めた。

男は体を前に向けたまま、フードで隠れた顔をこちらに向けて言った。

「……まだ僕に用があるんですか？」

出来れば手短にお願ひしますよ……」

「すみません……まだ貴方には聞きたいことが幾つかあるんです……」

……」

光子郎はそう言つと一端一息おき、

そして何かを見さざめるような目で男に言った。

「……貴方はどうしてその闇のコートを着ているんですか？  
それは闇の存在が好んで着るものはずです。  
……それに貴方は別に悪いことをしている訳でも無さそうです…  
…それなのに  
どうして顔を隠しているんですか？」

光子郎の言葉に子供たちとデジモンは頷いた。  
光子郎の言う通り、男が黒いコートを着て、顔を隠す必要性が分からないのだ。

男はその質問に少しだけ黙ると、話し出した。

「……このコートは闇に飲まれるのを防ぐために着ています」

「」「闇に飲まれない為！？」」「」

「……はい……。僕は分け合って闇が強力な場所によく行くんです。  
その時にこのコートが無いと数回ならまだしも、  
何度も通る場合は危険なんですよ」

「……闇の世界……」

「……その通りです……。  
闇の世界は危険な場所が多い……なので少しでも危険を減らすため  
このコートを着ているんです。  
……僕以外にもこのコートを着ている者は沢山いますよ？」

男はタケルの呟いた言葉にそう説明するした。

そして光子郎はというと、まだ納得していないらしく腕を組んで何かを考えていた。

「……ならあなたと同じ黒いコートを着ていて、闇のキープレードを持っているデジモンを知っていますか？」

「……闇のキープレードを持った、デジモン？  
……知らないですね……」

「そうですか……」

光子郎は男の言葉に落ち込む様子もなく答えた。

「……そろそろ行きますよ。これ以上はアイツを逃がしてしまいたいので……」

男はそう言うと再び戦法を向き、光子郎たちに背を向けた。

「待つてー！ー！ー！」

ヒカリがそう言って男を呼ぶと、男は振り向かずに出てきた。

「……貴方たちはこの異変にかかわらない方がいいです。

解決するまでデジタルワールドには来ないことをお勧めします…

…」

男はそう言い残すと、ゴツゴツした足場の地面を大きく踏み込んだ。

足場が悪いはずの道を男は止まることなく走っていた。

そしてゲートの前まで行くと、男はそのまま入っていった。

その様子を子供たちとデジモンはただジッと見ていた。

「……光のキーブレードを持つものか……」

子供たちはあれからゲートの前まで行き、中に入ろうとしたが見えない壁のようなものにゆく手を遮られ、結局中に入るのを諦めた。

その後これからどうするかという話になり、光子郎がゲンナイさんに会えば何かわかるかも知れない、という事を言い、その意見に光子郎以外も納得したため子供たちゲンナイさんの家に向かった。

「……何か心当たりはありませんか？」

顎に手を付けて考え込んでいるゲンナイに光子郎はそう尋ねた。

ちなみに光子郎たちとデジモンはいくつもの大きなソファアに腰を掛け、

そのソファアに取り囲まれているかのような場所にゲンナイは立っていた。



「……すまないが私はキーブレードに関することは伝説くらいしか知らないんだ。」

「私自身もキーブレード使いなど見たこともない……」

「そうですねか……」

子供たちの中の誰かがそう返すと子供たちとデジモンは大きなため息をついた。

ゲンナイさんなら、と思ってここに来たのだから落ち込むのも無理はない。

ゲンナイはだが、と話を続けてきた。

「……恐らくそのデジモンはこの世界……いや、少なくともこのエリアのデジモンではない」

「……どういう事ですか？」

「……あのゲートを調べて分かったことがある。  
まず一つは、あのゲートは別のデジタルワールドにつながっているという事だ」

「「「別のデジタルワールド？」」」

「ああ。だから私たちには通ることが出来ないのだろう……」

「なら、闇のキーブレードの男も別の世界のデジモンってこと？」

「おそろくは」

京の質問にゲンナイはそう答えると先程よりも力のこもった表情で言った。

「……そしてもう一つ分かった事だが、

もしかしたら君たち選ばれし子供たちもそのゲートを通ることができる

方法が分かったという事だ……」

ゲンナイの言葉に子供たちは歓喜の表情を表に出した。

「それは本当ですか！？ ゲンナイさん！？」

大輔が歓喜の表情でそう尋ねるとゲンナイは強張った表情でああ、と答えた。

その態度に光子郎は何かを感じ取ったのか、ゲンナイにこう尋ねた。

「……何か問題でもあるんですか？」

光子郎の質問にゲンナイは少し暗い表情で話し出した。

「……その方法には協力者が必要なんだ。……キープレードを持つ  
た者のな……」

### 第三十一話 動き始める状況（前書き）

題名が思いつかなくなってきました……

ネタバレにならないように、できるだけ本編に關係する題名を考えるのは

そろそろ限界かもしれません……

それと一人称？はとも書きやすいですね！

選ばれし子供たちしか出ない話でも書きやすいです！

### 第三十一話 動き始める状況

side 光子郎

あれから僕たちは少しゲンナイさんと話した後、リアルワールドに戻った。

「はぁ・・・せつかくゲートを使って敵の本拠地を直接叩けると思ったのにな……」

大輔君は一人そうため息を付いていた。

僕もゲートを通るにはキーブレードが必要と知った時には正直ガツカリしました。

今、確認できているキーブレード使いは2体だけです。

そしてゲンナイさんの話とキーブレードの入手条件から考えて、他にキーブレード使いがいないでしょう……

仮に居たとしても、恐らくその方と僕たちは会うことはないでしょう……

なら必然的にキーブレード使いは二体になります。

しかし、ここに問題はあります。

まず闇のキーブレードを持つデジモン……奴は平気で他のデジモンを殺す、

外道です。そして頭がとてもない……

自分から危険な事に関わらないでしょう……

それに奴の性格から考えてただで僕たちに手を貸してくれないでし

よう。

……僕たちにはそんな対価を払えるものはありません……

そしてもう一体のキープレード使い……光のキープレードを持つデジモン……

彼は恐らく光のデジモンでしょう……

それは彼のキープレードが証明してくれます。

彼にゲートのことを話せば手を貸してくれるかも知れません。

しかし、彼は僕たちにもうデジタルワールドにこない方がいいと言っていました。

恐らく僕たちを巻き込んで敵の本拠地に行こうとしないでしょう……何より彼と連絡を取ることは出来ません……

……まさに八方ふさがりですね……ハア……

「どうしたんだ光子郎？　ため息なんかついて」

僕が顔を上げると太一さんが僕を見下ろすような体制で僕を見ていた。

どうやら僕は思考の世界に入っていたようだ……

窓から見える風景が先程見た時よりも赤く染まっているのがよくわかる。

「すみません太一さん。少し考え事をしていました……」

僕はそう言いながら足に力を込めて立ち上がった。

「お前が考えていたことはゲートの事だろ？  
……俺たちだけじゃゲートを通れないなら  
キーブレード使いの力が必要だがそれは……」

「……ほぼ不可能ですね……」

僕は太一さんの言葉を遮るようにそう言うと僕と太一さんは小さくため息を付いた。

「……とりあえず今俺たちに出来ることは  
デジタルワールドの調査と警備、くらいだな……」

「……はい。それ以外は少なくとも今は思いつきません……」

僕と太一さんは今できることを確認したが、  
今まで道理のことしか出来ないと分かってしまい、再びため息を付いた。

「光子郎さん！ 太一先輩！

そんなため息ばかり付いてたら幸せが逃げちゃいますよ？」

「京さんの言う通りです！ 物事はポジティブに考えましょう！」

京さんとホークモン……ポロモンがそう言ってきた。

「……そうですね。」

ため息ばかり付いてもないも変わりませんね」

僕はそう言って京さんに笑顔を向けた。

……とりあえず今は僕たちに来ることをやりましょう

side out



s i d e 大輔

あの戦いから一日たった次の日、  
俺は学校の教室の中にいた。

「今日からはデジタルワールドの調査と警備をしないとね」

「……それは前からやってたたる？」

タケルがそう張り切っているが俺は自分の机にぐったりと倒れこんでいた。

「それはそうだけど、今は私たちにはそれぐらいしか出来ないの……」

ヒカリちゃんが俺の机の横に来てそう言ってきた。

「それはそうだけど俺はさ、」

何かドンと一発で解決できるような事をしたんだよな。」

「はいはい。そんな方法あったらいいね」

「ふふふ！ そうね」

俺の言った言葉をタケルとヒカリちゃんが呆れるように言ってきた。

分かってるんだよ。俺にもそんな方法はないってことは……でも今のままじゃ何も解決なんてしないんだ！

……何かいい案ないかな……

「そう言えば秋山くん、ここ最近学校を休んでるね……何かあったのかな？」

タケルがそう言って急に話題を変えてきた。

……確かにここ最近秋山は学校に来てないな。

多分2、3日は来てないな。

何かあったのかな……

俺達が秋山について考えていると学校のチャイムが鳴った。

席に座っていないタケルとヒカリちゃんは急いで席に戻っていった。

「起立……！」  
「礼……！」

「「「おはようございます……」」」



「いるなら最初から返事をしろ！」

はぐいと俺は返事をする。先生はブツブツ言いながら教卓へ戻っていった。

そして俺のせいで止まっていた出席確認の続きを始めた。

「……よし。今からホームルームを始める！」

……だがその前に一つ言っておかないといけないことがある。

秋山は家庭の事情で転校した。

突然だが家庭の事情じゃ仕方がない。

本人も別れの挨拶が出来なくて残念がっていた」

秋山が転校だつて!?

……それは本当に家の事情なのか？

とりあえず後で光子郎さんに報告しないと……

side out

s i d e 光子郎

「秋山君が転校ですか？」

僕がパソコンルームに入るとそこには  
何か慌てている様子の大輔君がいた。

大輔くんは僕が来たことに気づくと同時にその事を言ってきた。

「家庭の事情って言ってたけど絶対に違いますよね!？」

「……大輔君の言う通り、十中八区違うでしょう」

普通転校するには幾つかの手続きが必要なはずだ。それなのに来て数日で転校なんておかし過ぎる……恐らくデジタルワールドの異変と関係しているでしょう……

「……それで秋山君が何処に転校したか知ってますか？」

「……先生に聞いたんですが知らないらしいです」

僕の質問に大輔くんではなく、タケルくんが答えてくれた。

……やはり怪しいですね。担任の先生にすら転校先が知らされていないなんて……

「……賢なら何か知ってるんじゃないか？」

僕と一緒に教室に入ってきた太一さんが言ってきた。

確かに秋山君と一乗寺君は昔からの友達のはずですから何か聞かされていてもおかしくありません。

「今日はデジタルワールドには行かず、一乗寺君の家に向かいましょー」

僕の言葉に皆さんは賛成してくれた。

……連絡を取ればいいという意見も出たが、最近の一乗寺君のデジタルワールドの出席率から考えて、恐らく彼は暗黒の種子の影響を受けている可能性が高いので、様子を見る必要もあったので直接あった方がいいと言つと、納得してくれた。



### 第三十二話 一乗寺賢の判断（前書き）

こちらの小説がまだ終わっていないのに  
次の小説を投稿してしまいました……

一様向こうはこっちが行き詰まったときに書くつもりです……

……  
予定では向こうは30話から50話ぐらいまでで終わると思います……

## 第三十二話 一乗寺賢の判断

side大輔

俺たち、タケル、ヒカリちゃん、伊織、京、太一さん、光子郎さんとそのパートナーデジモンは賢の家に向かって歩いていった。

空の風景はまだ学校が終わったばかりなので青く、心地い風と日差しが

俺たちを差していた。

「……賢、大丈夫かな……」

俺は心配になって小さくそう呟いた。

賢の暗黒の種子の力はどんどんあがってる……

もしかしたら賢はまたカイザーに……！

いや、それはない！！

賢はもうカイザーにはならない！！！！ 俺はそう信じてる！

俺はそう一人で小さくよし、と呟くと、

全速力で走って、目の前に見えてきた賢のマンションの入り口まで走った。

「俺が一番乗りだ！！！！」

「あ！ 待つてよ。ダイスケ〜！！」

俺が叫んで走ると、後ろから必死にチコモンが俺を追いかけてきた。

その様子に太一さんたちは呆れていたけど、俺は気にせずそのまま走って行った。

ピンポーン！

俺は賢の家のインターホンを押した。  
しばらくするとはーいと、賢のお母さんの声が聞こえてきた。  
そして賢の家の扉が勢いよく開いた。

「あら、貴方たちは賢ちゃんの友達の……」

「本宮大輔です。あの〜賢は居ますか？」

俺はがそう言つと賢のお母さんは少しだけ暗い顔をした。

「……賢ちゃんには家にはいないわ……」

「そうですか……なら何時ぐらいに帰ってくるか分かりますか？」

俺の言葉に賢のお母さんは黙り込んだ。  
あれ？ 俺何かいけないことでも聞いたのかな……？

「……賢ちゃんは当然帰ってこないわ……」

「……どういう事ですか？」

賢の母さんの言葉に光子郎さんが質問した。  
賢が当然帰って来ないってどういう事なんだ！？

「……賢ちゃんはデジタルワールドを平和にするため、  
リョウ君と一緒に旅に行ってたわ……」

「秋山と旅にだって！？」

俺は余りの衝撃にかなりの声を出してしまった。  
太一さんたちも声は出さなかったけど、  
俺と一緒にかなり驚いた表情をしていた。

「……かえって来るのは早くても夏休み中ってリョウ君が言った  
わ……」

「……止めなかったんですか？」

「もちろん初めは止めたわ。」

……でも賢君の真剣な目を見たら止めても無駄だと分かったの……  
それに今回はちゃんと私とお父さんにちゃんと許可を取ろうとしてくれたの……

……私たちにちゃんと相談してくれたんだから、親としては  
背中を押して上げるのが優しさだと思っただの……」

ヒカリちゃんの質問に賢の母さんはそう答えた。

俺たちはその話をただ黙って聞いていた……

賢の奴……俺たちに何の相談もなくそんな大事なことを決めるなんて……

「……分かりました……じゃあもし帰ってきたら  
この電話番号に電話していただけませんか？」

「分かったわ……」

光子郎さんはそう言って自分の電話番号を書いた紙を賢の母さんに渡した。

「……では僕たちはこれで失礼します……」

そう言つて光子郎さんが賢の母さんに頭を下げて、エレベーターの方へ歩いて行つた。

俺たちもまだ他に聞きたいことがあつたが、光子郎さんの後を追いかけた。

「光子郎さん！ 賢のことを聞かなくていいんですか!？」

賢のマンションの下で俺は光子郎さんに質問をした。

「他にも何か賢から聞いていたかもしれないじゃないですか!？」

「多分それはありません……」

俺の疑問に光子郎さんは答えた。

「……一乗寺君のお母さんの話からおそらく、

一乗寺君が旅のことを両親に打ち明けた時、

秋山君は一緒に居たはず……

そして秋山君は僕たちを旅に誘わなかつた……そしてその旅は最低でも

夏休み中……つまり最低でも後、一週間は帰って来ないという事

になります……

それは恐らく、危険な場所に向かうということなんでしょう……」

「なら、どうして賢だけ誘ったんだぎゃ〜？」

「恐らく何か理由があったんでしょう……」

その理由までは分かりませんが……」

光子郎さんの言葉に俺たちはその理由を考えたが全く想像もつかなかった。

「……推測でいいなら一つだけ理由が分かります……」

「それはホンマですか？ コウシロウハン！？」

テントモンの言葉に光子郎さんは小さく頷いた。

「……恐らく暗黒の種子が関係あるのではないかと僕は思います……」

「……」

「」「暗黒の種子！？」」「」

「どっしてそう思うんですか？」

「……すみません……ただの勘です……」

京の言葉に光子郎さんは気まずそうに頭を下げてしまった。

「ま、とりあえず今からデジタルワールドで情報収集だな！  
もしかしたら賢たちを見たデジモンがいるかもしれないし」

太一さんがそう言っていると俺たちははい！と返事を返した。



### 第三十三話 消えた一乗寺賢（前書き）

最近評価が上がらなくなってしまいました……

多分更新できなかったからでしょうね……

と、そんなことは置いておいて、  
やっとここまで書けました!!!

もうすぐ、新章突入です!!!

そこまで頑張つて書いていきたいと思えます!!!

……それと出来れば書き方のアドバイスを頂けると嬉しい  
です……

### 第三十三話 消えた一乗寺賢

side太一

あれから俺たちはデジタルワールドで賢たちを見たデジモンはいないかと探しまわった。

メンバーはさつき居たメンバーと、ソラ、ピヨモンが新しく加わっていた。

どうやら賢のことをメールで話したら、空から探せるデジモンがいた方がいいでしょ？

と、部活のテニスをさぼって手伝いに来てくれた。

……今年最後の大会なのに……

「太一!!」

俺は呼ばれた方を向くと、そこには少しだけ怒った顔をしたソラが居た。

今俺、ソラ、アグモンはバードラモンの背中の上に乗って、空中から賢たちと、

賢たちを目撃したデジモンを探している。

アグモンは進化しても空を飛べない為、

空を飛べるバードラモンと組んで賢を探していた。

「……今私には最後の大会があるのに……ってこと考えていたでし

よ？

うっ、どうやら俺の考えていることがバレている様だ……

「……だってそうだろ？ 中学三年の大会は夏で最後なんだ。それなのに……」

「……私は仲間が居なくなったのを無視してまでテニスはやりたくないわ。」

太一だって最後の大会があるのにデジタルワールドを無視できないから

部活をさぼってデジタルワールドを飛び回ってるんでしょ？」

……なんにも言い返せないな……

「私もそうしたかったけど、私は教育係的なポジションも担当してるから、

すぐには辞めれなかったの……

でも、それももうすぐ終わり！

私の役目を受けづいてくれる二年生の後輩が出来たの！

……だから今度からデジタルワールドに行くときは誘ってね？」

「……おう」

ソラが俺に向けた笑顔がかわいくて、俺は眼をそらして前を向いた。

s  
i  
d  
e  
光子郎

s  
i  
d  
e  
o  
u  
t

「人間の子供を乗せた、スティングモンらしきデジモンを見た  
デジモンが居たって本当ですか!？」

僕はパソコンルームのパソコン前で少しだけ大きな声で  
伊織君にそう尋ねてしまった。

【はい。……どうやらそのデジモンと、  
もう一体のデジモンはあのゲートの中に消えていったそうです…  
…】

ゲートにだって!？ あのゲートはキープレードの力が無いと開か  
ないはず……  
!？ まさかりョウ君のデジヴァイスにはそれを開ける機能があっ  
たのか!？……

「……すいませんがそのゲートの場所を教えてくださいませんか？  
今から全員を集めてそちらに向かいたいで……」

【あ、はい！ 分かりました!!!】

……うかつでした……リョウ君のデジヴァイスが僕たちのと違うこ  
とを  
すっかり忘れていました……

……とりあえず送らててきたデータを全員に送信しないと……

僕は伊織君の通信を切って、太一さんたちにその場所のデータと、  
一乗寺君がどうなったかを簡単に説明したメールを送った。

s i d e o u t

「賢たちはこのゲートの向こうに行っただけのことですか？」

「……そう言うことになりますね……」

俺は光子郎さんから送られてきたメールを見て、  
急いでその場所にイクスブイモンで向かった。

そこにはすでにみんなが居て、全員が暗い顔をしてゲートの方を向  
いていた。

そして俺は光子郎さんに賢がそのゲートに入っていったかを確認す  
ると、

光子郎さんは肯定の言葉を返してきた。

「……恐らくリョウ君のデジヴァイスでこのゲートを開けたと考え  
られます。」

目撃したデジモンもキープレードらしき鍵の剣は  
持ってなかったと言っていたようです……」

……クソ……！！

秋山が俺たちと違うデジヴァイスを持っていたのは分かってたじゃ  
ねえーか……！！

秋山が違うデジヴァイスを持っていたのを初めに知ったのも俺だ……

……！……！

……どうしてそのことに気が付かなかつたんだ……

「とりあえず僕はゲンナイさんの所に向かいます。

……皆さんはどうしますか？」

「……ゲンナイさんになんかようなんだ？」

エキスブイモンが光子郎さんにそう尋ねた。

エキスブイモンの言う通り今、ゲンナイさんの家に向かうのは何か理由が

あるはずだ。みんなもエキスブイモンと同じようにそれが気になつていたようだ……

351

「……ゲンナイさんはキーブレードを使わずに

このゲートを超える方法を知っているかもしれませぬ……」

「「「えっ！？」「」」

「……この前のゲンナイさんの様子から、

ゲンナイさんは何か僕たちに隠している様子でした……

多分それがゲートを超える理由なのでしょう」

「でもそれならどうしてこの前その事を教えてくれなかつたん



ですか？」

「本当の理由は分かりません……  
でもそれは多分危険な方法だからなんでしょう……」

「「「危険な方法???」「」」

京の疑問に光子郎さんはそう返した。

……危険な方法ってどういう事なんだ……？

「……詳しいことはゲンナイさんの家に向かえばわかると思います

……

それで皆さんは……聞くまでもなかったみたいですね……」

光子郎さんは俺たちの顔を見るとそう言った。  
そしてカブテリモンの背中に乗って言った。

「……行きましょう！」

俺たちはその言葉に頷き、それぞれここに向かった時に乗っていた  
デジモンの背中に乗り、空からゲンナイさんの家に向かった。

第三十三話 消えた一乗寺賢（後書き）

空とソラがややししい……………

## 第三十四話 残された方法（前書き）

皆さんにお伝えしなければならぬことがあります……

テストの期間が一週間を切るため、

更新頻度が激減するかもです……

さて、物語ももうすぐ中盤？になります。

ここから先は一人称？ではなく、

3人称？（神からの目線？）で書いていくことが増えると思います。

なので、こうしたらいいという感想をいただけると助かります！

## 第三十四話 残された方法

side 光子郎

僕たちはゲンナイさんの家の前まで着くと、  
デジモンの進化を解除してゲンナイさんの家に入っていった。  
家の中にはいくつものモニターを見上げてみているゲンナイさんの  
姿があった。

ゲンナイさんは僕たちが後ろにいるのに気付いたのか、  
ゆっくりと振り返って言った。

「……よく来たな。選ばれし子供たちとそのパートナーよ……」

「……ゲンナイさん。今日は用があつてここに来ました……」

「……ゲートの先に行く方法か？」

ゲンナイさんは突然確信を付くようなことを言ってきた。  
僕はそれに少しだけ驚いたが、  
すぐに冷静になって言った。

「……やっぱりあるんですね。ゲートを超える方法が……」

「……ああ」

僕の質問にゲンナイさんは小さく答えた。

「ならどうして前来た時に教えてくれなかったの？」

アグモンの問いにゲンナイさんは黙り込んだ。

「……危険……だからですか？」

「……」

僕の問いにもゲンナイさんはすぐには答えなかった。

……しばらく沈黙が続いた後、ゲンナイさんはゆっくりと口を開いた。

「……光子郎君の言う通り、この方法は危険なんだ……、いや、危険すぎる……！」

「……そんなに危険なんですか？」

ゲンナイさんの力のかもり過ぎた声を聴いて、ヒカリさんはゲンナイさんにそう尋ねた。

「……この方法は確かに成功すればゲートの向こうの世界に行くことが出来る……」

だが！、この方法を使つて、ゲートを抜けようとするればほぼ確実に誰かを失うことになるだろう……」

「誰かを失うつて！ そんな……」

「……残念ながら事実だ。」

今の我々の戦力じゃ、それぐらいやらないと成功しない」

ゲンナイさんの余りの言葉に僕を含めた全員が固まってしまった。

……まさかそれほど危険な方法だなんて！……

「……その方法ってどんなことをするんですか？」

その中で、ゲンナイさんに質問する声があった。

……大輔くんだ！

「……この作戦を実行するつもりなのか？」

「……それは分かりません……だって、俺はまだその作戦を知らない！

それなのに聞く前から諦めるなんて、俺はしたくない！！！」

……大輔君の言うとおりだ。

僕たちは何をしているんだ！

まだその方法も聞いていないのに、ただ成功率を聞いて、勝手に絶望していた！

……そんなのは僕たち……いや、選ばれし子供たちらしくない！

僕たちは今までの冒険で、確立なんて気にしていなかった。

ただ、前に進んでいたただけだった！

……本当に僕たちは聞く前からに絶望しているんだろう……

「……それでゲンナイさん。その方法とはどんな方法なんだ？」

太一さんがゲンナイさんにそう尋ねた。

……どうやら皆さんも僕と同じ考えのようだ。

「……聞いたら後悔するだけかもしれないぞ？」

なんせ、この作戦はやるうと思えばいつでも出来ることなんだから……」

「……出来る出来ないはとりあえず話を聞いてから決めることにします」

僕はゲンナイさんを真っ直ぐな瞳で見つめた。

ゲンナイさんは僕の目を数秒見つめ、そして辺りを見回した。

僕もゲンナイさんと同じように辺りを見回すと、

そこには僕と同じように真っ直ぐな目でゲンナイさんを見つめる、

太一さんたちが居た。

ゲンナイさんはそれを見ると小さくため息を付いた。  
そして真剣なまなざしをして言った。

「……………あのゲートは別の世界を繋ぐものだ。

あの先には別の世界が存在する……………ここまでは分かるな？」

僕たちは勿論と頷いた。

……………大輔君も大丈夫のようだ……………

「……………なら単純な話、

あのゲートを使わなくても別の世界にいければあのゲートを通る  
必要はない……………」

ゲンナイさんはそこまで話すと一端息を付いた。

……………確かに僕たちはあのゲートを通りたいわけではない……………  
ただゲートの先の世界に行きたいだけだ。

……………でもそれは本当に可能なのか？

つと、どうやらゲンナイさんが続きを話し始めるみたいですね……………

「つまりこの世界と向こうの世界を繋ぐ別の場所を通ればいい……………

そしてその場所の名は……………暗黒の海だ……………

知っているだろうか？」



僕たちはゲンナイさんの想定外の言葉に声を上げてしまった。  
暗黒の海！？ ヒカリさんや京さん、一乗寺君が迷い込んだ暗黒の  
世界の事ですか……

「……暗黒の海は様々な世界につながっている……」

だがあの場所は君たち選ばれし子供の力によって封じられている

……  
だが、逆に開けることも可能だ……」

「でも、そんなことをしたら……」

「もちろんそのことは考えている。」

お前たち選ばれし子供がその海に入る時と

向こうの世界に繋がるゲートを発見した時だけ、封印を解くのだ

……  
……どちらにしても危険だがな……」

「で、でもあの世界には！……」

「……デーモンが封じられているな……」

ヒカリさんの質問にゲンナイさんは小さく、そして力がこもった声  
でそう言った。

……一年前の戦いであまりにも強い力を持ったデジモン……デーモンを  
僕たちは暗黒の海に封じた……

……つまり暗黒の海にはデーモンがいるという事だ……

……なるほど……全員がたどり着けないとはこういう事ですか……

「……デーモンは君たち選ばれし子供が束になっても倒せなかったデジモン。」

……前回のような作戦が使えない今、

君たちにデーモンを退ける方法はない……」

……その通りですね……

前回は一乗寺君のD3のおかげでデーモンを暗黒の海に封じ込めることが出来ました。

……だけど今回は一乗寺君がいないし、何より、戦う場所が暗黒の海ならば

別の場所に送ることもできない……

「……それで暗黒の海へのゲートはどうやって開くんですか？」

僕……僕たちはその言葉に驚きの声を上げ、それを言った人の方を見た。

……大輔君だ

「……分かってるのか？」

暗黒の海に行くという事はデーモンと遭遇する確率が高い……

見つければ終わりなんだぞ？」

「なら見つからなければいいだけです！」

……俺は賢を探す方法があるのに黙って賢が帰ってくるのを待ってたりなんてできません！

……それに俺一人が行けば、みんなを巻き込むことに……

「大輔！！！」

大輔君が話している途中に太一さんが大きな声で大輔君の名前を呼んだ。

「……なに一人で解決しようとしてるんだよ？」

「ここにはこんなにも仲間がいるだろ？」

「……お前一人で何でも背負うんじゃねえーよ……」

「……でも太一さん！ デーモンに見つかれば全滅なんですよ！？」

「それなら俺一人が……」

「……それでもしお前がデーモンに殺されたら俺は……」

「俺たちはデーモンを倒しに暗黒の海に行くことになるな……」

太一さんは眼をつぶり、腕を組みながら困ったような表情でそう言った。

「……太一さん……あなたは……」

「……なら俺はお前と行くぞ！ 後で追いかけるなんて嫌だからな」

「……太一さん……」

大輔君の目に少しだけ涙のようなものが見えますね……  
だけど僕たちを忘れてもらっただら困ります……

「太一さん。それには勿論僕も誘ってくれるんですよ？」

太一さんは少しだけ驚いた表情をしたがすぐにニツツと笑って言った。

「勿論だ。……頼りにしてるぞ！」

「ちょっと待った！！！」

その声に僕たち三人は驚いて声が聞こえた方……京さんの方を見た。  
そこには僕たちとゲンナイさんを除く全員が  
少しだけ怒ったような顔をしてこっちを見ていた。

「私たちが誘わないなんて大輔はいつからそんな白状な男になったの？」

「京……」

「太一先輩が言ったように私たちは仲間なの！！！」

頼ってくれないと、悲しいわよ。

……それに私たちだって賢君をほっとけないのよ？」

京さんがそう言つと後ろの人たちもうんうんと頷いた。

「……………それでどうする？」

「私たちも誘ってくれるの？」

京さんの問いに大輔君は小さくため息を付いた。  
ただどすぐにうれしそうな顔をして言った。

「ならみんな……………俺と一緒に賢を探しに行つてくれるか？」

「……勿論！！！！」

大輔君の言葉に全員が肯定した。

「……………決まったようだな……………」

「はい！……………俺たちは暗黒の海に行きます！」

ゲンナイさんはその言葉に目をつぶった。  
そして険しい顔をして言った。

「……なら作戦決行日はどうする？」

「「「へ????」」」

「……君たちには学校というものがあるんだろ？」

それとも、行ってすぐに一乗寺賢が見つかるんでも思っていたのか？」

ゲンナイさんの言葉に大輔君はうつつと声を上げていた。

……そう思っていたようですね……

「なら作戦決行日は5日後にしましょう。」

その日には全員が終業式が終わって、夏休みにはいっています」

「でもそんなに時間がたつたら……」

「……仕方がないですよ……」

もし僕たちが今暗黒の海に行ったとして、

一乗寺君がすぐに見つからなかったら、

またすぐに暗黒の海を通らなくてははいけません……

一度目でもデーモンに見つかる可能性が高いのに、

二度同じ日に同じ場所を通るのは得策ではありません……」

僕がそう言つと大輔君は渋々納得してくれた。

「……なら作戦実行は5日後でいいんだな？」

「はい！！！」

僕たちは大きな声で返事をした。

第三十四話 残された方法（後書き）

デジモンを話させる隙間が見つかりませんでした・・・



第三十五話 出勤！ 暗黒の海（前書き）

皆さんすいません!!!

テストのせいで全く更新できませんでした……………

テストは金曜日までありますが、

余裕ができてきたので、

もうすぐ2、3日に一回の更新に戻せそうです。

……………後、小説の書き方を三人称に戻してみました！  
何か悪いところや感想があれば書いてもらえると助かります。

### 第三十五話 出動！ 暗黒の海

「……………本当に行くんだな？」

選ばれし子供たちが作戦決行を決めてから五日がたった。今日はゲートを開く約束していた日。ここには賢を除く選ばれし子供たちが集合していた。

「勿論です！！！」

そう強く返事を返したのはこの作戦を決行する切っ掛けとなった少年…大輔だった。

「心配はいらないですよ」

大輔の返事を聞いても未だに暗い顔をするゲンナイに太一はそう言った。

「確かにアイツがやっていたデジヴァイスの変化をさせることは出来ませんでしたか……………」

太一はそう言いながらも顔を少しだけ下に下げていた。

この五日間、太一たちとデジモンは何度もデジヴァイスを変化させようと

何度も挑戦した。

だが結局、黒コートの男のように変化させることは出来なかった。場に一瞬沈黙の空気が流れた……

すると太一はだけど、と少しだけ大きな声でそう呟き、顔を上げた。

「俺たちにはそんな物がなくなっただって、こんなに仲間がいるんです！！  
恐れる必要なんてないんです！！！！」

太一は周りを見渡しながらそう言った。

周りには賢を探しに行くと言えるところも自分も行くところも

言ってくれた仲間が……全員がそろっていた。

「そうよ！ それに私とミミが居れば、どんなデジモンも怖くないわ！」

植物の姿をしたデジモン……パルモンはパートナーのミミを見ながらそう言った。

「そうねパルモン！ 私たちが居ればどんな事態も楽勝ね！」

パルモンの言葉を返すようにミミはテンションが高いまま、大きな声でそう言った。

ミミも賢を探しに別のデジタルワールドに行くと言えたら、私も行く！

と言ってきた者の一人であった。基本的にミミは外国にいるため、年に数回会うか合わないくらいでしか会えないが、このどうやら向こうも今日から学校が休みなのか、一緒に行ってくれる事になった。

「……全くミミ君は変わらないな……」

ミミの様子にため息を付きながら丈はそう呟いた。

丈も有名な高校に行ったせい、毎日勉強をする日が続いている。それなのに賢のことを話すと丈は自分も行くと言い出したのだ。

太一たちは俺たちだけでも大丈夫と言ったが、丈は

「ここで一乗寺君のことを探しに行かなかつたら、

僕は勉強に集中出来そうにないから……」と言ったので、太一たちは丈を頼ることにしたのだ。

空やヤマトも同じような理由で一緒に来てくれることになった。

これで初代選ばれし子供は全員集合だ。

後ここに居ないのは賢だけだった。

「……最後にもう一度訪ねる。」

本当にいいんだな？」

「「「はい！！」「」」

ゲンナイの警告に子供たちとデジモンははいと返した。

ゲンナイは子供たちの決意を感じたのか、  
それともこれ以上言っても無駄だと思ったのかゆっくりと話し出した。

「……君たちの決意はよく分かった。

これ以上私が口を挟むのは君たちの決意を踏み握ることになるな

……」

ゲンナイはそう言つとゆっくりと子供たちに背を向けた。

「……付いてくるがいい……」

ゲンナイの呟きに子供たちとデジモンは返事を返し、ゲンナイの後を追っていった。

「……「」は……?」

子供たちの一人からそのような言葉が聞こえた。

誰が言ったかは分からないが、

その疑問は子供たちとデジモン全員が感じていた疑問だった。

その質問に答えるようにゲンナイはゆっくりと答えた。

「ここはゲートを安定して開けるために用意した場所だ」

へえ〜と子供たちは眩くと辺りを見回した。

この部屋の真中には大きな鏡のような物が置かれていた。

しかし鏡といってもその中にはガラスなどは無く、

空洞が開いていて、向こう側が見えるようになっていた。

「ここにあることをすることで暗黒の海へのゲートを開けることができる」

「……そのある事とは?」

「光の選ばれし子供のデジヴァイスでこの空洞に光を当てることで

ゲートは開く。」

「私のデジヴァイスでこのゲートを開ける？」

ゲンナイの言葉にヒカリは首をかしげた。

「……………どうして私のデジヴァイスで暗黒の海のゲートが開くんですか？」

暗黒の海のゲートは一条寺くんのデジヴァイスでしか開けられないはずじゃあ……………」

「確かに暗黒の海のゲートを封印したのは彼だ……………」

だが、君のデジヴァイスには闇に対する力がある。

それを使えば一時的にゲートを開けることは可能だ」

ゲンナイの説明を聞いて納得したのかヒカリは自分のデジヴァイスを見つめだした。

ゲンナイはポケットから地図のようなものとD3のような機械を取り出した。

それを持って光子郎の前まで移動して、光子郎の前で差し出した。

「……………そしてこれが向こうでゲートを開けるのに必要なものと、

その場所を示す地図だ。向こうに行くと自動的に起動するから、

その地図が示す周辺でゲートを開けるといい……………」

そうすれば無事もう一つのデジタルワールドに行くことは出来る

だろう……」

光子郎は地図と機械を受け取り、ゲンナイの説明に、はいと答えた。

「……健闘を祈っているぞ。選ばれし子供とそのパートナーたちよ……」

その言葉に子供たちとデジモンは元気よく返事を返した。

「じゃあゲートを開きます！」

ヒカリはそう言ってデジヴァイスをゲートに掲げた。すると空洞にゲートが出現した。

ゲートから発生した光に子供たちとデジモンは包まれ、光が消えるとそこに子供たちとデジモンは居なかった。

ゲンナイはその様子を静かに見守っていた。



第三十六話 手の上で踊る者たち（前書き）

あと・・・・・・・・後少して評価が100に ザワザワ・・・・・・・・

そしてユニークも5000超え!!!

ここまで読んでくださった方・・・・・・・・

ありがとうございます！

### 第三十六話 手の上で踊る者たち

「ここが暗黒の海……」

大輔は一人そう呟いた。

辺りは先程居た、デジタルワールドの、ような明るさはなく、心を不安にさせるような暗さをした場所だった。

「……暗黒の海……前来た時と全然変わってないわ……」

ヒカリはポツンと呟いた。

ヒカリと京、テイルモン、ホークモンは賢とワームモンと一緒にこの世界に迷い込んだことがあった。迷い込んだ時、ヒカリは恐怖状態に陥って、まともな状態ではなくなっていた。

「……ヒカリちゃん」

「……大丈夫ですよ京さん」

京の心配をヒカリはうち笑うような笑顔を見せることなくした。

当時、この場所でヒカリを支えたのは誰でもない京だった。  
絶望の言葉をあげるヒカリを説教し、  
そしてヒカリが一人ではないということを改めて教えた。

「私は闇だって照らせちゃう、光なんだから！」

「……………そうだったね！」

昔京に言われたことを今度は京に言つと、  
京は小さく笑った。  
ヒカリは心配しなくても大丈夫とおもったのだろ。

「皆さん。気をつけてくださいよ。」

……………デーモンに見つかれば厄介なことになるので……………  
……………」

光子郎の言葉に全員がコクリと頷いた。

子供たちとデジモンはゲンナイさんがくれた、地図を頼りに進んでいた。

暗黒の海にはデーモンの気配はおろか、デジモンの気配さえ全くなかった。

光子郎たちはそんな不気味な道をただひたすら、静かに進んだ。

……そしてしばらく歩くと広い場所に出た。

「……ねえ。コウシロウ。まだ着かないの？」

沈黙の空気が耐えられなかったのか、ブイモンは光子郎にそう尋ねた。

「後もう少しですよ」

光子郎は手に持っていた地図をブイモンに見えるように開き、現在地と目的地を指差した。

「……意外と呆気なかったですね。

結局、デーモン所かデジモンにさえ一体も出会わなかったですし……」

伊織はため息を付きながらそう呟いた。

伊織はこの中では最年少の選ばれし子供だ。

だが、そうだと言っても考え方はこの中でもかなり大人だ。

それは家庭状況や彼の父の事のせいかもしれない。

……とにかく伊織の考え方は大人に近いと言ってもいい。

伊織は今の状況に不可解な気持ちを持っていた。

彼は気が付いたのだろうか……余りにもうまくできすぎていることを……

他にもそれに気が付いている者も居たが、それはただうまく出来過ぎて、

ただ考え方が不安になっているだけだとその考えを切り捨てた。

「……もうすぐですね。

……一乗寺君が行った世界へと繋がるゲートの場所まで……」

タケルは質問もされていないのに、そう呟いた。

恐らく目的を口に出すことで、きちんと目的を確認しているのだろう。

その呟きが耳に入ったものは、真剣な表情になった。

「僕達たちはデーモンのことを経過しすぎたんだね……」

パタモンはまた緊迫しはじめた空気を緩めるためか、  
そう呟いた。

タケルたちはそれにそうだね、といった言葉をそれぞれ返した。

もうここまでくれば大丈夫……誰もがそう思い始めていたのだろう

……

『クツクツク……ワシがどうしたのだ？』

その瞬間、子供たちの時が止まった。

理解したくないのだろう……その言葉を放った者の事を……

「クツクツク……無視するとは酷いじゃないか……一年ぶりの再会  
だというのに」

言葉を返さない子供たちに対して声の主はニヤついたよな声で話し  
出した。

「それとも忘れてしまったのか？」

まあ無理もないな……人間にとっての一年はのそれなりの時間ら

しいからな……

まとも話していなかったワシのことなど覚えていなくても無理はないだろう……

どれ。自己紹介をしようか……」

子供たちの数十メートル先に姿を現したその者は、  
子供たちの想像どりの者だった。

「……デーモン……」

「クッククク……覚えていたのか……それは光栄なことだ！」

子供たちの誰かが呟いた言葉に対し、  
その者……デーモンはニヤ付きながらそう返してきた。

「ちきしょうー！！ 後もう少しだったのに！」

大輔は心からそう叫んだ。

あと少して目的地なのに……そんな思いが大輔の中で回っていた。

「クッククク……そうだな。」

後もう少して一乗寺賢がいる世界のゲートにたどり着けたのだっ  
たのだがな……」

「」「！……」「」

デーモンの言葉に全員が驚愕の表情をあげた。  
どうしてデーモンが自分たちの目的を！？  
……そんな考えが子供たちも頭の中を回し始めた。

「……いつからですか？  
いつから僕たちを付けていたんですか？」

そんな中光子郎はデーモンに尋ねた。

「どういう事！？ と声を上げる者も居たが、  
それに言葉を返す余裕があるものは居なかった……」

「……いつからだ！？  
クッククック……始めからだ。」

「お前らがこの世界にきた瞬間から、ワシはお前らの様子を見ていた！」

「……僕たちも目的を探るためですか？」

「ああ……。  
無いとは思うがワシを倒しに来た可能性があったからな……  
さすがに倒す準備をしているかもしれない者に  
簡単には接触しようとは思わなくてな……  
少々様子を見させてもらった……」



光子郎の問いに、デーモンはあっさりそう答えた。

子供たちはまさか最初から自分たちがデーモンの手の上で踊らされていたと知り、  
絶望の表情が顔に表れ始めた……

「……さてと。」

お前たちには一年前の借りを返さなくてはな……」

子供たちの様子にお構いなく、デーモンは戦闘態勢のようなものを取った。

その表情は、新しく手に入ったおもちゃでどうやって遊ぼうか考えている  
ような表情だった……

「……ちきしょう!!! やるしかないのか!?!」

大輔はそう叫びながらポケットからD3を取り出した。

「無理だ大輔!!! ここは引くしかない!」

「クッククック……逃げ切れるとも思っているのか?」

太一の叫びにデーモンは分かりきっていることを子供たちに尋ねてきた。

……今、デーモンから全員で逃げ切るなど不可能だ。

そんなことは全員が理解しており、

デーモンに直接そう言いかえされた太一はクツ！

と奥歯を噛みしめることしか出来なかった。

「クツクツク……」。

お前たちが生きてここから出るにはワシを倒すほか存在はしない  
！」

「クソツ！……やるしか無いのか!？」

太一はそう叫びながらポケットからデジヴァイスを取り出した。

他の子供たちもそれぞれデジヴァイスを取り出した。

「ダイスケ……俺、頑張るよ!！」

突然ブイモンが大輔の前に飛び出し、

そう言ってきた。

すると他のデジモンたちもそれぞれのパートナーの前に出た。

その視線はデーモンの方を見ていた。

「……私たちはパートナーデジモン……どんな時でもパートナーを守って見せる！」

テイルモンの言葉にそれぞれのデジモンが肯定の声をあげた。

「みんな……よし！ 行くぞ……！！！」

「……おう……！！！！」

デジモンたちの言葉を聞いて、  
消えかけていた闘志を再び燃え上がらせた子供たちは  
デジヴァイスを握る手をさらに強く握って言った。

「……進化だ……！！！」

子供たちの言葉に反応するようにデジヴァイスは光を発生させ、  
それぞれのデジモンを光で包みこんだ。

「アグモン進化……」

グレイモン！」

「テントモン進化……」

カプテリモン！」

「ガブモン進化……………」

ガルルモン！」

「ピヨモン進化……………」

バードラモン！」

「パルモン進化……………」

トゲモン！」

「ゴマモン進化……………」

イツカクモン！」

「ブイモン進化……………」

エクスブイモン！」

「ホークモン進化……………」

アキララモン！」

テイルモン、アキララモン、ジヨグレス進化……………」

シルフィーモン！」

「アルマジモン進化……………」

アンキロモン！」

「パタモン進化……」

エンジェモン！

エンジェモン、アンキロモン、ジョグレス進化……

シャッコウモン！」

成熟期7体と完全体2体になったパートナーデジモンはデーモンを睨みつけていた。

「クツクツク……少しは相手になってやるっ……」

第三十六話 手の上で踊る者たち（後書き）

進化が長い・・・・・・・・他にもっといい書き方はないのか？・・・

### 第三十七話 デーモン（前書き）

評価が1000突破・・・・・・・・

・・・・・・・・ついに1000突破しました!!!

はじめはどうせ私の作品なんて評価してくれない・・・・・・・・  
っと思っていました。

だけど、ある日評価されているのを見てびっくりしました！

まあそれでも1000突破するなんて思っていなかったんですけど・・  
・・

今回は文を細かくしてみました。

どうやらこうしたほうがクオリティが上がるらしいので・・・・・・・・  
・・・・・・・・でも見にくくなっているかもしれません・・・・・・・・

その場合は感想で悪いところや改善点を書いてくれると助かります  
！

## 第三十七話 デーモン

『メガフレーム!!』

グレイモンは戦いが勃発したと同時に  
自らの最大火力の必殺技をデーモンに向けて放った。  
それはデーモンに一直線に向かって飛び、  
後僅かで直撃するという距離まで接近した。

だがデーモンはそれを避けようとはせず、  
ただ薄気味悪い笑みを浮かべてそれを見ているだけだった。

そしてグレイモンの技がデーモンに直撃し、辺りに爆発音と粉塵が  
舞い上がった。

だがグレイモンたちは相手が自分よりも格上だと理解しているため  
か、  
それで気を抜いたりせず、他のデジモンとともに再び必殺技を放  
ち続けた。

デーモンの姿は粉塵のせいで見えない為、  
グレイモンたちの必殺技は先程デーモンが立っていた場所に向かっ  
て放たれた。  
そこに向かって放たれる必殺技はどうやら直撃しているらしく、  
爆発音が次々と鳴り響いた。

その事実にも誰もが疑問を覚えた。



デーモンがその気になればグレイモンたちの攻撃を避けるなど、造作もない……という事は、一年前の戦いで痛いほど身に染みている。

しかし、デーモンはそれを行っていない。

もしかしたら既に粉塵で全く見えない場所に立っているデーモンは偽物なんでは……

そんな考えが子供たちとデジモンの頭を回った。

しばらく技を放った後、子供たちはパートナーたちに撃つのをやめるように言った。

それにデジモンたちは驚いたりせず、すぐに撃つのをやめた。

誰もが不可解だと思っていたのだ。この状況を……

子供たちとデジモンはどこから現れるかと辺りを見回した。

粉塵の中にいるのはデーモンの偽物だと判断したためだろう。

そして、自分たちがエネルギーを使い果たした所に表れて、攻撃しにくる……

それがデーモンの作戦だと子供たちは判断した。

そして不快感を呼ぶような笑い声が聞こえてきた……粉塵の中から

……

「クツクツク……もういいのか？」

デーモンは戦闘開始早々から一步も動いては居なかった。

子供たちとデジモンはその事実絶望したが、  
すぐに思考を切り替え、  
相手にペースを取られないようにするためか光子郎がデモンに尋  
ねた。

「……………どうしてカブテリモンたちの攻撃を避けなかったんですか？」

その問いにデモンはニヤニヤとした表情で言ってきた。

「クッククク……………最初から一方的に倒すだけでは面白くもなんとも  
ない……………」

だから、私は、お前らにハンデを与えたのだ……………  
初めの攻撃は攻撃を防御することも避けることもなく、  
受けるというハンデをな……………」

その事実を聞き、子供たちは絶望せざるおえなくなった。

「……………さて……………」

今度は私の番だ……………精々楽しませてもらうぞ?」

それからは一方的な戦いだっただけ……………

デモンは眼にも止まらぬ速さでグレイモンたちに接近し、  
次々と攻撃を仕掛けた。

グレイモンたちも負けずに技を放つが、先程とは全く違い、その攻撃が当たることはなかった……

デーモンが繰り出す攻撃をグレイモンたちは受け、そして立ち上がり、攻撃を放つ、だがそれをデーモンは避ける……この繰り返しだった……

だがそれ以上に不可解なことがあった……

デーモンの攻撃はすべて直接攻撃のよるものであり、その攻撃がまとも命中しても、グレイモンたちはふらつきながらも立ち上がることが出来ていた。

……つまりデーモンは手加減をしているのだ……今の状況を楽しむために……

しかし子供たちに出来ることは何もなかった……

今までの戦いでも子供たちが出来るのは応援することと進化をさせることぐらいだったが、そのどちらも実行することは出来なかった……

……いや、応援することは出来ていた……だが、子供たちはそれをしなかった……

……子供たちは心の奥ではそれが意味のないことだと思っているのかも知れない……

今行われている戦いは今までに行われてきた戦いの中でも類を見ないほど、

圧倒的な状態だった……

パートナーデジモンは大半が自身の最大の力を発揮できる形態に

進化することが出来ない……

……仮に進化できたとしてもそれですらもデーモンを倒すこともできないだろう……

だが子供たちがデジモンたちを応援しない理由はほかにあった。

……それは純粹な恐れだろう。

目の前で大切な仲間が痛められている状況……

パートナーを失ってしまうかもしれない恐怖……

……子供たちにとっては自分がこの後どうなるかよりもそれが怖かった……

誰もがここに来たことを後悔した……

……いや、ここに来たことは後悔していなかったのかもしれない……だが、もう少し準備をしていたら……

デーモンと遭遇した時の対処方法でも考えておけば……

そんな考えが子供たちの頭を回った……

そして目の前で何かが倒れるのが見えた。

「……！！ シャッコウモン！？」

「クッククク……そいつの技は地味に厄介だったが所詮はその程度だ……」

子供たちの目線の先にはそれぞれのパートナーデジモンが映っていた……

その姿は先程のような戦闘に適した姿ではなく、  
弱弱しく弱った幼年期デジモンの姿をしていた。

子供たちはそれぞれのパートナーの元に駆け寄った……

だがそれは足元の近くに放たれたデーモンの攻撃によって遮られた。  
子供たちはそれに純粹に怒りを覚え、デーモンを憎むような目で睨  
めつけた。

「……ほおー……こんな状況まで追い詰められて  
まだそんな目を私に向けることが出来るのか……」

デーモンは感心したような素振りを見せた。

……しかし次の瞬間、恐ろしいほどの狂気を含んだ表情を浮かべた。

「クツクツク……私はお前たちの絶望した表情を見てみたくなった  
ぞ！」

突然自分たちに向けられて言われた言葉は  
先程話していた時とは明らかに何かが違っていた。

デーモンは近くに倒れていたチビモンに視線を向けるとニヤリと口  
元と緩ませた。

「お前たちを絶望に叩き落とす最高の作戦を思いついたぞ！」

デーモンは地面に倒れているチビモンに向かって腕を伸ばした。

その行動に子供たちはデーモンがやるうとしていたことが分かった。

「やめろおおおおおおおおおおお！！！」

その行動を理解したと同時に大輔はデーモンに停止の声を上げた。だがデーモンがそんなことで止まるはずはなく、

逆にチコモンの方に向けられた腕に炎のようなものを生み出した。炎は段々と大きさが増し、遂には大輔たちの身長ほどになった。

「グハハハハ！！！！ 死ぬ！！！！ フレイムインフェル……」

『デモンズランス！！』

デーモンが必殺技を叫び終えるよりも前に空から何者かの声が響き、デーモンの言葉を遮った。

そしてデーモンに向かって飛んできたのは闇をまとった槍のようなものだった……

デーモンはそれを直視したと同時に、それが今まで戦っていたグレイモンたちよりも

遙かに危険なものだと、直感で判断した。

デーモンは余りにも突然のことだと思っただけの世界に入りかけていた。だが、すぐそこまで迫った闇の槍に気が付き、デーモンはそれを最小限の動きで避けた。

だが、それが地面に直撃したと同時に闇の槍は大きな爆発を上げた。デーモンはその爆発を喰らい、その技の本当の強さは鋭く尖った闇の槍で相手を貫くのではなく、槍が当たったと同時に巻き起こる爆発が本当の使い方だと理解した。

## side大輔

チコモンに放たれそうになったデーモンの技を見て、俺はもうダメだと諦めてしまいそうになった……誰が見ても分かるほど劣勢なこの状況……俺たちにはすでにデーモンを止める力はなかった……いや……そんなものは初めから無かったのかもしれない。

そんなことを考えているとデーモンは自分の技を言い始めた。

俺はこれから起こることを想像してしまい、  
思わず目をつぶってしまった……

そしてデーモンの技が言い終わる……直前に空から聞き覚えのある  
声が響いてきた。

思わず俺は目を開き、その声の方を見た。

そこには真っ暗なコートを着た者が闇をまとった槍を投げつけてい  
るところだった。

その槍は真っ直ぐデーモンに飛んでいき、そしてデーモンのすぐ近  
くまで接近した。

だがそれをデーモンは避けた。だけどそれと同時に闇の槍がすごい  
爆発を発生させ、

デーモンを黒い炎で覆い尽くした。

それと同時に黒コートの奴は地面に着地した。

奴はちらりとこつちを一瞬振り向くかえると、  
すぐにデーモンの方を見て、右手を横に挙げた。

それと同時に俺たちの足元に闇が発生した。

その闇は俺たちを少しずつ飲み込んできた。

俺たちは必死に抵抗した……闇に飲みこまれないために……

だが既に力を使い果たして倒れているチビモンたちにそんな力は無  
く、



あつという間に闇の中へと飲み込んだ。

俺もみんなも自分たちを飲み込む闇に抵抗しながら  
必死にチビモンたちの声を叫んだ。  
だがそれに返事が返ってくることはなかった……

「てめえ!!! よくもチビモンたちを……!!!」

俺は黒コートに怒りの言葉を叫んだ。

しかし黒コートの奴はそんなことも気にせず、すぐに言葉を返してきた。

「……チビモンたちは無事だ……」

この闇は闇の回路だ……危険は無い……  
だからお前たちも抵抗せずに闇に飲まれる……!」

「そんなこと信じれるかよ!!!」

「そうだ!!! こんな闇に危険が無いなんて嘘だ!!!」

「……速くしろ!」

デーモンの動きを止めていられるものもう僅かだ!  
……このままじゃお前たちはデーモンに殺されるぞ!？」

俺とタケルの言葉に対し、

奴は本当に時間が無いと言わんばかりの声でそう言ってきた……

……確かにこのままじゃ俺たちはデーモンに殺される……

……でもだからって闇に無抵抗に飲み込まれると言われても無理だ！

俺たちは奴の言葉を聞きながら必死に闇から抵抗していた……

だが、後ろの方から誰かの声が聞こえてきた……

「……この闇は多分大丈夫……」

ヒカリちゃんは俺たちに聞こえるような声でそう言ってきた……

「大丈夫って！？ どうしてそんなことが分かるんだ？ ヒカリ？」

「……なんとなくそんな気がするの……」

それにこの闇は大丈夫なんでしょ？」

「……ああ……今回のこの闇はお前たちに全く害はない。  
約束しよう……」

太一さんの質問にヒカリちゃんは曖昧に答えて、それを奴が補足した……

「……貴方は嘘はつかなかった……だから私はそれを信じる！」

ヒカリちゃんはそう言っていると今まで必死に抵抗していた動きをやめた。それと同時にヒカリちゃんはあっという間に闇に飲みこまれてしまった。

その光景を見て俺たちはヒカリちゃんの名前を叫んだが、先程同様、返事は帰って来なかった……

「!!!! 速くしろ!!!! デーモンを抑えていた炎が消えかかっている!」

奴の言葉道理、デーモンを困っていた黒い炎は消えかかっていた……  
それを見て光子郎さんは決意したらしく、俺たちに言った……

「……皆さん!!!! ……ここは彼を信じましょう!」

「光子郎さん! でも……」

「そんなことを言っている暇はありません! ……それに彼は嘘はつかない……  
それだけは絶対に嘘ではないはずです!」

光子郎さんはそう言っていると同時に動きを辞めた。そして先程のように闇は光子郎さんをあっという間に吸い込んでし

まった……

俺たちは少し悩んだが、光子郎さんと同じように抵抗するのを辞めた。

すると闇がすごい勢いで吸い込んできた。

抵抗しようとする衝動を必死に抑え、

そして俺たちは闇の中へと吸い込まれてしまった……

side out

「……………行ったか……………」

俺はあいつらが全員姿を消したのを見て、少しだけ張っていた気を抜いた……………

「……………どういつつもりだ？なぜお前は这个世界にいる？

……………お前は何者だ？」

デーモンが俺に向かって質問をしてきた。

……………すでに奴を抑えていた闇の炎は消え去ったのか……………

「……………どちらにも答えられないな……………」

「……………なら別の事を問おう……………お前はなぜあいつ等を助けるような真似をしたんだ？

選ばれし子供たちの様子から、お前は奴と敵対している関係のはずだ」

「……………俺にもいろいろ理由があるんだよ……………めんどくさいことにな……………」

俺はそう言いながら先程と同じように腕を上げ、

そして自分の背後に闇の回路を発生させた。

だがそこに不可解なことが起きた……………

「……どうした？ このまま俺を逃がしてもいいのか？」

デーモンはここから脱出しようとしている俺を止めようとはせず、ただ俺の事をジッと見ていた。

「……お前の存在があまりにもイレギュラーすぎてな……

全く理解できないのだよ……お前という存在が……

だから今回は見逃そう……私も今

何者かと分からない者と戦う時ではないのでな……」

「……そのセリフ的に、何時かは戦う、っていう事か？」

「恐らくな」

俺はその発言にあることを推測したが、今は何もできないと判断し、闇の回路の中へと消えた。

第三十八話 INXECT（前書き）

・・・・・・・・やっところまで来ました・・・・・・・・

頭の中ではこの話まではすぐに行く予定だったんですが結局40話  
近くまで来てしまいました・・・・・・・・

今のところは初期設定のままです書いていますが、  
それもいつまでもつかどうか・・・・・・・・

## 第三十八話 INXECT

side大輔

俺は闇のに吸い込まれ、真っ暗な場所に少し居た。

ただどしばらくすると後ろに光が見え、体がそこに吸い込まれていった……

そして突然目の前に日差しが差した。

ドオンっと地面に尻餅を着いた俺は少しだけ打った尻を撫でた。

「……皆さんも彼を信じてくれたんですね……」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた……

「……!!! 光子郎さん!?!」

俺が光子郎さんに向かって返事をするのとそれと被るように声が聞こえてきた。

俺はその時初めて周りを見渡した……

そこには俺と同じように尻を撫でている太一さんたちとパートナーデジモンの姿があった……



「!!!! 太一さん!?!」

「よう大輔……お互い無事のようだな!」

「はい! 俺は大丈夫です!!!!」

……太一さんたちも大丈夫そうですね!!!!」

「ああ……そのようだな」

太一さんと俺は周りで座り込んでいるみんなを見ながら言った。

「……どうやら私たちは元のデジタルワールドに飛ばされたみたい

……」

「ヒカリちゃん!?!」

光子郎さんの後ろからヒカリちゃんが歩いてきたそう言った。

……どうやらヒカリちゃんにも怪我はなさそうだ!

「……ここはゲンナイさんの家の近くです。

一度ゲンナイさんに……!!!!」

光子郎さんはそこまで言うと言った俺たちの後ろの方を目が見開くように見ていた。

ヒカリちゃんもビックリするようにそこを見ていたから俺……俺たちも

後ろを振り返ってみた……

そこには殺風景な景色が広がっており、そこに不自然なように存在する暗闇……闇が小さく広がっていた……その闇はあつという間に大男一人が通れるぐらいまで広がり、そしてその中から、俺より少しだけ小さい大きさの影がそこから見えてきた……

……そこから現れたのは黒コートの奴だった……

「……全員怪我は無いようだな……」

「……どういっつもりだ？」

突然俺たちを助けるなんて……」

俺は男の問いを無視して疑問を投げかけた。

「……大輔君！……彼は理由があったのでしょうが僕たちを助けてくれたんです。」

……一様お礼は言っておかないと……」

うっつと俺は声を上げた。

……確かに助けては貰ったがこんな奴にお礼なんて言いたくない……そう光子郎さんに言おうとしたらその後ろで何か恐ろしい気配を感じた。

ゆっくりと振り返ってみるとそこに笑顔でこっちを向く

ヒカリちゃんの姿があった。

だがその笑顔には同時にそれ以上の怖さがあった……

「……タスケテクレテアリガトウ」

かなりボー読みになったが、ヒカリちゃんから怖さが消えた。  
……どうやら今のでよかつたらしい

奴も俺が礼なんていうと思ってなく、  
それと俺がボー読みで言ったのを疑問に思ったらしく不意に  
俺の後ろの方にいるヒカリちゃんの方を見た。

「……お前も大変だな……」

……どうやらそれだけで状況を理解したみたいだ……  
奴が今までしてきたことを許すことは出来ないが、  
仲良くはなれるかもと俺は少しだけ思った……

コホンッとワザとらしい咳を光子郎さんはした。

……どうやら空気を換えるらしい……

「……今回は助けてくださり、ありがとうございます。

……しかしどうして暗黒の海に居たのですか？

あの海は封印られていており、

先程ヒカリさんのD3を使うしか一乗寺君のD3でしか開けることは出来ないと言われました……」

「……お前たち、だけの場合はそうだろうな……」

奴はお前たちを強調するように言ってきた……という事は奴にはそれ以外の方法があるってことか……

「……キープレード、ですか……」。

……それでもどうしてそこまでして暗黒の海に行ったんですか？あの世界には貴方が必要しそうな者は何もありません……

あなたがあのタイミングであそこにいたのは僕たちを付けていたか、

……わざわざ助けに来たか、その二つしかありません……

「……………」

「……もし、最初から付けていたとしたらなぜ僕たちを助けたかが分かりません。」

デーモンとの戦いに巻き込まれるなんて、

貴方にはマイナスの以外のなんでもありません……」。

……質問します……貴方はどうして暗黒の海に居たんですか？」

奴はフードの中から光子郎さんの事をしばらく見つめると、大きくため息を付いた。

「……お前……最初に会った時よりも厄介になってるぞ……」

「ええ。……誰かさんのおかげですね」

「……お前の言う通りだ……俺はお前らが暗黒の海に行ったと聞き、わざわざ助けに行っただよ……」

「……理由は聞いても？」

「……俺はある奴らと組んでいてな……」

そいつ等とは目的が一部一致するから組んでいるんだが、その組んでいる奴の一人にお前らの身を案ずる奴が居て、

俺が基本的に暇なのを良い事に俺にお前らのことを頼んできたんだよ……。

「もし大輔たちに何かあったら頼みます」ってな……」

「大輔くんたちって……！！！！」

どうしてお前が賢たちと手を組んでるんだよ！？」

俺は奴の言葉から、奴の俺達の事を頼んだのが賢だと気付き、

なぜ賢がこいつとなんか……と困惑しながらも奴に質問を投げかけた。

「言っただろ……俺の目的と奴らの目的は一部一致するところがある……」

だから一時手を組んでいるだけだ」

「……一乗寺君たちという事は秋山君も一緒という事ですか？」

「ああ」

光子郎さんの質問に奴はあっさりと答えた。

「……という事で俺はお前たちの事を奴らに任せられている……  
お前たちの行動を拘束したりはしないが、  
危険なことはするな……」

……それが一乗寺賢の願いでもある」

「……なら俺たちはどうしたらいいんだよ!？」

俺は思ったことを口にした。

俺は賢を探すために危険を冒してまで暗黒の海に行った……。  
だがその作戦は失敗し、後少して全滅と言われる所まで追い詰められた。  
もうダメだ! ……そう思った瞬間空から奴が来て、俺たちを助けた……

……はつきり言って不愉快だった……だってあいつは  
あまりにも大事なものを俺たちの目の前で奪いすぎている……

そしてこいつが俺たちを助けた理由は賢が頼んだからだとよ……

なら俺たちはどうしたらよかったんだ!？」

……どうしたらよかったんだ……

「……やりたい様にすればいいだろ」

俺の思考を遮るように奴はそう言ってきた。

「……やりたい様にやれって？」

やりたい様にやったから俺は仲間を危険にさらしたんだぞ……!!」

「……やりたい事が常に正解で安全である筈がないだろ……」

それに仲間の事もお前がそこまで気にする必要はないだろう。

……こいつらは自分の遺志で暗黒の海に行ったんだろ？」

……お前が無理やり連れて行ったんなら話は別だが……」

「そんなことする筈がないだろ……!!」

「ならさっき言った通りだ。

アイツらは危険だと分かっているもお前に付いて行く事を決めた

……それはあいつ等も一乗寺賢を探したいと心から思ってたからだ。

……お前はそんな決意を無駄にしてまで自分に責任を押し付けた  
いのか？」

「……………」

俺は奴に言われたことに対して何も言い返せなかった。

「…………大輔。」

俺は別にお前が危険な場所に行くから付いてきたわけじゃないんだぜ？

…………俺もお前と同じで賢が心配だった…………

そして同時に賢が勝手に秋山と旅に出たことに対して怒っている

…………

…………俺たちという仲間が居ながら何の相談もなしに行ったんだからな。

だから次あつたらドカンと言ってやりたいんだ！」

太一さんの言葉にヒカリちゃんたちも頷いていた。

…………太一さんたちも俺と一緒に賢を探したかったんだ…………。

そして危険なことに巻き込まれているなら一緒に戦いたかった…………

…………それが危険なことだと分かっている…………

…………俺は無駄にいろいろ背負いすぎているのかもな…………

「…………やっとその表情になったか…………」

…………そうするために似合いもしないのに俺がわざわざ説教をしてやったんだ…………

少しは感謝しろよ…………」

「…………似合わないことをしましたね…………」



俺が顔を上げると奴がため息を付きながらそう言ってきた。  
……悪かったな。手間をかけさせて……

光子郎さん、俺もそう思います。

「そう？ 私は結構板についてる気がしたわよ？」

ヒカリちゃんはそれを否定するように言ってきた……  
……いや、絶対合ってないって。

「……だが今回したことは自分も仲間も命を落とすほどの間違いだった……」

……言いたいことは分かるな？」

「……次は同じ失敗をするな、だろ？」

俺の答えに奴は小さく笑うと俺たちに背を向けた。

これから奴がすることに光子郎さんはいち早く気が付き、奴に言った。

「待ってください！！ 貴方は僕たちの敵じゃない……  
なら一緒に手を組みませんか？」

「……手を組む？」

「はい。僕は……僕たちは別に一乗寺君を探すのを諦めたわけはありません。」

……ですから、

貴方には一乗寺君の行った世界に繋がるゲートを開けて欲しいんです！」

「……俺は別にお前らの思っているような仲間では無い……」

俺はただ一乗寺賢に頼まれたのもあって、わざわざお前らを助けに来ただけだ……」

お前らと手を組む必要性を感じない」

光子郎さんの提案を奴は却下し、向こうへと歩き出した。

……まずい、このままじゃ賢を追いかける最後の手段が……」

「……………わよ……………」

ヒカリちゃんが何かを小さく呟いた。

だが奴はそれに気づかず、また一步向こうへ足を進めた……」

「……………貴方が手を組まなかったら私たち、また暗黒の海に行っちゃうかも……………」

悪魔のような笑みでそう言った。

奴も驚いたのかシュッとこちらを振り向いて言った。

「……お前たちは今回の事で向こうが危険なことは理解しただが……」

「でも、また何か作戦が出来たら行くことになると思うわ。  
……だって私たちにはそれ以外一乗寺君たちを追いかける方法は無いもの……」

ヒカリちゃんの言葉に俺たちは啞然となった。

ヒカリちゃんの言っていることはあまりにも脅しだ。

奴は俺たちがどんな作戦を立てていたとしてもまた暗黒の海に行つてしまった場合、

助けに行かなくてはならないだろう……。

なぜなら、奴は賢たちと手を組んでいる。

……そこで俺たちが死ぬようなことになれば恐らく賢たちの信用を失う……

……奴と賢たちの関係なんてそんな物だろう。

だってあいつはデジタマを壊すような奴なんだから……

賢たちもそれぐらいは知ってるだろう……

「……俺を脅しているのか？」

奴は少し低い声でヒカリちゃんにそう尋ねた。

……まあそう思うよな……

「そんなつもりはないわ。でもその通りでしょ？」

それに貴方は一乗寺君に私たちを頼むって言われているんでしょ？

ならその言葉通り貴方は私たちを見守らなきゃならないわ……

そうでしょ？」

ヒカリちゃんの言葉に俺たちは茫然となりながら男の対応を見ていた。

……確かに俺たちはもう暗黒の海に行つて

賢が行つた世界のゲートに行くしか方法はない。

そして賢の言葉通りなら奴は俺たちが危険な場所に行く場合、

その行動を見守らなきゃならない……

……奴が可哀そうに見えてきた……

奴はヒカリちゃんの言葉に黙り込んだ。

何かを考え込んでいる様だ。

……でも俺は知っている……

こうなつてしまったヒカリちゃんを止めるすべはないという事を……

奴が突然大きなため息を付いた。

……そのため息を今日付いたため息の中でも一番デカかった。

「……分かった。」

お前たちと一時的に手を組もう。

……俺もお前らが勝手に死ぬのは困るんで……」

「そう……!! よかったわ!」

奴の言葉にヒカリちゃんは喜びの声を上げていた。

……ヒカリちゃんはたまに怖い……

俺たちはそれを再認識した。

「……で、出発は明日でいいのか?」

「そ、そうですね……」

テントモンたちを治療することを考えたらそうなりますね……」

ヒカリちゃんの一面に驚いていた光子郎さんは少しだけ、慌てていた。

……奴は何時もと変わりなく、話していた。

……奴はすごい奴なんだなと俺は心の底から思った。

「……なら明日、ゲンナイの家に集合しろ。

時間はいつでもいい。

お前らが全員集まったら俺も姿を現す」

奴はそう言っつて先程のように背を向けて歩き出した。

「あー!! 待って!」

それをヒカリちゃんはまた呼び止めた。

「……………今度はなんだ?」

奴はだるそうな声でそう言っつてきた。

……………だがその様子は何時もと変わりなく、コートの上からでも分かるくらい、  
ピシッと背筋が伸びていた。

「まだ貴方の名前をきいてないでしょ?」

「……………名前なんて必要……………」

「手を組むことになっつたんだから無いと不便だわ!」

奴の言葉を遮るようにヒカリちゃんは言っつた。

……………そう言えば俺たちはアイツの名前を知らないなあ。

「……俺の事は好きに呼ぶがいい……」

「……真っ黒やフード男……とかでもいいの？」

「ああ」

その言葉にヒカリちゃんは少し困っていた。

……あのヒカリちゃんに言葉勝ちするなんて……なんて奴だ！

「……人の名前を決めるなんて俺たちには出来ない……  
だからお前が自分の呼び名を考えてくれ……」

太一さんが助け船を出すように奴に言った。

……確かに話せる奴の名前を勝手に決めるなんて俺たちには出来ないな……

しかも奴自身が決めれば、もしかしたら本名か、  
それに近い言葉を言うかもしれない……

「……INSEKT……俺の名はインゼクトだ……ゼクトとでも呼ぶがいい……」

「……ゼクト君ね！ よろしく！」

「……ああ」

奴……ゼクトはヒカリちゃんに短すそう返すと、  
ゆっくりと向こうの方へと歩いて行った……



第三十八話 INXECT（後書き）

i n x e k t でインゼクト・・・・・・・・あっているでしょうか？

・・・・・・・・皆さんはネーミングセンスが悪いとか言うかもしれない  
せんね・・・・・・・・

後、リリカルのインゼクトは関係ありません！！！！

第三十九話 新たな世界への旅たち（前書き）

・・・・・・・・・・やっとここまで書けました。

頭の中ではこんなにかかる筈ではなかったのに・・・・・・・・・・という  
思考で埋め尽くされています。

・・・・・・・・・・無駄な描写が多すぎますかね？

そして次からは新章突入です！！！！

### 第三十九話 新たな世界への旅たち

大輔たちは黒コートの奴……ゼクトと別れた後、ヤマトの家に集合していた。

理由は一度、今後の事を話し合いたちという光子郎の提案と、その時偶然父が残業で家にいないという事でヤマトの家にお邪魔していた。

大輔たちの目の前には中々食べる機会がない、豪勢なピザが机の上を占拠していた。

「ヤマト先輩」。

本当食べていいんですか!？」

「ああ。

さっき言った通り、親父に連絡を取ったら出前でも取れって言われたんだ。

気にせず食べる」

ヤマトの言葉に大輔はそれじゃあ〜と大きな手で手を合わせ、そして目の前のピザの一切れを手を取った。

うめえ〜と歓喜を上げる大輔に苦情しながら太一たちもピザを口に運んだ。

「……………それではこれからの話をしましょう」

大量のピザを食べ終えた大輔は机の上を片付けて、  
本来の目的であるこれからについて話し始めた。

「……………僕たちはゼクト君と手を組むことになりました。  
これは非常にありがたいですね」

「ええ。彼が居ればわざわざ暗黒の海に行かなくとも  
あのゲートの先に行くことが出来るもの！」

「空さんの言う通りです。  
彼のキーブレードがあれば一乗寺君たちが  
くぐったゲートを直接通ることだ出来ます……………」

ですが、と光子郎はいったん話を区切り、そして言った。

「……すでに一乗寺君たちがゲートを通ってからかなりの時間がたっています。」

たとえゲートを通っても、一乗寺君たちを探し出すのは困難です……」

「……今の内に何か対策を考えておきたい……という事だな？」

「はい」

太一という言葉にどうしろはコクンと頷いた。

「……確かに何の策もなしに一乗寺君たちを探し出すのは無可能に近いですね……」

「行けるところ全部探したら見つかるんじゃない？」

この中で最年少の伊織の意見にミミはアゴに手をくけながらそう答えた。

ミミの言葉にさすがミミお姉さま！という目を向けている京がいた。

「伊織君の言う通り、無策じゃ一乗寺君たちに会うなんてほぼ不可能です。」

……ミミさんの意見も僕たちが探し回っている間に一乗寺君たちが移動してしまう可能性が高いです」

光子郎の言葉にミミはムウと口を膨らませた。

「……じゃあ一乗寺君たちの旅の目的を考えればいいんじゃないかな？」

「旅の目的ですか？」

「うん。」

一乗寺君たちがどうして旅をしているかを考えるんだ。

それが分かれば僕達はその道を頼りに一条寺くんたちを探すことができる」

大輔の疑問に答えながら丈は答えた。

他の子供達もそれに賛同し、そのことについて話し合う事になった。

「……まず一乗寺君は母親にデジタルワールドを救いに行くと言ったそうです……」

このことから一乗寺君たちはデジタルワールドを救うために戦っているという事が予想できます……しかし……

「……一乗寺君たちは別のデジタルワールドへ行った。」

……つまり一乗寺君たちの目的はここでは果たせないということですね？」

「……はい。……思い出してください。」

一乗寺君が旅立つ決心を立てたのは秋山君と接触したからです。そして秋山君の目的はこの世界で起きている異変を止めること……つまりミレニアモンを倒すことです」

タケルの言葉に続けるように光子郎は話を続けた。

「なら俺たちもミレニアモンを探せばいい、っていう事ですね？」

「……それがそうもいかないんです……」

どういう事？ と子供たちの大半が疑問を含んだ目で光子郎を見つめた。

「……前にも言いましたが、ミレニアモンは究極体デジモンです……僕たちがミレニアモンたちと鉢合わせになったら全滅は免れませ  
ん」

光子郎の言葉にここに居る全員が俯いた。

今の自分たちが究極体と出会えばどうなるかは

今日の体験で身に染みるほど理解している。

自分たちの無謀な作戦のせいで命を落としかけたのだ。

もし、ゼクトが助けに来なかったら自分たちの命は無かったと誰もが理解している。

「……だから僕たちはミレニアモンを探しながらも  
ミレニアモンとは合ってはならないのです……」

その意見に大輔以外はすぐに納得し、  
光子郎の言葉で大輔も不服ながら納得した。

「……後はゼクト君の事です」

その言葉で子供たちは話し出した。

「……彼は確かに私たちを助けてくれた。  
……でも私は彼がやっていることは許せない！」

「私も空さんと同じ意見です！  
……私はまだ目の前で死んでいったイガモンの事を忘れられませ  
ん……」

空と京は自身の気持ちを隠すことなく言葉にした。  
彼女たちもゼクトと手を組まないといけないことは理解している。  
だが、理解していると言ってもそれはただ分かっているだけ。  
彼の事を認めることは今の彼女らたちには無理なことだった。

しかし、それに対するようにヒカリが自身の意見を話し始めた。



「……私はやっぱり彼……ゼクト君を悪いデジモンとは思えないの……」

「……それには理由はあるのか？」

ヒカリの言葉に太一は先日から気になっていたことをヒカリに尋ねた。

ヒカリは光の紋章に選ばれし子供であり、闇の力に人一倍敏感である。

そんなヒカリが闇の存在であるゼクトに悪い感情を持っていないことはここにいる全員が知っていた。

太一以外もそれが気になっていたのか、

太一がそう質問するとピタリと各々の言葉が消え、

その目はヒカリに対して向けられていた。

「……分からないの。」

私も彼がどんなに悪いことをしているかは分かっているの！

……でもどうしても彼を悪いデジモンだとは思えないの……」

ヒカリは消えるような声でそう告げると顔を俯けてしまった。

太一たちもどうしたらいいかと試行錯誤したが、

結局は思い浮かばず、

結局いつの間にかもとに戻っていたヒカリに安堵の息を漏らしたか、結構な時間になったため、それぞれは自分の家へと帰っていった。

「おはよう！ みんな」

「もう来てたのか……」

翌日、太一とヒカリは起床してすぐ、寝る前に準備した小さなバッグを背負ってデジタルワールドに足を運んだ。

そしてゲンナイの家に向かった。だが行ってみるとそこにはすでに自分たちを除く選ばれし子供と、各々のパートナーデジモンがゲンナイさんと話し込んでいた。

太一たちが足跡を立てて近づくとそれに大輔が気づき、太一とヒカリに対して  
元気な挨拶をしてきた。

その挨拶に他の子供たちも気づき、それぞれ挨拶を返してきた。ゲンナイも太一たちが来たのに気づき、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

太一とヒカリはとゲンナイに挨拶を交わした。

しばらくするとそこにいる誰かが、ふとある言葉を漏らした。

「……全員そろったら現れるとか言ってたけど、  
現れないじゃない……」

子供たちは確かにとその言葉に同意した。

ゼクトは全員がそろったらゲンナイの家に現れると言った。

だが、全員がそろった今でも彼の姿は無く、現れる気配もなかった。

騙されたんじゃない？と声を上げるものが現れる中、それは破られた。

「……ずいぶんと速い集合だな」

ゲンナイの家の裏の方からトコトコと歩きながらゼクトは言った。

「……さて全員そろった事だ、  
今からゲートに向かうか？」

光子郎たちはゼクトの言葉に無言で頷き、ゲートがある場所まで歩いて行った。

「……………」

ゼクトはそう言つと目の前にある多いな闇の渦……ゲートを見上げた。

ゲートは前見た時と何の変りもなくそこに存在していた。

「……ゲートを開けるぞ。いいんだな？」

ゼクトは子供たちに最後の確認を促した。

それに対して子供たちとデジモンは頷いた。

ゼクトは無言で右手を前にかざした。

するとシュツという音と同時に漆黒のキープレードが出現した。

そのキープレードの先端に光が出現し、

それがゲートに向かって放たれた。

その光を受けたゲートは中心に集まるように維持させていたゲートがその中心から開くようにゲートが開いていた。

それにゼクトは無言で飛び込んだ。

ゲートの中心に触れると同時にゼクトの姿は消え、

そこにはゲートだけが取り残されていた。

「……よあゝし、俺も！」

ゼクトがゲートの中に消えてから数秒、

大輔が意を決したのか空元気のような声でそう叫び、

ゲートへと飛び込んだ。

すると大輔の体はゼクトと同じように消えていった。

「ダイスケ、俺も!!」

大輔が飛び込んだのを目にしたと同時にブイモンは大輔を追いかけるように、

ゲートへと飛び込んだ。

そしてその体は大輔たちと同じようにそこにはなかった。

「……よし。俺たちも!」

大輔たちの行動から、

ゲートへ対する恐怖が消えた他の子供たちはパートナーデジモンを抱え、

次々とゲートへと身を投げた。

そして最後のペアーがゲートへ姿を消すと、そこにはゲートだけが空しく存在していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6778v/>

---

デジモンアドベンチャー02 闇と光

2011年10月14日00時53分発行